どうしようもなく正しい、世界の流れ

まなぶおじさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦闘機履修者とエルヴィン、カエサルと左衛門佐、そしておりょうは、ごく普通の友人グループだった。

けれどエルヴィンは、戦闘機履修者のことが好きで、

戦闘機履修者は、おりょうに一目惚れしていて、

おりょうは、新たに出会った剣道履修者と恋に落ちあっていた。

歴史、ミリタリー監修をしてくださった霜月天籟様、本当にありがとうございました。

目次

片思い―前編―　1
片思い―後編―　65
両思い　104
松本里子　166
誕生日企画
エンディング　199

片思い―前編―

いま、とても気になっている女の子がいる。
どこもかしこも「夏休み何してたー？」とか「お前、あの自由研究はねえだろー」とか「海で死にかけた」とか、小学生最後の夏休みについて思いを馳せているというのに、赤木の心中は静かに穏やかでなくなってしまっていた。
それもこれも、隣の席で「初心者にもわかるドイツ語」を読んでいる松本里子が原因だ。

――夏休み前まで、時は遡る。
小学六年生になって、はじめて松本里子というクラスメートと一緒になった。松本はいわゆる「無口で大人しく、友達がいない読書家」タイプで、当初は「接点が見当たらないから、邪魔しないようにしよう」と思っていた。互いに離れた席についていたから、尚更だ。
ところが夏休み直前になって、何の偶然か松本と隣同士の席に割り当てられてしまった。
こうなると、松本とは他人ではいられない。何とか仲良く出来ないかと思ったし、かといってドゥーエの「制空」という本をきっかけに語り合えるはずがない。赤木は根っからの戦闘機道ファンではあったのだが、単なる飛行機好きであって、歴史にはとんと詳しくなどないのだ。
何度か、松本の表情をちらりと見つめたことはある。とにかく無表情で、目の前の本にしか関心を示していなさそうで、他のクラスメートと違って「クール」そうであったから、安易に声をかけられない雰囲気があった。
――ろくな会話なんて、
「隣同士か、よろしくな」
「ああ、よろしく」
これきりだ。
様々な友人と付き合ってきて、時には不機嫌顔に見舞われ、時々は

ケンカをしてきたからこそ、「無理して仲良くしようとするのはヤボ」という機敏さは身につけているつもりだ。
だから、松本さんとはこのままで良いのかもしれない。隣同士だからといって、無理やり仲良くなるほうが失礼だ――そう、結論付けていたのに、
休み時間、友人達と夏休みの予定を話し合っている時に、松本がおれたちを見つめていた。
視線に気づいたのは、赤木だけだった。目と目があった瞬間に、「あっ」――松本は逃げるようにして、本に視線を落としてしまった。
うるさいから視線で訴えてきたのか、違う。本当にまったくの偶然で視線が合っただけなのか、これも違う。話題に興味があったから、聞き耳を立てていたのか。少し当たっていると思う。
――松本は、話に入りたかったんだ。
だって、松本の瞳は揺れていたから。
隣の席にいるから、はっきり見えた。
この瞬間から、松本里子のことが気になりだしてしまった。
何とか友達になれないかと、自分なりに真剣に考えた。
けれど、これといって接点が見当たらなかったし、読んでいる本も難しそうだしで、きっかけがまるで掴めなかったのだ。
そうして、あっという間に夏休みが訪れた。
夏休みの壁といえば宿題だが、人によっては自由研究こそが鉄壁だと言う奴もいる。夏休み前に、友人達も「自由研究どーするよ」とボヤいていたし。
しかし、赤木に限って言えば自由研究なんて楽勝そのものだった。テーマといえば戦闘機道一択で、家族旅行と称して会場にまで出向いたこともある。両親ともども盛り上がっていたし、良い思い出となったものだ。
そうして赤木は、宿題そっちのけで自由研究の編集に取り掛かった。戦闘機道のここがスゴイとか、戦闘機はみんな違って面白いとか――戦闘機道を、絶対に履修するとか。
その結果、レポートは文字通り「でかく」なった。

そうして、あっという間に夏休みが終わった。
自由研究発表会が始まり、全てをまとめたデカブツをクラスでお披露目してみせたところ、クラスメートも「すげー」「よー調べたな」「マジでヒコーキ好きだなーお前ー」と囃し立ててくれたし、教師も「素晴らしくまとまっています。宿題は少し多目に見てあげます」と言ってくれた。この人のことは一生忘れないと思う。
確かに、上機嫌だったことに違いはない。
けれど、どうしても、気になって仕方なかったのだ。
松本の、のめり込むような視線を。
自由研究の発表を終え、自分の席へ、松本の隣へ凱旋していって、なけなしの勇気を振り絞って「どうだった？」と聞いてみたところ、
「良かったと思う、素晴らしかった」
微笑まれながらでそう言われた時、自分はめちゃくちゃに喜んだ。何たって、「あの」松本から評価されたのだから。
――いい奴だな。
――女の子なのに、戦車だけじゃなくて戦闘機にも興味があるんだな。
歴史はもちろん、戦車の知識もからきしだったからこそ、どうしても松本には話しかけづらかった。女性といえば戦車道で、男といえば戦闘機道であったからこそ、「松本は戦闘機には興味がなさそう」と勝手に思い込んでいたのだ。
ところが松本里子というクラスメートは、歴史も戦車も戦闘機もイケる口だったのだ。
そんなツワモノが、まさかこのクラスにいるなんて。
松本のことが、とても気になり出した。
「次、松本さん、お願いします」
教師から発表を求められ、松本が淡々と「はい」と返事をして、淡泊な手付きでランドセルを開き、淡然な態度で大きく丸まった紙を「引っこ抜いた」。
瞬間、「あ、やばいのが来る」と思った。
松本が黒板の端に立ち、丸まった紙を少しずつ広げていく。やばい

のが来ると察したのか、クラスメートはおろか、教師すらざわめきだして、
松本の自由研究が公開された瞬間、赤木は「負けた」と思った。
数えきれない文字、綿密に書き込まれた地図、細かいディティールすら見逃してくれない戦車の絵、「ドイツの戦史について、研究してきました」から始まる饒舌。ある者は言葉を失い、ある者は戸惑い、ある者はすごーいと漏らし、赤木は言葉を見失ったままで「こりゃでかくなるわ」と思った。教師に至っては、頷けもしないままで硬直しきっていた。
一見すると難しいテーマを取り扱っているが、松本は「聞いて欲しい」のだろう。なるだけ専門用語は使わないように、物語を語るような調子でレポートを読み込んでいっている。途中で質問を投げかける猛者も現れたが、松本は快く「それはですね」から始まり、解答してくれるのだ。
途中からドイツ旅行記が語られ始めたのだが、これに関しては教師のウケが非常に良かった。学園艦という海外交流が当たり前となったいま、こうした「他国へ行く」という経験は非常によく関心を抱かれる。教師からの「ドイツの雰囲気はどうでしたか?」に対し、松本は「日本とはまったく違います。町並みが良いんですよ、町並みが。あと通りすがりのレオパルト2が多くて最高でした」。
――確かに、テーマに興味をそそられたのは事実だ。その熱心さに呑まれたのも間違いない。
戦闘機道を歩む以上、本場のドイツは避けられないし、そもそも松本の話し方が感情たっぷりだからこそ聴き応えがある。一時間は浸っていられると思う。
けれどそれ以上に、研究の内容以上に、赤木は松本の表情に囚われきっていた。
とても嬉しそうな、松本里子の顔に。
「――戦史は学ぶと、とても面白いです。以上、聞いてくださりありがとうございました」
そう締めてみせて――何事もなかったかのように自由研究のレ

ポートを丸め、何事もなかったかのように赤木の隣の席へ凱旋した。
容赦の無い拍手を受けながら。
「……すげえな」
思わず、漏れた感想。
不意打ちに近かったらしく、松本が「えっ」と声を吐き出した。
目と目が合ったままで、しばらくは間が訪れ、
「……そ、そうか？　まあ、その……えと、ありがとう」
思わず、どきりとする。
――この瞬間から、松本のことがめちゃくちゃ気になり始めた。
だって松本、絶対にいい奴だから。
□
そうして自由研究発表会が終わり、クラスメート全員が脱力している中でも、松本は相変わらずの無表情で「初心者にもわかるドイツ語」を読み込んでいる。
一方で赤木は、どうやって松本と話そうかと両腕を組んだままだ。自由研究についてあれこれ質問すべきか、戦史について問うか、なるだけとってつけたような動機づけは避けたい。
改めて、無表情に逆戻りしてしまった松本のことをそっと見つめる。
最初は、本にしか興味がないのかと思っていた。けれど実際は、他人とおしゃべりするのが好きな普通のクラスメートだった。松本とはまだまだ短い付き合いだが、隣同士だとその人となりというものが染み付いてわかってくる。実際、これまで隣になってきた女子とは例外なく仲良くなっていったものだし。
「赤木どした、そんなシケた顔して」
友人の竹下と芝村が、今日も気楽に近づいてくる。何でもなかったかのように、赤木が「よ」と手で挨拶をして、
「いや何でも。にしてもどうだったよ、俺の渾身の一発は」
「いやー、お前ってホント戦闘機道好きだよな。そりゃ俺も戦闘機道目指そうかなって思ってるけど、ありゃ凄いわ」
竹下が両手を曲げておどけてみせて、芝村が生真面目な表情で小さ

く頷く。ふたりとも戦闘機道を目指していて、その縁でいつの間にか友人になったクチだ。
——その時、芝村が「でもさ」と前置きして、
「ちゃんと宿題はしろよ。お前、去年もそうだったじゃないか」
「いやーごめんなーすまねえなー、来年は絶対に終わらせるから」
「俺に泣きついてくるなよ」
「えー芝村ぁー」
成績優秀で真面目な芝村は、もちろん宿題なんて済ませている。実際に何度か手伝ってもらったこともあり、宿題の件でつつかれると結構痛い。
「素行不良ってことで、戦闘機道からふるい落とされないようにな。赤木クン」
「うるせー、来年からはちゃんと真面目になるよ」
「期待しないでおく」
くそが。竹下に向けて鼻息を飛ばしてやり、竹下は何でもないようにケタケタ笑う。
——芝村が、伺うように松本を眺めている。その視線に気づいた赤木が、「ん」と唸る。
「さっきの、松本さんの自由研究、すごかったな」
見逃さない。ぴくりと、松本の体が動く。
「なー、あれは凄かったよな。お前の自由研究も良かったけど、松本に全部かっさらわれたな」
「それは思う」
松本からの視線が、色濃く伝わってくる。
やっぱり、褒められもすれば気になってしまうのだろう。たぶん、話題にも混ざりたいはずだ。
「すげえなまつも……っと、読書中か。邪魔しちゃ悪いな」
「ああ」
聞こえた。松本の「あっ」という声が。
「しかしドイツかー。まあ確かに、あっこも戦闘機道の本場みてーな場所だよな」

「ああ。そこと連携している黒森峰は、時々ドイツと練習試合を行って、互いを高めあっているみたいだしな」
そう。
黒森峰学園は、戦闘機道、戦車道の強豪校として全国的に有名だ。とにかく金を持っているというのもあるが、本場ドイツとの連携が固いというのも強みに繋がっている。
逆を言えば、黒森峰を破れば大ニュース間違いなしであり、名前は確実に上がる。おまけに予算も積み込まれるものだから、打倒黒森峰は戦闘機道履修者共通の夢といっても過言ではない。
――竹下が「練習試合ねえ」と前置きし、
「黒森峰戦闘機道ＷＥＢはちょくちょく眺めてるけど、やっぱ戦力が尋常じゃねえわ。練習試合のレポートも詳細だし、勉強にはなるんだけど」
「ああ。……でも、またドイツには負けたらしいな」
赤木が「らしいね」と肩をなでおろして、
「どうやって、何を考えてドイツは戦っているのか、それが知れれば大ヒントになるとは思うんだが……なあ？」
みなまで言うなとばかりに、竹下が苦笑して、
「ドイツの学園艦のオフィシャルサイト見たけど、何て書いてあるかわっかんねーわ」
ドイツに所属している学園艦なのだから、使われる言語は当然ドイツ語だ。赤木もサイトにお邪魔したことがあったのだが、未知なる言語を前にブラウザバックした経験がある。
「あっこのサイトが見られれば、強くなるヒントがあるかもしれないんだけどなあ」
「練習試合についてのレポートはあるだろうよ」
「ドイツって真面目なイメージがあるもんな」
竹下が残念そうに溜息をつき、芝村が唸る。赤木は、いよいよもって強まってきた松本からの視線を身に浴びる。
どうしたら自然と、松本を巻き込める――松本の本を目にした瞬間、「あ」と間抜けな声が出た。頭の中で、瞬く間に提案が構築されて

いく。
今しかない。
ガンマンのような手さばきで、ポケットから携帯を取り出す。教師に見つかったら面倒なので、竹下を壁にするように。
慣れた手付きでブックマークを引っ張り出し、そこから黒森峰学園艦オフィシャルサイトへアクセスする。迷い無くリンクページをタップした後で、連携校コーナー、即ちドイツ国籍の学園艦サイトめがけ人差し指を叩き込み、瞬く間に解読不可能の世界へ飛び込んだ。
ひと呼吸、置いて、
「……なあ」
しっかりと、松本の目を見つめる。不意に声をかけられたせいだろう、松本は「あっ？」と動揺してしまった。
「あー、悪い。実は、用があって……いいか？」
「な、何だ？」
「これ。このサイト、ドイツの学園艦のオフィシャルサイトなんだけれど……読める？」
松本が二度、三度ほどまばたきをする。そうして手持ちの本とサイトを見比べてみて、「そう、だな」と躊躇いがちに呟いた後、
「……貸してもらって、いいか？」
「もちろん」
携帯を手渡し、松本が「どれどれ」とサイトを凝視する。竹下も芝村も非常に興味があるようで、黙って松本の動向を見守ったままだ。
――感じる。
松本の目が、鋭くなってきた。本を置き、画面をそっとスワイプしてみせて、また頷いてみせて、「なるほど」と口にした後、
「たぶん読める。ほら、これは学校のモットーが書かれてあるんだ」
どれどれと、赤木と竹下と芝村が画面を覗き見る。
でかでかと書かれたドイツ語が目に入り、「読めねえ」と竹下が降参するが、松本は特に何でもなく、
「『善は必ず帰ってくる、そう生きろ』――そう書かれているんだ」
ドイツ語を読めた事実に対し、赤木が「マジかよ」と感嘆する。芝

村も熱が入ってきたらしいのか、「これは?」と画像を指差す。
「これは校長だな。これは名前」
いよいよもって、赤木と竹下の歓喜が収まらなくなる。芝村は顔に出にくいタイプだが、姿勢は明らかに前のめりだ。
「じゃ、じゃあ……戦闘機道に関するレポートがどこにあるか、わかるか?」
「どれどれ」
松本も勝負モードに入ったのだろう、携帯を凝視しながらでサイトを発掘していく。手早くリンクページを発見しては、部活系列のサイトを発見し、松本が「戦闘機道、戦闘機道……お、戦車道があるのか、当然か」と漏らす。
どうやら、解読は順調に行われているらしい。赤木の視線は画面一色であり、竹下も芝村も無言で動向を見守り続けている。松本が「んー」と唸りながらでフリックを多用し、「お」の一言で画面が固定された。
「これだな」
「すげえ!」
タップと同時に、ドイツ学園艦の戦闘機道サイトが表示されていく。しょっぱなから空を舞うフォッケウルフの画像が映し出されたから、間違いない。
「松本さん……天才か?」
「ドイツ語が好きなだけさ。で、レポートだな?」
表情を一つも変えずに、松本が戦闘機道サイトを無遠慮に漁っていく。竹下はすげえすげえと大喜びし、芝村はさすがだと称賛している。一方の赤木はといえは、握り拳を作りながらで松本の行く先を見届けているのみだ。
そうして数十分も、数分もかからないうちに、
「出たぞ」
「松本様すげえ!」
竹下が全力で讃え、松本が気恥ずかしそうに苦笑する。芝村は相変わらずの無表情だったが、腰などすっかり前のめりだ。

「えーっと、じゃあ読むぞ。努力はするが、間違っていたらすまない」
「大丈夫」
赤木の言葉に対して、松本は「わかった」と口元を曲げてみせる。松本の方も火が入ったらしく、本を片手に「どれどれ」とレポートを翻訳し始めた。
――結果は、一言で言えば大豊作だった。生真面目な校風だからか、ありとあらゆるアクションについての評価やダメ出しが事細かに書かれていたのだ。
戦闘機道希望者として、本場からの意見は宝に等しい。専門用語が容赦なく飛び込んできたが、赤木の頭は難なくそれらを受け入れられていた。
そして長文ではあったが、締めは『世界はわが校が、日本では黒森峰が今年も優勝することだろう』。
チャイムが鳴り、竹下と芝村が松本にお礼を言い去っていった。
赤木はもちろん、松本も上機嫌そうに顔を明るくしたままで、
「今日はありがとうな」
「いや、いい頭の運動になった」
今日はいい日になったと思う。隣の席の松本と、こうして話し合うことができたのだから。
――ところで、松本の顔が大きく見える。
「……！　あ、ち、近っ」
「うわっとと悪い悪い」
携帯を覗き見る都合上、顔と顔とが知らずに接近しあっていたらしい。
いつもよりよく見える松本の瞳を意識し出した途端、逃げるようにして距離をとってしまった。
授業が始まる。かったるそうに教科書を取り出すついでに、松本の顔を眺めてみたが――機嫌は、良さそうだった。
□
みんな大好き給食の時間が訪れて、瞬く間にグループが構成されていく。この時ばかりは自由席ルールが設けられ、各々他人の席へ座り

込んでは机をブロック状にひとまとめするのがこの教室の習慣だ。
赤木はといえば、芝村と竹下、あとは目に入った友人を誘うようにしているのだが、
「松本さん」
自分の席で、一人で給食をとろうとした松本に対し、赤木は当たり前のように声をかける。完全に予想外だったらしく、松本からは「な、なに？」と驚かれてしまった。
「一緒に食わね？」
「――え」
「駄目かな？」
「い、いや、そういうわけじゃないが」
「よし決定。いやなに、さっきは大奮闘してくれたからさ、お礼にプリンでもあげようかなって思って」
もちろん、褒美云々は建前だ。実際は、松本と仲良くなりたいという余計な世話から声をかけてみた。
松本が躊躇う、「いいのか？」と確認までとってくる。赤木は当たり前だとばかりに頷いて、
「当たり前だろ？　なあ？」
竹下と芝村が、同意するように首を縦に振るう。松本が無表情のままでまばたきして、少しうつむいてみせて、
やがて、赤木と目が合った。
「じゃあ、よろしく」
「もちろん。これからもよろしくな」
「――え」
ごく普通に、赤木は手を差し出す。
松本の目と口が丸くなる。赤木が、自信満々そうに自分のポケットを小突く。
携帯の感触が、指から伝わった。
「一緒に盛り上がれたじゃん。だから、これからもよろしくな」
右も左も喧騒が止まない、雑談が聞こえてくる。誰も、この場に異論など挟んではこない。ふと教師と目にあって、にこりと微笑まれ

た。
　真っ昼間の日光を背に受けながらで、松本が「そっか」と呟いて、
「そっか」とはっきり言って、
「わかった。じゃあ、一緒に昼を共にしよう」
「そうこなくっちゃ」
　こうして、手と手が一つになった。
　――松本が、少し苦戦しながらで机を持ち上げようとする。それを目の当たりにした途端、男のプライドを揺さぶられた赤木が、松本の机をがっしり掴み取っていた。
「すまない」
「いいって」
　二人がかりで松本の机を運搬して、これにて赤木、松本、竹下、芝村の四人グループが構築された。
　松本の席はもちろん、赤木の隣だ。
　給食はもう運んだ、あとは食うだけ。松本と赤木が席につき、「いただきます」と両手を合わせ、早速とばかりに本日のメインディッシュ――プリンを松本に手渡す。
「今日の報酬、受け取ってくだされ」
「はっはっは、かたじけない」
　なんだ、なんだ――
　やっぱり松本、いい顔できるじゃないか。
「……ま、あれだ」
「うん？」
「ドイツ語はかじった程度だが、もし解読したいものがあればいつでも声をかけてくれ」
「おっしゃ。じゃあ松本には、レポート解読班になってもらいたいんだが、いいか？」
「心得た」
　竹下と芝村が、「っし」と小さく拳を作る。赤木は、松本と友達になれたことで笑みがこぼれてしまう。
　思う。松本と隣同士になれて、本当に良かったなと。

「赤木」
「ん？」
松本が、
「――ありがとう」
とても、いい顔をしていた。
やっぱり松本は、いい奴だ。
――何となく、空を映し出している窓を眺めてみる。
勇気さえ出せば、世界は上手く動いてくれるらしい。
放課後、俺は松本と一緒に下校した。
――

中学最初の夏休みを終えたあと、鈴木貴子は普通に宿題を提出し、普通に自由研究を発表して、普通の拍手と盛大な拍手に迎えられた。
拍手されるのは別に良い、好き好んで研究したテーマが普通に受け入れられているのだから。
問題は、盛大に拍手した「とある女子」についてだ。名前は――確か松本里子か。その松本が、目を輝かせながらで「ばちばちばち」と手を叩いたのである。
松本の異質さは、拍手だけに留まらない。自分が「ローマについて研究しました」と言った途端に、松本の姿勢が前のめりとなり、一言一言にうんうんと頷いてくれたのだ。
この1―Cには、ローマ好きなんていない。ローマ好きだった幼馴染は、家の都合で別の学園艦へ旅立っていってしまった――そうしたハードルが設けられていたからこそ、反応に期待なんてしていなかったのに。
鈴木は、「へえ」と思った。もしかしてローマ好きなのかなと、一抹の期待を抱いた。もしローマ好きであるならば、それを軸にしてはじめての友人が出来るかもしれない。
一礼し、時間をかけて紙を丸め、一度だけ松本と目が合って、何事もなかったかのように席へつく。
頬杖をついて、次は誰だっけとぼんやり思考し始める。友人がいないから、楽しむスキもあったものじゃない。

「では、次は松本さん。よろしくお願いします」
へぇ。
「私は、ドイツの戦車博物館を巡ってきました」
松本が淡々とした表情で語り、淡々とした手付きで紙を開け、広げ、大きくしていく。既に濃厚さを隠しきれていないそのバリューっぷりに、鈴木の姿勢が瞬く間に前のめりとなる。
「っと。えー、私は、両親とドイツへ旅行しに行ったのですが――」
ここぞとばかりに文字が並び、これでもかとばかりに戦車の絵が描かれ、これでどうだとばかりに経験談を、持論を滑らすように語っていく。松本の表情は、淡々としたものから楽しげに変化する。
無表情な女子生徒が多い中、鈴木は松本世界へ真っ先に食いついていた。同じ「におい」を感じたから。
松本の一言一言を聞き逃すことなく、鈴木は無意識のうちに頷き、小さく「うん」とまで言ってしまって――気づけば、松本の自由研究発表会は終わってしまっていた。
大半の女子は「へえー」だっただろう、教師は「いい旅行でしたね」と締めた。けれども鈴木は、「ウチの教室にこんなツワモノがいたのか」と思考していた。
松本が時間をかけてレポートをくるめ、自分の席へ戻ろうとした時、
松本が、こっちを見て笑った。
何を意味しているのかなんて、歴女としてすぐ感応した。
『お前も、歴女か』――
こうして自由研究発表会が終わり、休み時間が訪れる。怠惰な気分は既に消え失せていて、心臓が痛いくらいに動き回っていた。
背筋を伸ばし、呼吸を整え、両手で握りこぶしを作り、両頬を叩く。いたい。
チャンスを逃してはならない、一人ぼっちの学園生活なんて嫌だ。だから自分は、松本と友達になるんだ――己が勇気をかき集め、それを手のひらで食べ、「よし」の一言ともに席から立ち上がり、
松本里子が、自分めがけ歩んできていた。

「――な、何だ？」
「いや、な」
一冊の本を取り出す。タイトルは、「ドイツ軍事史」。
「あなたのテーマは、最高に気に入った。私は戦史好きなんだが、ローマの歴史も素晴らしいな」
不意打ちを食らってしまい、不安と高揚をごちゃごちゃにしながらで「だろ？」と頷くことしかできない。
「もっと、ローマについて教えてもらいたい。いいかな？」
無言で、頷くことしかできない。
いまの自分は、どんな顔をしてしまっているんだろう。
「それはよかった。……まあ、なんだ」
松本が頬を赤くしながら、控えめに口元を緩ませ、
「私と、友達になってくれないか？」
返事なんて、もちろん、もちろん――

――

戦闘機道を歩んではや一年が過ぎ、未だ二軍として春空を舞っていた頃。
下校中、軍帽を被った松本と、スカーフを身につけた鈴木――カエサルに対し「昨日の黒森峰学園サイト見た？」と聞き、松本が「見た見た」と返し、
「プラウダと練習試合を行ったそうだが、８：２の差で勝利したそうだな。まったく、やるものだ」
「黒中（黒森峰戦闘航空大隊中等部）は戦闘機道イチの強豪だからなー。だからこそ、練習試合の申し込みが殺到しているらしいんだけどな」
「強者の証だな」
松本の言う通りで、大会だろうが練習試合だろうが黒中は決して負けやしない。そりゃあ一機や二機は撃墜されることもあるが、負けてはいないのが重要だ。
しかし、カエサルが、
「強いのは分かる。だが、攻略法は必ずあるはずだ。絶対に負けない

存在などこの世にはない」
「まあ、そうなんだろうけどな」
「お前ー、優勝したくないのかー？　大会で」
「したいさ。けれど、レギュラー入りを果たさないことにはな」
「レギュラーか。競争率は？」
「割と。戦闘機道って男の花形みたいなモンだから」
「難しいんだな」
「まあな。でも、俺は必ずレギュラーになるつもりだがな」
　ふと、帰路についていた松本の両足が止まる。言いようのない威圧感を覚え、赤木もカエサルも釣られるように停まってしまった。
「――なあ」
「うん？」
「レギュラー入りするには、どうしたら？」
「え」
　下手なことなんて言えそうにない。なぜなら、松本の目つきがナイフのように鋭かったから。
　だから赤木は、率直に、簡潔に、
「模擬戦で活躍できりゃ、いつかはレギュラー入り出来るだろうが、」
「ああ」
「黒中相手に活躍できれば、手っ取り早く全国大会に出られるだろうな」
　黒中の話題が出てきたからこその、半ば思いつきに近い言葉。
　言うだけならタダだった、流されるかと思っていた。
　――松本の目つきが、鋭いものになるまでは。
「……本当だな？」
　弛緩しきっていた空気が、まるで硬直したと思う。雰囲気に逆らえないままで、赤木はうんと頷くことしかできない。
「赤木」
「あ、ああ」
「一つ、大事なことを聞きたい」
「それは？」

松本が、両肩で息をする。軍帽をかぶり直し、改めて赤木の瞳だけを見つめ、
「黒中と戦う意思は、あるか？」
一握りの嘘すら許さない、刃のような質問。
それに対して、赤木は何の躊躇いもなく、
「――ある」
赤木は、ハナから戦闘機道を歩むつもりだった。同時に、世界一の戦闘機乗りになるという願望も同時に生じていた。
思いつきで言ったつもりはない。幼稚園の頃から、ずっとずっと抱えてきた夢の一片を口にしただけだ。
それを聞いた松本は、やはり無表情のままで――
「わかった」
□
そうして次の日――土曜日になって、松本から『ちょっと遠征してくる』のメールが届いた。カエサル（メールアドレスもカエサルもじり）からも『お土産を期待するように』と。
自室で寝転がりながら、赤木は適当な手付きで『わかった。旅行楽しんでこいよー』と返したのだ。そう返信した後で、どうして女子二人なんだろうかと今更になって気になり始め、
まあ、女の子だけで旅行したくなることもあるか。
安易に、答えらしいものは出た。
次の月曜。登校中にカエサルと松本のペアと遭遇するやいなや、松本の手から有無を言わさずに土産を手渡された。最初は「なんだべ」と思った赤木だが、「大洗向け、対黒中マニュアル」の羅列を目にした瞬間に、朝特有の脱力感などはあっさりと吹き飛んでしまった。
松本と目が合い、「読んでくれ」と目で促され、ページをめくってみて――
「すげえ」
ものの数秒も立たないうちに、マニュアルに対しての感想がもれた。
「どうだ。役に立てそうか？」

「立つ」
その時の、安堵しきった松本の姿は、まちがいなく忘れられないと思う。
そして赤木は、全てを察した。だからこそ、
「俺達、大洗戦闘機道のために、松本と鈴木はこんなに手間のかかる凄いことを？」
「え？　ああ違う違う。私はただ、なんとなく黒森峰へ遊びに行っただけさ。そこでたまたま練習試合があったから、興味本位に観戦をだな。でまあ、こうした分析も趣味でやっただけ」
けろっとした笑みで、松本はそう言いのけたのだ。カエサルは「私は単に、暇だから付き添っただけさ」と。
――嘘だ。
じゃあ何で、こんなにも大洗寄りの分析でまとめられているんだ。なんで、ページの隅に自分への応援メッセージを書いてくれているんだ。
こんなの、趣味と義心が一つになった結果じゃないか。
黒森峰へわざわざ遠征しに行った理由なんて、遊びじゃなくてハナから練習試合が目的だったんじゃないのか。自分がレギュラーになりたいとほざいたから、戦う意志を示したからこそ、「ほっとけなくなった」松本が、そしてカエサルが頑張ってくれたんじゃないのか。一人より二人という理論を以てして。
こんな事実、簡単に気づけた。
だって二人は、俺の友人なのだから。
「ありがとう、ふたりとも」
鈴木貴子は、にこりと笑って「友達だろ？」と言ってくれた。
松本里子は、にやりと笑って「仲間だろ？」と言ってくれた。
「これは必ず、役立たせる。よし、授業が始まったら隊長と話し合ってくる」
「よし、その活きだ。私はアウレリアヌス城壁からお前を見守ることにしよう」
「じゃあ私は、ケールシュタインハウスから見守ることにする」

「なんか強そうだな！　サンキュー松本、鈴木！　……あ」
　ここで鈴木が、漫画のように口元をへの字に曲げてみせ、
「私のことはカエサルと呼べって言っただろ。このマフラーが目に入らぬか」
「見えてるけどさあ。でもさあ、やっぱ違和感強くねえかなあ」
「いいんだよ別に、私はそう呼ばれたいんだ」
　中学二年生になってからというもの、鈴木ことカエサルと、エルヴィンこと松本のファッションは激変した。
　まずカエサルだが、赤いスカーフのようなものを身につけるようになり、朝っぱらから「私は、今日からカエサルと名乗ることにした！」と応援団長めいた声で宣言された。
　次に松本だが、何と軍帽を被るようになり、これまた朝イチで「私はエルヴィンと名乗ることにする！　まあお前は里子なり松本なりエルヴィンなり好きに呼んでもいいぞ！」と叫ばれた。
　松本はともかく、カエサルの方は未だに「鈴木」と呼んでしまうことがある。そのたびに「カエサルだ、間違えるな」と訂正されるので、どうしてもカエサル呼びに慣れなくてはならない。難しいものだ。

□

　戦闘機道の授業が始まり、赤木はノートを片手に隊長めがけ突っ走っていく。
　周囲が何だ何だと関心を向けるが、気にしてなどいられない。やがて戦闘機道エリアに到着してみれば、あっさりと隊長の姿を発見し、大声で隊長を呼ぶ。
　かなりやかましかったのだろう、隊長が「どうしたー!?」と駆けつけてきてくれて、息切れ寸前だった赤木は死にかけの手付きで「大洗向け、対黒中マニュアル」を手渡すことに成功する。
「こ、これ、俺の友人がまとめてくれた奴で……そ、それでもし、このノートに価値があったら、黒森峰に練習試合を申し込んでみませんかっ？」
「何を言ってるんだ。あいつらは、」
「わかってます、言いたいことは。……とりあえず、読んでみてくださ

い」
疑いの色を顔に保ったまま、部長が1ページ目を開く。何を思ったのか、ここでしばらく硬直時間が生じて――2ページ目、3ページ目と、めくる手が止まらなくなる。
「すごい」
大洗航空隊隊長の名は伊達ではないらしく、すぐさま対黒中マニュアルの価値に気づいてくれた。
晴れ空の下、隊長は直立不動のままでうんうんとかふむふむとかなるほどとか唸りに唸り、一時もノートから目を離そうとしない。
その威圧めいた空気を感じ取ったのか、他の履修者達もこぞって集まってくる。竹下が「どしたんすかー？」と質問し、隊長がノートを履修者たちに見せびらかし、
「――黒中と、練習試合をしようと思う」
これには当然、履修者達はおったまげた。
勝てるわけがないとか、時間の無駄だとか、修理費もタダじゃないんですよとか、ありとあらゆる異論が飛び出てくるのは当然だ。竹下も芝村も難色を示していたが、赤木は、
「俺はやりますよ」
隊長以外の顔が、ぴくりと硬直した。
根拠の無い自信でも、媚びへつらいなんかじゃない。今回ばかりは「友のために、やらなければいけない」という義憤に満ちていた。
「このノートは、俺の友人が書いてくれたものです。読んでみてください、きちんと大洗航空隊の視点から攻略法が書かれていますよ」
この一言から数分後、マニュアルを読み込んだ航空隊の中で「やる」派と「いやしかし」派が生じた。
その反応は、しごく当然だと思う。戦闘機道を歩んでいるからこそ、黒中と戦う現実がよく見えるはずだから。
しかし、赤木は「やる」と言う。竹下と芝村も、黒中と戦う腹づもりになってくれた。ありとあらゆる表情が隊長に向けられる中、
「俺さ、」
隊長は、生真面目な真顔のまま、

「優勝、したかったんだよね」
その一言で、練習試合を行うことが決まった。
隊長からは特別に出撃する権利を与えられ、竹下も芝村も「やってみろ」の一声で参戦することとなった。
――赤木は深く、ふかく安堵した。
だって、松本の功績が認められたから。
だって、松本の努力に報いたかったから。
それに、赤木も部長と同じ夢を持っていたから。

こうして練習試合が行われ、黒中の戦闘機は八機のうち四機が撃墜、大洗はものの見事に全滅させられた。あっという間だったと思う。
しかし後日になって、赤木と松本は大きく口元を曲げきった。だって黒森峰の戦闘機道レポートには、『反省点が多い試合となってしまった』と書かれていたのだから。

――

「三人共！　戦闘機道レギュラー入り、おめでとさん！」
「サンキュー！　かんぱーいッ！」
赤木、竹下、芝村、松本、カエサルの五人グループが、定食屋の一角で乾杯（ジュース）の音頭を上げ、五人同時に中身を飲み干していく。
そうして五人同時に「ったはー！」とコップを置いて、軍帽を被った松本がいやらしい笑顔とともに「で？」と呟き、
「二年でレギュラー入りなんてなあ、いくらなんでも早すぎじゃないか天才か？」
「普通にいるよ、二年のレギュラーなんて」
「だが、三年よりは少ないだろ？」
「そりゃあまあ」
「じゃあ、才能があったってことだな」
松本とカエサルが、「なー」と頷き合う。竹下は「俺にも才能があったんだなー」と喜色満面の笑みを浮かばせているし、芝村は照れくさく「やることをやった」とだけ。

赤木はといえば、「そうかもしれんが」と返しつつ、
「でも、松本のお陰でもあるだろ」
「は？　私が何をしたっていうんだ」
自分の指先で、己がこめかみを軽く小突く。
「お前のお陰で、黒中との練習試合で良い結果を残せた。これは事実だろ」
「何のことやら」
竹下が上機嫌そうに笑い、
「松本が戦術ノートをまとめてくれたお陰で、上手くメタれたじゃんかよ」
「私は戦術とか、戦史とか、軍事などが好きなだけだ。だから戦闘機道にも興味があるし、練習試合があればついでに見にも行く」
「謙虚だな、お前」
赤木の一言に対し、カエサルが「うむ」と反応し、
「お前さ、『赤木の役に立つかな』ってしっかりノートにまとめていただろ。それを『ついで』と言うのは苦しいんじゃないか？」
「！　馬鹿ッ、余計なことを言うな！」
「……そう、だったのか」
赤木がほっけをかじりつつ、
「すまん、マジで助かった」
「い、いや、その……ほら、私はドイツびいきだし」
「そっか」
赤木が、箸でからあげの一切れをつまみ、
「ありがとな、手間かけさせて。これ、やるよ」
「え、いや、その」
「いいって。それにな、お前は戦闘機道中等部における影のブレインとして頼りにされてるんだからな」
「……お前が書いたって、言えば良かっただろ」
「あんなきれいな字、俺には書けねーよ」
「手柄なんて、お前のものにすればよかったのに。そうすれば、時期隊長の座にだって、」

「やだね」
　からあげを松本の皿の上に置いた後、
「友人の功績を、友人が潰すなんて最低だろ」
「う、」
「それに本当は、お前の名前も出したいんだが……ほら、迂闊に公表すると面倒くさいことになる気がしてな。戦闘機道はむさい世界だし」
「まあ、な」
「だからあくまで、俺は『友人が書いてくれた』って言うよ。お前のお陰で、俺がレギュラーになれたっていう事実も譲らない」
　竹下と芝村が、同意するように頷く。
　松本の箸の手は止まってしまっていて、頬を赤く染めながらですっかりうつむいてしまっていた。
　――この光景が、赤木からすれば愛おしく思う。
　あの黒森峰戦闘航空大隊中等部の驚異になれたことが、戦闘機道履修者として誇らしく思えるから。カエサルと松本の努力に、報いることが出来たから。
「いやーほんと。黒中お得意の、一撃離脱戦法の攻略法を書いてくれた松本には感謝しかねえわ」
　竹下がしみじみと感謝し、芝村も「ああ」と同調する。赤木だってんだんだと同意するほかない。
「――まあ正直、あそこまで上手くいくとは思わなかった。まあ黒森峰はプライドが高いらしいから、弱小校にアレコレされるのは我慢ならなかったんだろうな」
「次は通じるものかな」
　松本が味噌汁を飲み、カエサルが天丼をもりもり食う。
　確かに、二度目が通じるかは不安だ。対策だって練ってくると思う。
「ま、」
　松本が器を置き、
「その時はその時だな。偵察は任せろ、まさか女である私が戦闘機道の手先であるとは思うまい」

くくくと、実に楽しげに松本が笑う。
流石だと、赤木は思いつつ、
「それはありがたいが……いいのか？　学園艦に行くのもタダじゃないんだし、これきりでも、」
「いいんだ」
「偵察なら俺でも、」
「い、い、ん、だ」
強く断られてしまった。
「こう見えて時間はあるからな。だから、必要とあらば偵察の一つや二つ、こなしてやるよ」
「そ……か」
思う。松本はなんていい奴だ。
――だから、
「お前さ」
「ん？」
だから、
「俺、お前と友達になれてよかったよ」
その時、店内の音しか聞こえなくなったと思う。
お調子者の竹下からも、寡黙な芝村からも、語り好きのカエサルからも、そして松本からも、一切の声が届かない。
注文を受ける店員の声が響く、学校生活について語り合う女子の雑談が耳に入る、ジャズの話で盛り上がっているらしい男子の話し声が届き、船舶科はつれーなーと愚痴ってい、
「そう、か」
松本の頷きとともに、ようやく「いつも」が取り戻される。
「そうかそうか、そう言ってくれるか」
「当然」
「じゃあ、これからも裏のブレインとして手腕を振るってやる。ありがたく思え」
「やったぜ松本ー、愛してるー」
「そういうのいいから」

冷徹だった。
フられたことでしょげる竹下、がんばれと励ます芝村。残念だったなーとゲラゲラ笑う赤木に対し、松本が「ふん」と天丼を口にする。
その一方、カエサルは真顔のままで顎に手を当てている。赤木が首をかしげるが、カエサルが「そういえば」と赤木に視線を合わせてきた。
「どした」
「いや、次の練習試合の相手は決まったのか？」
「んや、まだ。流石に今回みたいな無茶はしないつもり」
「ほー。で？」
「……継続高校と戦ってみようかな」
「そうか」
良いことを聞いたとばかりに、カエサルの口元が笑う。
「松本」
「何だ」
「偵察するか？　継続に」
「いいぞ」
「よし」
カエサルが、天丼を一口つまみ、
「私と松本、そして赤木、お前も同行してもらう」
「ああ、いいよ」
赤木があっさりと返答する。カエサルが同意を求めるように、横目で松本を眺め、
松本は、「え」とか「へ」とか「え」と唸ったまま、ひたすら赤木を凝視していた。この予想外の反応に、赤木は言葉を見失うしかない。
しかし、カエサルは意にも介さずに「決まりだな」と締めた。
「ちょっと待て、なぜこんな流れになった」
締められなかった。
「え、駄目？　もしかして男子禁制？」
「い、いや！　そういうわけじゃないが」
「じゃあいいだろ」

カエサルは涼しい顔で、天丼を次から次へと飲み込んでいく。
竹下も芝村も、これといって異論を挟まない。
「それに、直接観戦した方が多くを学べるだろ。テキストだけじゃあ、限界もある」
「それは……そうだが」
「なんだ。三人で行くんだぞ、二人きりじゃないんだぞ」
「まあそうなんだが！」
「じゃあいいだろ」
カエサルにすっかり丸め込まれた松本は、憎悪の眼差しをカエサルに差し向ける。一方のカエサルは、やっぱり涼しい顔をして「ごちそうさまでした」と手を合わせているのだった。
力関係が見えてきた瞬間である。
「……まあ、その、嫌だったら俺抜きでもいいからな？」
「い、いや？　別にいいからな？　お前の時間があれば」
「そ、そお？　じゃあ行くわ」
「たいちょー、お土産よろしくー」
「楽しんでこい」
竹下と芝村がバックでやんややんやと言う中、松本は――観念したように「よろしく」と苦笑し、赤木は「これからもな」。
何が嬉しいのか、カエサルは音を立てずに微笑んでいる。
なんとなく、店の天井を眺めてみる。
恐れずに歩んでみると、世界は意外にも動き出してくれるみたいだ。

――――

ここ最近の大洗戦闘機道中等部は、大洗学園艦ＷＥＢニュースによくモテている。
大洗航空隊といえば戦力なし、金なし、戦術なしの典型的弱小チームだったのだが、ここに「下積みたっぷりの戦術」が組み込まれることによって、大洗航空隊はある程度化けた。
戦力不足といえども、飛ぶモノさえあれば戦術と腕でどうにかなるし、金だって別に皆無というわけではない。あとは戦術面の不足のみ

が目立っていたわけだが、ここに松本、カエサルの分析脳が加われば弱点の穴埋めは完了する。
それ故に、黒森峰やプラウダ相手には勝利できなくとも、食らいつける程度の域には達した。継続や知波単といった「いいトコ」に対しては、勝ったり負けたりするようになったのだ。
実績に乏しい大洗学園艦からしてみれば、こうした実績に食らいつかないはずがない。そもそも黒中と戦った時点で『大洗航空隊中等部、目覚めの兆しか？』と大洗ＷＥＢニュースにでかでかと書かれてしまったし、知波単に勝利した時点ですぐさま新聞部が殺到した。明るくポジティブな特ダネなのだから、この行動の速さも納得するしかない。
特に注目されたのは、格闘戦の鬼こと零戦乗りの隊長、触接のプロこと二式陸偵乗り竹下、航空隊の一番槍こと烈風乗り芝村、そして善戦の提供者こと紫電乗り赤木が、期待のルーキーとしてハデハデと取材されてしまった。
カメラのフラッシュに炊かれる中、「戦術を生み出す秘訣は何ですか？」と問われたが、
――相手を観察する、これは基本ですね。これは体で覚えられますが、どうしても個人の感覚に引っ張られがちです。
そこで客観的な分析と、それを的確に落とし込める文章力が必要となるわけですが、それは俺が考えるのではなく、知恵者である友人が描いてくれます。プライバシーの観点から友人の名前は出せませんが、友人がいなければ、自分は……いえ、大洗航空隊中等部は、こうして称賛されることはなかったでしょう。
松本からは「恥ずかしいじゃないか」からかわれ、カエサルからは「もっと褒めてもいいぞ」と笑われ、赤木も悪くない気分に浸れている。学園側も予算の増加を検討してくれたし、いいこと尽くしだ。
けれどもやはり、赤木は根っからの戦闘機道野郎だった。
休みを返上してアンツィオ学園艦に足を踏み入れては、真っ先に会場へと向かい、双眼鏡を両手に練習試合を、アンツィオ戦闘飛行隊中等部を視察するのだった。

アンツィオは優勝経験はないものの、けっこうな強豪として名を馳せている。ＭＣ．２０２やＭＣ２０５、Ｇ５５などの強機体や、いつぞやに松本が読んでいたドゥーエの「制空」から倣った戦術などもさながら、「アンツィオは貧乏だが、カップルの数は学園艦一」という評価がつきまとう。もしかしたら愛の力で強くなっているのかもしれない。

これは中々に否定出来ないところがあり、同業者曰く「あいつらはモテたいから、カッコつけてカッコよく飛ぼうとする。だから強いんじゃねーの」とのことだ。

確かにそうかもしれないなあと、恋をしたことがない赤木は思う。

扱うものは機械であるが、結局は乗り手次第で三流にも一流にも化けるのだ。モチベーションが常に最高であるのなら、金なしのアンツィオがここまで強いのにも納得がいく。

こうして練習試合を見終え、松本とカエサルが対抗策をノートにしたため、やることをやったので出店広場へ出向くことにする。目的はもちろん、美味いと評判のアンツィオ飯を楽しむ為だ。偵察だって体力が必要だしハラも減る。

――出店広場の領域に、足を踏み入れた瞬間、

「っしゃい――！　ここはアンツィオ一のラザニアが食える店だよ――ッ！　練習試合お疲れ様祭り開催中というわけで、お値段なんとたったの１００万リラ！」

「アンツィオ一番の鉄板ナポリタンが１００万リラで食べられるよ――ッ！　おっ、そこのカップル！　食べにいかないかい!?　今考えたカップル料金で、５０万リラだ――ッ！」

「練習試合熱かったねーッ！　喉乾いてないかい？　１００万リラでうんまいミント水が飲めるよ――ッ!!　カップルなら５０万リラ！」

「おいおいウチの企画をパクるなよーッ！」

「いいだろ――！　お前は食い物、俺は飲み物で分別されてっし！」

「それもそうだなーッ！　あ、そこの御三家！　ウチで食ってかないか――!?」

瞬きする間もなく、祭りの空気にふん捕まえられた。
右からおさげの店主に手招きされるわ、左から飲め飲めとミント水をおすすめされるわ、店主と気楽に会話する観光客があちこちにいるわ、どっちが美味いかでケンカする店もあるわで、改めてアンツィオパワーに呑まれてしまった。
赤木はもちろん、松本もカエサルも口をあんぐりしたままで動けていない。
脳ミソが情報を整理するまで、ほんの少しの時間が必要となった。
「――す、すげえな」
先に沈黙を破ったのは、赤木だった。松本もカエサルも「だな」と頷き、
「これが、アンツィオの真髄なのか。たまらん」
「なー。俺、こんなフレンドリーな祭り見たことねえもん」
突っ立っている現状においても、左右からは食え食えと言われっぱなしだ。ネットを通じて「アンツィオはノリと勢いがすごい」という情報はキャッチしていたものの――予想以上だった。
「どうします、松本参謀」
「そりゃあ、食うしかありませんね赤木軍曹。……皇帝(カイザー)はどうします？　……皇帝？」
よくよく見てみれば、カエサルは何やら携帯を操作していた。覗き見るわけにもいかないので「どったの」と声をかけてみると、カエサルは「ああ」と反応し、
「実はここに、私の友人がいてな。会えないかなとメールを送ってみたんだ」
「お、マジか。いいよいいよ、会いに行くべ」
「そうか？　すまない、手間をかける。アンツィオの校門前で待っているらしいから、そこへ行こう」
「いいぜ」
アンツィオ中学に出向く都合上、どうしても出店広場の中を突っ切っていくわけだが――その間にも、店主から雨あられの呼び込みをかけられたし、カップルも目にする。どっちのジェラートが美味いか

でモメる店主も目撃できたし、カップルも視界に入る。少し歩けばティラミスをはんぶんこしているアンツィオカップルが居て、遂に赤木が「あー」と音を上げた。
「……すげえな」
「……ほんとな」
「カップルだらけだな……噂通りじゃん」
「……なんでだろうな。何かこう、懐が寂しく思える」
「あーわかるわかる。ここまでラブラブ見せられちゃ、彼氏彼女が欲しくなってくるっていうか」
　考えなしに言った言葉に対し、松本がちらりと横目を見据えてきて、
「それは本当か？」
「んー、どうなんだろ。今んところ、惚れた女の子っていねえけど……」
「……ふーん」
　その時、カエサルが「あ！」と叫んだ。唐突すぎて、頭の中に火花が散る。
「な、何だ」
「あーいや、友人の件なんだが、早く友人と会いたくなってな」
「え？　じゃあ早歩きする？」
　カエサルが、いやいやと首を横に振るい、
「せっかくアンツィオまでやってきたんだから、お前らは今すぐ飲め食え騒げ」
「え？　いや、俺は別に、」
「いやいやいや、友人と会うまでお預けっていうのは酷だろ？　だから私はひとっ走りして友人と合流するから、お前らは先にここで食っとけ」
　松本が「いや別に」と意見を挟み込もうとするが、カエサルは「楽しめよー！」の一言とともに出店広場の中を突っ走っていってしまった。
　――間。

「……どうする？」
「……うーん……」
「……まあ、気を遣ってくれたんだろうし、せっかくだから食うべ。追いかけたら、どやされそうだし」
「そう、だなあ」
未だ釈然としないのか、松本が両腕を組んでは首をかしげる。ここまでお膳立てをさせられてしまうと、逆にしどろもどろに陥ってしまう。
どうしたものかなと左右を見渡してみて――獅子のような髪型をした女子店主と目が合った。獲物を見つけたとばかりににやりと微笑まれた。
「っしゃ――い！　そこのカップル！　そうそこの！　お、軍帽が似合うねーそこのキミー！」
「ええッ⁉」
「はあ⁉」
不意打ちを食らい、松本が一歩ほどノックバックする。カップル扱いされたことで、赤木も音波じみた遠吠えを上げてしまった。
「ウチのトリッパはアンツィオ一だよ！　本当は２００万リラするんだけど、今日は練習試合お疲れ様祭りということで１５０万リラ！」
店主が、ずびしと人差し指を差してきて、
「更に！　カップル料金が追加されて１００万リラになりましたーッ！」
「な、なんだとぉッ⁉」
松本の狼狽が、出店広場全体に爆発する。耳元でぶちかまされたせいか、赤木も情けない声が出た。
痛む耳を抑えながらで、無理もないよなと思う。
「……店主さん」
「はいはいなんですかー⁉　すぐに出来上がりますよー！」
「いやその、あのですね？」
「なんだい⁉」
香ばしい匂いが鼻孔をくすぐり、好き勝手に騒がしい歓声を背景

に、赤木は「えうんっ」とわざとらしく唸る。
「俺ら、カップルじゃないんですよ」
その時、松本が無言で赤木のことを見つめた。真顔そのものになって。
――最初は、何か余計なことを言ったのかなと思った。
けれど松本は、何事もなかったかのように破顔する。
「そうそう、こいつとは友達なんだよ。カップルじゃないんだ」
だから、松本は１５０万リラ――もとい、１５０円を店主に渡そうとする。
けれど店主は、手のひらでそれを制してしまう。首を横に傾ける松本。
「１００万リラでいいぜ」
「え、なんで」
店主が、ウインクを決め込み、
「お似合いだから、特別料金で食すことを許すッ！」
「ど、どういうことだ？」
「お似合いはお似合いってことさ。今はカップルじゃないかもしれないけど、もしかしたらもしかして？」
「や、やめてくれよ店長！」
思わず抗議の声が出る。松本とは友人同士でまかり通っているのだから、そんな煽りをされても困る。
「はっはっは、照れるな若人！　じゃあはい、トリッパ１００万リラー！」
「ああ、どうもどうも。……疲れた」
「……だな」
一店目から、早くも両肩が落ちる。
なるほど、アンツィオは確かに楽しい世界だ。ナンパの本場と言われる所以も、わかった気がする。
風のうわさによると、アンツィオは入学したい学校ナンバー１とのことだが――納得した、つくづく。
「松本」

「ん？」
「――楽しいな」
松本の動きが、きょとんと止まった。
それでも、アンツィオの祭りは動き続ける。練習試合すら食い物にしてしまうアンツィオは、これからも騒がしく生きていくのだろう。
一瞬だけ「ここもいいかな」と思ったが――
「……ああ、本当にな」
あくまで自分は、大洗航空隊の一員だ。
松本が苦笑いでアンツィオの空気を受け止める、店主からトリッパ二人分を手渡される。
とても、うまかった。
松本も、笑みを浮かべながらでアンツィオ飯を味わっていた。
その後は、松本とともにジェラートやペスカトーレ、パンドーロの味をたっぷり体感した。注文するたびに毎回毎回「カップル料金ね！」と騒がれては「ちゃう」と否定し、ならばそれならばとお似合い料金が適用される場面が続いた。正直めちゃくちゃ疲れたが、店主はあくまでも善意で、それも賑やかに笑顔で受け答えするものだから、自然と悪い気はしない。
パターンじみたやりとりすら、途中から楽しんでいたフシがある。松本と仲良く見えるのであれば、それはとても喜ばしいことだ。
メシを食い、ほんの少し歩いてみれば「どっちのパスタが美味いか、協力してくれ！」と二人の店主からせがまれ、ならばと松本が参戦し、持ち前の分析力で公正な判断を下しては「っがとございました！　姉貴！」と健やかに吠えられた。
――そうして一時間は経過しただろうか。満腹状態の松本が「そういえば、カエサルは？」と問うてきて、すっかり忘れかけていた赤木から「あ」がぽろりと落ちた。
カエサルめがけ、『今どこにいるの？』とメールを打ち込む。そこから数十分は経過して、出店広場の向こう側から「おーい」の声が耳に届いてきた。
「――やあ」

「やっと帰ってきたか。……あれ、友人はどうした？」
松本の疑問に対し、カエサルは「ああ」と頷いて、
「本当はお前達にも紹介したかったんだが、用事があるといって帰っていってしまった。残念だ」
「そっかー」
そういうことなら仕方がない。赤木は、音を立てながらで背筋を伸ばした。
「で」
「で？」
「お前ら、ちゃんと楽しんだか？」
カエサルが、実に楽しそうに目と口を閉じる。
そんな簡単な質問なら、すぐに答えられる。
「――すげえ楽しかったぜ。な、松本」
「ああ、お陰で夕飯はいらないかもしれない」
「そうかそうか、それはよかった」
カエサルが近づいてきて、赤木の肩を軽く叩く。
「いい経験をしたな」
「あのな。こっちはな、毎度毎度カップル料とか言われて、大変だったんだぞ」
松本が、実に楽しそうに苦笑いを浮かばせる。対してカエサルは、何の悪びれもせずに「ほうほう」と二度うなずいて、
「見たかったな、それ」
「やかましい」
「怒るな怒るな。……じゃあ、そろそろ帰るか？」
「メシは？」
「友人と一緒に、軽くとった。問題ない」
「へー」
ならいいやと、その場で振り返る。
そろそろ夕暮れが訪れようとしているというのに、出店広場は未だに沈黙の兆しすら見せようとしない。むしろ暗がってくるたびに、いよいよもって活気づいてきた気がする。

「いい場所だな」
てんやわんやがあったが、結局はこの言葉に行き着く。
「ああ、いい場所だ」
松本も、同じ感情を抱いたらしい。
カップルだの何だのと言われてしまったが、今となっては良い思い出だ。きっと松本とは、これからも上手くやっていけるに違いない。
「――楽しかったようだな、本当に」
「ああ」
「ああ」
高揚めいた名残惜しさを胸に、赤木と松本、エルヴィンは、無言で帰路についていく。その歩みはずいぶんとゆっくりだったが、誰も何も指摘したりはしなかった。
アンツィオしか見えない空を、目にしてみる。
世界は今日も平和だ。明日も、きっとそういうふうに動いてくれるだろう。

――――

無事に中学三年生に進級して、赤木は相も変わらず戦闘機道を歩みっぱなしでいる。学校の成績はまあまあ、戦闘機道に対する欲求はバリバリと、ほんとうに何も変わっていない。竹下に芝村、松本にカエサルとも、変わらぬ友情を交わし合っている。
しかし、中学三年の教室は一味変わってしまっていた。
左から聞こえてくるものは、「あいつ気になるんだよ」。右から聞こえてきたのは、「俺、あいつと付き合うことにしたんだ」。
中学二年の頃だって、恋バナ程度はそれとなく耳にしていた。けれども一つ年をとっただけで、異性に対する関心がここまで深くなるのは予想外のことだった。
竹下は実に実に羨ましがり、赤木は「へえ」とだけ。
それは、昼休みの食堂でも変わらない。むしろ学校生活に一区切りがついたせいか、余計に恋バナが色濃くなっている気がする。
乱立する恋バナを耳にしながら、竹下が醤油ラーメンをすすりつつ「うっらやましー」と愚痴り始めた。この件に関して言えば、赤木は

「かもなあ」としかコメントできない。
「戦闘機道ってモテるんですかねえ、たいちょー」
「さあなあ……練習試合の申し込みはずいぶん増えたけど」
「えー、むさい野郎どもからモテてもなー。それでいいんすか隊長ぅー」
「いいよ別に」
竹下からの隊長呼ばわりは、何の間違いでもない。
このたび赤木は、大会における功績や努力が認められて、無事に隊長へと任命されたのだ。中学戦闘機道全国大会においては、惜しくも二回戦目で敗退しまったのだが、去年の一回戦目敗退と比べれば十分な快進撃だった。
大会終了後、隊長は「お前の作戦のおかげで、俺達は満足に戦えた」と言ってくれた。
間もなくして、赤木は声を上げて泣いた。
そんな赤木に、隊長は大洗航空隊に代々伝わる隊長用のパイロットゴーグルを手渡してくれたのだ。
赤木は、もっともっと泣いた。一生止まらないんじゃないかと本気で思うくらい、涙が溢れ出た。
誰も異論など唱えず、竹下が肩に手を乗せてくれて、芝村が「おめでとう」と小さく呟いたことを、今でもよく覚えている。
――そういうわけで、竹下の隊長呼びは何も間違ってはいない。ただ、不真面目さが露骨ににじみ出ていたが。
「ちきしょー、何でどいつもこいつも好きになったり好かれたりするんだよ。もしかして俺らだけか？　フリーなのは」
「そうなんじゃないの」
「俺、ファッションセンスとか改善しようかしら」
「お前はそのままでいいだろ。俺と比べて、たくさん遊べたりしてるじゃねえか」
竹下はお調子者である。それ故に常に話題は更新されるし、休日に見せる私服姿だって都会人のように洗練されている。趣味も多く、暇の潰し方を聞けば喜んで教えてくれるのだ。

赤木だって普通に遊ぶし普通に勉強嫌いではあるが、戦闘機道が絡めばアタマもカラダも鍛える。逆を言えば、戦闘機道という軸がなければ途端に暇人と化すタイプだった。
「……あー、今度の文化祭は頑張ってみようかなー」
「なんで」
「文化祭は、異性と交流するチャンスだから。そこを狙う男女は多いって聞く」
「マジか」
「マジ」
つまらなさそうな表情のまま、竹下がたくあんを齧る。
「出会いが欲しいなー」
「がんばれ」
「贅沢は言わねえよ。公園のベンチでもいいし、森の中でも構わん。何だったら牛丼屋でも」
「健闘を祈る」
「おいおいツレねえなー赤木クーン」
「ンなこと言われても」
半ば聞き流す調子で、白米を噛んでいく。こんな状況であろうとも、やはり美味いものは美味い。力の抜けきった意識に、僅かながらの活力が取り戻されてきた。
「はーだめだ、このヒコーキ野郎は空しか見てねえ。……なあ芝村ー、お前はどう思う？」
赤木の隣に座る芝村の反応は、無言だった。
赤木も竹下が、同時に「あれ」と漏らす。寡黙で生真面目な芝村といえど、振られればキチンと反応するはずなのに。
「芝村？　おい、芝村？」
「あ……す、すまない」
「おいおいどうした？　調子でも悪いのか？」
「いや」
赤木が箸で多目の白米を摘みながら、「何か悩み事か？」と問う。
――頷く。

「……何だ？　よければ、話してみてくれないか？」
「そうだよ、俺らに何でも言ってみなって」
芝村は友人だ。だからこそ、赤木と竹下が大真面目な真顔に成り代わる。
そして、芝村はしばらく沈黙する。昼飯の一つも口にしないまま。
どうやら、相当デリケートな悩みを抱えているらしい。こうもなれば、急かしたりするのはNGだ。竹下と目が合ったが、無表情で意思疎通を図れた。
「――えっと」
「ああ」
「これは秘密にして欲しい悩みなんだ」
「うんうん」
「何を聞いても、大きな声だけは上げないで欲しい」
「赤木、いざとなったら俺の口を塞いでくれ」
「心得た」
芝村が、大きく息を吸い、音を立てて吐く。
あまりの非常事態に、周囲からの喧騒がいつも以上に聞こえてくる。箸の動きがぴたりと止まる。一時も、芝村の横顔を見逃したりはしない。
そんな時間が、いったいどれだけ過ぎ去ったのだろう。
芝村が、じつはなと言う。じつはなと言い、
「俺さ、ここ最近、文通してるんだ」
「ぶんつう」
「――女の子と」
赤木の鼓膜が、女の子という言葉を受け取る。赤木の脳ミソが、女の子と文通という重要性を解析する。
「なに――――」
竹下の手のひらが、赤木の口と鼻を思いきり塞いだ。
「マジかよ」
「ああ。この前、取材されたろ？　で、新聞を読んだらしい女の子が、俺のファンになったらしくて。それで、ファンレターがな」

「マジかよ……」
「俺は、普通に手紙のやりとりをしていたはずなんだ。でも、段々と――花木さんって言うんだけどな？　花木さんは、俺といつかデートをしたいって言ってくれた」
「マジかよぉ……」
「写真も添付されてきたんだが、見るか？」
「見る……」
　文字通り息詰まっている状況の中、芝村は財布を取り出し、一枚の写真を取り出してみせた。
　――黒縁眼鏡をかけた、黒い長髪が特徴的な女の子だった。主観的にモノを言えば、マジメそうでかわいいじゃん、である。
　それにしても、さっきから息が吸えていないせいで身も心も死にかけだ。半ば本気でふざけんな離せてめえといわんばかりに、竹下の手の甲を思い切りつねる。
「って！　何すんねんッ！」
「殺す気か！」
「いや大声を出したお前が悪いだろッ！」
「……すまん」
　芝村に対し、思い切り頭を下げる。これは確かに、迂闊に大声を出してはいけない案件だった。
「いや、いい。動揺してしまうのは、仕方がない」
「本当にすまない」
「ってて、俺に謝罪はねえのかよー」
「悪い悪い」
　両手を合わせ、頭を傾ける。竹下が「ったく」の一言で許してくれた。
　――さて。
「芝村」
「ああ」
「お前は、どうしたいんだ」
　赤木は、大洗航空隊の隊長だ。だからこそ、自分だけが強くなって

はいけないし、安定してもいけない。
隊長だからこそ、仲間たちとは、友人とは、これからも優雅に力強く羽ばたいていきたい。心の底から、そう思っている。
芝村から、目を離したりしない。
「……そう、だな」
「ああ」
「――好きだ、花木さんのことが」
「そうか」
「ああ」
芝村が、思い切って息を吸い込む。味噌汁を、あえて飲む。
器が、音を立てて置かれた。
「次に手紙を書く時は、デートに、誘ってみようと思う」
「それがいい」
「それで、告白もする」
「わかった」
「――良い映画、調べておくか？」
竹下の一言に対し、芝村が「頼む」と頭を下げる。気にするなとばかりに、竹下が控えめに口元を緩めてみせた。
「俺は、こういうのに疎いから、何も協力できない」
「いや、聞いてくれただけでも助かる」
「そう、そこだ。お前は真面目で、勤勉で、無駄口を叩かない。お前のような男なら、花木さんとはこれからも上手くやっていけるはずだ」
「……そうか」
赤木と竹下が、無言で首を縦に振るう。
――それだけで、十分だった。
「ありがとう」
それだけで、十分だった。
芝村の笑顔を伺えた以上、これ以上の言葉は何の意味も成さない。あとは、芝村が行動に移すのを待つのみだ。
昼飯を食べ終え、ごちそうさまと手を合わせる。竹下は大急ぎで携帯を操作し始めたが、おそらくは映画のサーチを行っているのだろ

う。
対して自分は、芝村を見守ることしか出来ない。
けれど、言うべきことは全て言った。後悔なんてしていない。
デートにベストマッチした映画の情報を、竹下が報告していく。芝村は、それを生真面目にメモしていく。
チャイムが鳴る。これから戦闘機道の授業が始まるが、いつも以上に長くなりそうだ。
――――
「また下校デートっすか、芝村さんは」
「そうらしいですよ、竹下さん」
放課後になって、羨望と脱力が入り混じった声が無遠慮に吐き出される。
芝村の決意からたった数日が経過したが、結果は大成功だった。そりゃあもう芝村は泣いて喜んで報告してくれたし、お礼と称して昼飯を奢ってくれたし、これからもダチであると宣告し合ったし、文句なしの結末を迎えられたのだが、
ここ数日間、芝村は毎日のように下校デートを繰り返していた。
当然、ノロケ話も聞かされるようになった。
そのたびに竹下は、本心から称賛し、心の底から恋を羨望するようになっていった。
こうなると戦闘機道が心配になってくるが、そこは一履修者として真面目に取り組めている。この前の練習試合だって、貰い受けた知恵と身につけた実力で勝利してみせた。
――やっぱりというか何というか、ここ最近の芝村の活躍ぶりは実に目覚ましいものがある。元はと言えば、花木とは戦闘機道を通じて繋がれたのだから、いよいよもって力を入れ込むのも当然だった。
「あー、幸せそうな顔してましたなー彼」
「そーですなー」
「まあ、それはいいんだけどね。でも、おすそ分けが欲しいっすよたいちょー」
「じゃあ聞くが。お前、好きな人はいるのか？」

「……いねえ」
「じゃあ、運命の出会いでも待ちなさい」
ちぇー。竹下が、唇を思い切り尖らせる。
放課後の教室は、いたって平穏だった。休日の予定についての話し合い、携帯で彼女らしき相手との通話、部活動に向かうクラスメート、外から響く虫の声、窓から射し込まれる夏模様の日光。
平穏そのものだった。
赤木が、学生カバンを背負い、
「じゃ、帰るか」
「帰るべ」
じゃーなーとクラスメートに挨拶して、またなーと返され、名も知らぬクラスメートとすれ違っては、別クラスの戦闘機道履修者に「おつかれさん」と一声。竹下と他愛の無い会話を口ずさみながら、一階まで降りて下駄箱から靴を引っ張り出す。
何百回も繰り返された、下校の光景だ。
大洗中学校から一歩足を踏み出してみれば、夏の光と気温が身に染み込んでくる。唸りながら背筋を伸ばし、たまらずあくびを上げながら、校門をくぐり抜けようとして、
女の子が、校門の隅から不意に現れた。
少し驚きはしたが、非現実的な光景というわけでもない。下校デートを行う為に、こうして待ち続けていることもよくある話だ。
羨ましいねえ。竹下が、ぽつりと呟く。そうだなと、赤木がこっそり口にして、
「ねーねーキミー、竹下クンだよねー」
竹下？
竹下と顔を合わせ、竹下が「俺？」と指差す。
「あ、赤木クンがいるってことは……やっぱりキミ、二式陸偵乗りの竹下クンだ」
「は、はあ、二式陸偵乗りの竹下ですが……」
腕を後ろ手にまとめながら、いかにも徹底して手入れされているロングヘアを揺らしながらで、竹下の顔をじーっと見つめ続けている。

逃げるように、竹下へ視界を泳がせる。肝心の竹下はいえば、「なにかな？」と漏らしていた。緊張丸出しだった。
「うんうん、なるほど。ねーねー竹下クン、キミって彼女いるの？」
「え!?　いやっ、いませんけど」
「あ、そーなんだ」
「そーなんですけど……というか、君は、誰？」
女の子が、白い歯を見せながらで堂々と笑みを浮かばせ、
「私は笹部、キミと同じ三年。こう見えてヒコーキ好きなんだ」
「ま、マジで？」
「マジで」
一見すると、そうは見えない。
しかしよく観察してみれば、笹部の学生鞄にはフライグパンケーキのキーホルダーがぶら下がっている。
「竹下クンのことは、よーく見てたつもりだよ。もち、双眼鏡でね」
「すげえ」
「すごくないって、ヒコーキ好きなら必需品っしょー？」
全くもってその通りなので、赤木は頷くことしかできない。
「でさでさ、竹下クンってばさ、私の好みなんだよね」
ちんもく。
「ま、マジでっへぇ!?」
「マジマジ。一応聞くけど、キミ、飛行機好きだよね？」
「そりゃあ、当然」
「じゃ、あれ（二式陸偵）に乗る意味もわかってんだよね」
「え、」
笹部が、実に気楽そうに微笑んで、
「ということは、偵察する危なっかしさもわかってるわけだ。しかも、攻撃というスター性を捨てていることも理解してて」
「あ……まあ、勝てればそれでいいやって思ってるし、逃げ足は早いほうだし」
「っかそっかそっか。やっぱりキミ、かっこいーわ」
お調子者の竹下が、すっかりうつむいてしまっている。笹部はやっ

ぱりC調を崩さないが――竹下のことだけを、見つめている。
「うん、こりゃやっぱり私の好みだわ」
「うう」
「だからさ、よかったら私と友達から始めてくれない？　いきなり付き合うって言われても、正直困るっしょ？」
「いや、そういうわけじゃ……んー……」
　気を遣っているのだろう、竹下が唸り声を上げる。
　けれど笹部は、「いいっていいって」と笑い続け、
「私のことを好きになれるように、私も色々頑張るからさ。だから竹下クンは、竹下クンのままで私を見て欲しいな」
　この瞬間、何かが撃ち抜かれる音が聞こえたと思う。
　急かされるように、竹下の様態を確認し――赤木は、竹下の肩をぽんと叩く。
「じゃ、俺は先に帰るから」
「ごめんね隊長、気を遣わせちゃってー」
「いいよ。……竹下のこと、よろしくお願いします」
「まっかせてー」
　今日は、友人のいい顔が見られた。
　恋っていいものだなと、今更になって思う。
　数分ほど歩いたあとで、余韻に引かれるがまま空を眺めてみた。
　夏だからか、放課後になってもなお青く明るい。ちぎれた雲がそこかしこに浮かんでいて、清々しいまでの晴天がそこにある。
　世界は、思った以上に優しくできているようだ。

――

　そういった事情があって、ここ最近は一人で下校するか、或いは松本とカエサルの三人組で帰路につくことが多くなった。
　寂しいといえば寂しいが、クラスに出向けば友人とは会えるし、戦闘機道が始まれば互いに高め合うことも出来る。
　だから、心の底から「よかったな」と称賛してやるのだ。
　――放課後になって、松本とカエサルと合流を果たす。そうして、カエサルの「で、どうだ？」から全てが始まる。

「あいつらなら上手くいってるよ。芝村はもちろん、竹下も腕が上がってきた」
「愛の力というやつだな」
「かもしれない。何はともあれ、幸せそうなら何よりだ」
松本とカエサルが、まったくだと頷き合う。
「……と、なれば」
「ん」
「来月の大会は、いけそうだな」
カエサルの言葉に、赤木が無言で首を縦に動かす。
気づけばもう、そんな時期だ。5月頃からだいぶ意識していたはずなのに、いつの間にかという感覚が拭えない。
「みんな立派に成長してくれた。もちろん、俺もだ」
「ああ、知ってる」
「俺達の地力もあるが、松本とカエサルのお陰で強くなれたのは間違いない。これは断言できる」
カエサルがふふふと笑い、松本は軍帽で目元を隠してしまった。
「今までありがとう。今の俺らなら、いける気が――いや、いける」
「うむ、素晴らしい」
「色々あったけれど、常に最善を尽くしてきたつもりだ。後悔なんてないぜ」
「ああ。赤木の言うことは正しい」
分析が得意な松本から、カエサルからお墨付きを貰えた。
これは、非常に大きな一歩前進といえる。
「飛んでこい」
「おう」
松本から背中を軽く叩かれ、何だかおかしくなって苦笑してしまった。
今は、これで良い。
――戦闘機道の件は一旦置いておくとして。さっきから、松本のことが気になって気になって仕方がなかったのだ。
松本のことを、じろじろと眺める。松本は、まるでもったいぶった

笑みを浮かばせて「どうした？」と反応を示す。
「松本よ」
「うむ」
「何だね、その格好良い服は」
顔に「よくぞ気づいてくれました」を露にしながら、松本がその場で一回転する。コートらしきものが翻る。
「やっと買えたんだ、軍装をな」
「お、そうなのか！」
「うむ。進級祝いに小遣いが増えてくれたおかげで、ようやく一品目を手にすることが出来たッ！」
どうだ見てくれとばかりに、両腕を大げさに広げてみせる。茶色のコートめいた軍装は、松本が持ちうるカラーとベストマッチしている気がした。
「いやいや、よく似合ってるぜ」
「ふふん、そうかそうか」
「格好良いぞ、エルヴィン」
「カエサルもな」
松本とカエサルが、何の迷いもなく手と手を叩き合う。
体育会系の赤木は、心の中で「やっべかっけー」とか思っていた。
「……しかしまあ、ここまで本格的になると」
「ん」
「エルヴィンって、呼ぶべきなのかもな」
「え。そ、そうか？」
「ああ。せっかく高い金を出して、ようやく憧れの人になれたんだ。なら、俺もそう呼ぶべきなんじゃないかなって」
「――うーん」
そこでエルヴィンが、両腕を組みながらでうつむいてしまった。
あれ、と思う。
何か間違ったことを言ったかな、と思う。
助けを求めるようにカエサルめがけ首を向けるが、「まあ、待ってやれ」とだけ。

カエサルが言うのなら、つまりはそうするべきなのだろう。
「――わかった。じゃあ、エルヴィンと呼んでくれ」
「お、了解」
「ただ、呼び方はこれまで通り何でもいいからな」
「わかった」
不意に落ちてきた緊張感が解かれ、思わず息を大きく吹き出す。
今日から松本は、エルヴィンとなった。
――こうして考えてみると、意外と松本のキャラに見合った名前なんじゃないだろうか。
「ところでエルヴィン」
「う、うん」
「お前さ」
「ああ」
ずっと、気になってはいたのだ。
エルヴィンの頬をつたう汗に、無遠慮に鳴り響くセミの鳴き声。長袖のミリタリーコートに、7月という夏真っ盛りの中、
「暑くないの？」
「あつい」
「カエサル、お前は？」
「あつい」
「脱ごうぜ」
「ええ……」
「ええ……」
歴女を歩むか、生存を選ぶか。
エルヴィンとカエサルにとっては、極めて重要な二択であり――
結局、脱いだ。
――
8月――
気温が最も高くなる時期であり、空が真っ青に染まる時でもあり、中学戦闘機道全国大会が開催される瞬間だ。
やれるだけのことは、精一杯やった。自分が乗る紫電も、まるで手

足のように扱える。練習試合の方も勝率が上がってきたし、隊員の士気だって十分に保たれていると思う。
なのに、眠れない。明日は、知波単と試合をしなくてはならないというのに。
――今は午後九時。さすがに早寝しすぎただろうか。
溜息が漏れる。
目をつぶる。
目の前が真っ暗になっただけで、意識は未だ真っ白のままだ。かといって、遊んで時間つぶしをする気分にもならない。
どうしたものかなと、仰向けになりながらで両手両足を広げる。目を開けてみると、暗がりの中でも部屋がうっすらと見えた。
その時、携帯が震えた。
少しビビリながらも、ベッドから這い出て、半ば急ぎ足で携帯の元へと駆け寄り、そのまま携帯の画面を目の当たりにして、
新着メールが届きました、『エルヴィン』。
こんな時間帯に、珍しい――
そう思考しながら、慣れた手付きでメールを開いてみせて、
受信者：エルヴィン
『こんな時間にメールを送信してすまない。なんというか、ベストコンディションのお前にとっては余計なお世話なのかもしれないけれど、心配になってメールを送ってみた。
お前が隊長になって色々あったけれど、お前達は十分に強くなった。部外者である私が言うんだから、間違いない。
この前の練習試合は負けてしまったけれど、大洗航空隊は6割もプラウダ空軍中等部を食えた。その結果に驕らず、お前達は更に練習を重ねたんだ。
だから、練習試合を行った時よりも強くなっている。優勝の可能性だってある。
お前は優秀な隊長だ。この私が言うんだから、間違いない。
これは万が一の話になるが……大洗航空隊が途中で敗退しようとも、お前は胸を張ってもいい。やれるだけのことはやったんだから、

後悔なんてしなくていい。
仲間として、この事実は絶対に保証する。だからお前は、恐れず誇らしく空を舞ってくれ。私を、カエサルを魅せてくれ。
最初から最後まで、私のノートを頼りにしてくれてありがとう。
それじゃあ、明日は頑張って。おやすみなさい』
闇の中で、俺は携帯を胸に当てた。
張り詰めた意識が消えていく。息とともに、不安が吹き飛んでいく。
俺は、お礼のメールを送信した。
そのまま携帯の画面を暗くして、眠りについた。

――――

9月――大会は、大洗航空隊中等部は、ひとまずの終りを迎えた。
一回戦目の知波単を撃破し、二回戦目にアンツィオとぶつかって――敗北した、やつらは強かった。
最善は尽くしたし、対アンツィオの戦術は頭に叩き込んでいた。けれどもアンツィオは粘りに粘り、着々と大洗航空隊を料理していき、隊長らしい機体と一騎打ちを繰り広げて――文句なく、負けてしまったのだ。
悔いはない。
礼に始まり礼に終わり、たまらなくなって履修者全員を抱きしめて、履修者からはありとあらゆるお礼を言われ、竹下からは涙目で「最高だったぜ」と、芝村からは「ありがとう」の一言を浴びせられた。
ここまで来るのに、色々と長かった。
あっという間に、ぜんぶが終わった。
感情をこらえながら、撤収作業を行いながらで、つくづく、本当につくづく思う。
戦闘機道って、最高だ。
□
黄色く眩い夕暮れの下、履修者達は連絡船の中で音もなく休息に浸っていた。いつもの、野郎ども特有のガヤは、今は聞こえない。
そりゃそうかと、しみじみ思う。

竹下は手すりに身を預けながら、日に輝く海の向こうをじっと見つめている。芝村は、椅子に座りながらでうつむいたまま動かない。
他の履修者達も、似たような感じだ。
激闘が終わったのだから、こうもなるのは必然だった。
――少し眠ろうかな。
仮眠出来る場所はないかなと、船内を歩き回ってみて、
携帯が、震えた。
いったいなんだろうと、疲れ切った手付きでポケットから携帯を引っこ抜いて、
着信：エルヴィン
――たぶん、俺は笑えていたと思う。
「はい」
『ああ。今、大丈夫か？』
「いいぜ」
『そうか。まあ、短く済ますつもりだから』
「ああ」
ほんの少しだけの、間。
『赤木』
「うん」
『最高に、格好良かった』
「ああ」
『高校でも、飛んでくれるよな？』
「もちろん」
『じゃあ私は……いや、私とカエサルは、引き続き裏のブレインとして暗躍してみせよう』
「頼もしいぜ」
『だろ？』
互いに、苦笑交じりに笑ってしまう。
――エルヴィンの言う通り、自分は高校戦闘機道を歩むつもりだ。
だからこそ、まだ優勝する機会が残されている。
『な、赤木』

「うん？」
『……お疲れ様。今は、ゆっくり休んで』
「ああ」
『今度、武勇伝を聞かせてくれ。カエサルも楽しみにしている』
「もちろん」
『よし。――それじゃあ、また』

海から、遠い遠い空をぼうっと眺めてみる。
世界が、自分のことを受け入れてくれた気がした。

――

夏が終わり、秋が過ぎて、ようやく念願の冬休みに差し掛かった。
寒いのが嫌いな赤木は、当面は実家に引きこもるつもりでいた。コタツに籠もり、ぼうっとテレビを眺め、月刊戦闘機道を読み漁って、のんべんだらりとおしるこを食べ、やりたくない宿題を仕方なくこなす。
そういうふうに、生きる予定だったのだ。
「もう少しで年越しか、歴史の流れとは早いものだ」
「確か年をとると、体内時計が早まると聞いたが」
「本当か。おかしいなあ、これでも現役のつもりなんだが」
「ま、歴女のキャラからすれば、年を取ることも美味しいんじゃないのか？」
「確かに。……あ、みかんもらうぞ」
まず、赤木がこれみよがしに溜息をつく。すっかりコタツから抜け出せなくなったエルヴィンとカエサルに向けて、実に嫌そうな声で
「あのな」と言ってやる。
「何」
「どうした」
「――何で、お前らがここにいる」
エルヴィンが、疑問顔になりながらで首をかしげ、
「友達の家に、遊びに行っては駄目か？」
「いやそういうわけじゃないが」

「ならいいだろ。あとぶっちゃけて言うなら、ヒマ」
カエサルの意見に、エルヴィンが同意する。
――そう。
赤木の実家は、いつの間にやら溜まり場になってしまっていた。最初の訪問こそ快く歓迎したものだが、こうも連日に遊ばれては、のんびりするスキもあったものではない。
親もすっかり受け入れてしまっているし、おまけに夕飯まで出してくれるものだから、エルヴィンもカエサルも躊躇というものがなくなってしまっているのだろう。
「ここを気に入ってくれるのは嬉しいが、もうちょっとこう遠慮をだな」
「ん」
エルヴィンが、学生鞄から大量のプリントを引っこ抜く。
その瞬間、赤木の愚痴なんてものは止まる。
「宿題、付き合ってやってるだろ。お前、積極的にこなせるタイプだっけ？」
「ありがとうございますエルヴィン様」
「はっはっはっは」
「はっはっはっは」
おまけに隠し玉も持っているから、邪険に追い出すこともできない。
そういうわけなので、今日も共存関係を図れている。
「あとで宿題やるぞー」
「へいへい」
「テレビつけるぞー」
「へいへい」
我が家のモノといわんばかりの手付きで、カエサルがコタツの上からリモコンを掴み取り、テレビに火をつける。
ニュース番組が映し出され、駅前に居るニュースキャスターがマイクを片手に『記録的な氷点下です！　厚着をしていますが、寒いですねえ』と困った顔をする。

右上に表示されているテロップには『マイナス１８℃、今年一番の氷点下』と表示されていて、カエサルが「籠城最高だな」とコメントする。
――その時、彼氏の腕を抱いているカップルが近くを通りがかった。
ニュースキャスターが早速とばかりに近づき『こんにちは。いやあ、雪は降っていないものの寒いですよねえ』とマイクを差し出しては『いやあ、あったかいですよ』と、彼氏が喜色満面の笑みで答えてみせる。
ニュースキャスターが笑い、赤木が「ほー」と漏らし、エルヴィンが「おあついことだ」とみかんをかじる。
「あーそういえば。竹下と芝村は相変わらずか？」
「何も変わってねえわ。ほんと幸せそう」
「それは何より。友の幸せは尊いものだ」
「全くだ」
「――で」
きた、カエサルの「で」。嫌な予感がするので、あんだよと言ってやる。
「お前さ」
「ああ」
「恋愛に興味はないのか？」
エルヴィンが「む」と唸る。赤木は、「はあ？」と言いはあ？　と表情を歪める。
「それを聞いてどうするんだよ」
「いや別に、ただの興味本位」
「興味本位って……まあ、そうだなあ」
カエサルが、眠そうな目つきで頬杖をつく。エルヴィンが、真顔でこちらを見つめている。
コタツの快適さに身をアテられながらも、これっぽっちも使ったことがない恋愛観をほじくり出してみる。二度、三度ほど唸って、途中でみかんを食べて、

「まあ……運命の出会いみたいなものがあれば、恋はするかなって」
「うぅんめぇ？」
「あんだよ、悪いかよ」
「いやすまんすまん。へえ、お前って意外とロマンチストなのな」
「そういうわけじゃないが」
「そうか。……てことはアレか、まだ出会いは果たしていない、と？」
「そういうことになるのかね」
カエサルと同じく、コタツの上で赤木が頬杖をついて、
――その時、カエサルが無言でエルヴィンのことを横目で見た。
エルヴィンもそれに気づいたらしく、カエサルめがけ「なんだよ」と返す。
「いや、別に。ただ、お前も恋愛ってのに興味があるのかなって」
そして、沈黙が生じた。
赤木は意外に思った。歴女たるエルヴィンなら、「恋愛？　そんなことより学ぶべきものが多いんでな」と即答するのでないのかと思っていたのだ。
しかしエルヴィンは、ごくごく真面目な顔つきで、顎に手まで当てて、人差し指が上下に揺れている。
「……まあ、興味は、ある」
「へぇー」
意外な返答だった。思った以上に、声が出てしまった。
「なんだ、おかしいか？　へっ、どうせ私は歴女だよ」
「いやいやぜんぜんおかしかねえって。いいじゃねえか、興味があることは」
「そう、か？」
「ああ」
エルヴィンの目を、じっくり見据える。
「もしもさ」
「ああ」
エルヴィンの鋭利な瞳が、視界に映り込む。
赤木は、ごくごく真面目な意識を持ちながら、

「お前に好きな人が出来たら、協力するよ」
正直に、本心からモノを言った。
その時、カエサルが口を閉ざす。エルヴィンから「あ」が漏れてくる。
「お前には、戦術面でいつも助けられっぱなしだからさ。だから、恩返しぐらいはしたい」
「い、いや、あれは好きでやっていることだから」
「それでも、だ」
自分は、
「友達だろ？」
笑えたと思う。
「――ああ、そうだな」
エルヴィンは、真顔でそう口にして、
「そうだな」
密かに、口元を緩めてくれた。
――エルヴィンは、いったいどんな男が好きなんだろう。想像出来ないが、恋という大事なものを抱えた以上は全力でサポートするつもりだ。
エルヴィンがいなければ大洗航空隊なんてボロボロのままだったろうし、これまで以上に人生を楽しむことなんて出来なかっただろうから。
ほんとう、長い付き合いだったと思う。
願わくば、来年も友情を育んでいきたいと想う。
テレビを消して、三人で宿題をやっつけはじめる。カエサルは寡黙に、エルヴィンは順調に数学を解いていたのだが、赤木は早速とばかりに行き詰まってしまった。
そんな姿を逃すはずがないエルヴィンは、ヒントを交えて的確に答えへと導いてくれた。エルヴィン曰く「歴史以外の授業はやる気にならん」とのことだが、やる気がないだけでやらないワケではないのだろう。
エルヴィン、そしてカエサルのお陰で、宿題に一段落がついた。ま

だまだ厚みがあるが、この調子でいけばヤキを入れられる心配もなくなるはずだ。
――気づけば、もう七時だった。
「こんな時間か」
「そろそろ帰ったほうがいい。家まで送ってくよ」
エルヴィンもカエサルも、いやいやいいからと断ろうとする。しかし赤木は、そうもいかんと反論し、
「女の子が夜中に歩くのは危ないだろ？」
「う、うん」
エルヴィンが、控えめに頷く。それを見たカエサルは、それもそうかと案を受け入れてくれた。
――言葉通り、記録的氷点下の中で、エルヴィンとカエサルを家まで送り届ける。僅か数十分程度しか歩く必要がないから、面倒なんてことはない。
先にカエサルを帰し、次にエルヴィンの自宅前へ差し掛かった時、
「世話になった」
「気にするな。宿題の貸しを返しただけだ」
「そうか。……ああそうだ。お前、正月はヒマか？」
「あー、かなー」
「じゃあ、一緒に初詣へ行こう。いいか？」
「いいぜ」
即答した。
こうしてエルヴィンは、ドアの閉じる音とともに姿を消していく。
――いい空じゃないの。あそこで飛んでみたいもんだ。
極寒とは裏腹に、星々が暖かそうに光を灯している。
――
無事に1月1日まで生き延び、赤木は起床すると同時にすぐさま着替え、歯を磨き、顔を洗い、軽い朝食をとり、エルヴィンとカエサルの訪問を待つ。三人で、初詣へ行く為だ。
外はずいぶんと明るい。天候に恵まれたのか、青く染み込んだ空がよく見える。気温も3℃にまで落ち着いたらしいから、何に問題もな

く外出できるだろう。
その時、インターホンが鳴った。
母が受話器をとり、ほんの少しやり取りを交わした後で「松本さんと鈴木さんがきたわよー」と伝えてくれた。
お気に入りのミリタリーコートに着替え、「あいよー」と声を出して、玄関ドアを開け、
コートを着たカエサルと、
青い着物を着込んだエルヴィンが、いた。
「よ」
「や、やあ」
カエサルが、手で挨拶を交わす。エルヴィンは、視線を少し逸しながらで手のひらを左右に揺らす。
言葉なんて、見失うに決まっていた。
「エル、ヴィン」
「ど、どうだ？　気分転換のつもりだったんだが。あ、あはは」
「似合ってる」
この一言しか、思いつくことが出来なかった。
エルヴィンの方も着物に慣れていないようで、「うう」しか言えていない。
「最高だろう、かわいいだろう？」
「あ、ああ」
「私も最初見た時は、本当にびっくりしたよ。こんなにも似合っているんだからな」
「……そうだな、その通りだ」
パンツァーファウスト柄の青い着物は、エルヴィンという人と上手く馴染んでいると思う。
エルヴィンは内股になってまで顔を赤らめているが、そんなことをする必要はないと断言できる。
だって、
「エルヴィン」
「あ、ああ」

「綺麗だ」
「あ。ど、どうも……」
エルヴィンらしくなく、小さく頭を下げられた。
まだ火が止みそうにないが、こればかりは時間が解決してくれるのを待つしかない。
「……エルヴィン」
「う、うん？」
「あけまして、おめでとうございます。今年もよろしく、お願いします」
だから、いつもの調子で行こう。
「お……ああ！　こちらこそ、よろしくお願いいたします！」
「よろしくな」
一礼を交わした後で、にへらと笑い合う。これが、エルヴィンとカエサルとの関係だ。
「――それじゃあ、神社に行こうか」
カエサルの一声とともに、赤木が、エルヴィンが歩みだす。
□
誰もいない住宅地を潜り抜け、そのまま神社へ近づくたびに話し声が、人気が次第に色濃くなっていく。
未だ神社すら見えないというのに、着物姿の女性が、家族連れが、おじさんが、手をつなぎ合うカップルが、神社めがけ足を動かしていた。
カエサルが「こりゃ混んでるな」と予感するが、それは間もなく現実のものとなった。
神社の中は既に人と人とで溢れかえっていて、向こう側から鈴の音が高らかに響き渡る。手水場には数人のおじいさんおばあさんが手洗いをしていて、おみくじ売り場では五人の若者グループが「大吉出た！」と盛り上がっている。
――笑みがこぼれる。
こうした賑やかさは、どちらかといえば好きだ。
「混んでるなー」
「ま、時間が経てばお参りできるだろ」

「それもそうだ」
「……しかし、何やかんやで新年か」
カエサルが、しみじみと呟く。
「いつの間にか。お前達との付き合いが長くなったな」
「ああ」
「私は――四年ぐらいになるのかな？」
「私は中一の頃にエルヴィンと知り合ったから、おおよそ三年か。あっという間だったな、ほんと」
「色々あって、楽しかったよな」
エルヴィンとカエサルが、頷いてくれた。
参道を辿って数十分後。ようやく賽銭箱の前にまでたどり着き、「さーて」の一言とともに、エルヴィンが財布から五百円玉を取り出す。
赤木が、カエサルが「何ッ」と小さく驚愕するが、エルヴィンは「ま、叶えたい願いがあるんでな」とだけ。ならばと、カエサルは百円玉三枚と五十円玉を四枚、赤木もなけなしの五百円玉を選んでみせた。
「気合入ってるな」
「俺だって、叶えたい願いはあるしな」
「私もだ」
「そうかそうか。それじゃあ」
賽銭箱の前で会釈し、赤木が鈴を高らかに鳴らす。そうして各々が賽銭箱へ五百円玉を入れ、二礼二拍手一礼を行う。
――世界一の、戦闘機乗りになれますように。
□
「で、何を願ったんだ？」
帰路についている最中、カエサルが当たり前のように質問する。赤木は「あれ」と首をかしげ、
「確か、口にしたら願いが叶わなくなるんじゃなかったっけ？」
「あれ、そうだったかな？　まあ、どうせお前は一流のパイロットになりたいとかそんなんだろ」
「!!　い、いやぁ!?」

「へー」
「ほー」
　エルヴィンとカエサルが、いかにも面白がってますといった感じに笑う。赤木は、大きく露骨に舌打ちし、
「俺からは口にしていないから、ノーカンな」
「わかったわかった」
「で……カエサル。お前はあれか、ローマ時代の知識を網羅するとかそんな感じか？」
　適当に言ってみた。
　カエサルは、吹けていない口笛とともに目を逸らしきっていた。
　エルヴィンと赤木は、盛大な笑顔とともに指さしてやった。
「う、うるさい！　ああノーカンなノーカン！」
「はいはい」
「ったく……で」
　間もなく、エルヴィンに視線が殺到する。眉をひそめ、歯を食いしばり、実に嫌そうな舌打ちが飛んできた。
「戦史の知識の網羅とか？」
「……まあそうなんじゃないのか？」
　違うらしい。
「ヒミツか？」
「秘密だ」
「ヒントは」
「誰が言うか」
　カエサルが、「けちー」と吐く。今回はエルヴィンの一人勝ちらしかった。
「ったく……で、これからどうする？」
「ん？　お前ん家に遊びに行く」
　さも当然であるかのように、何でもない顔でカエサルが言い切った。
「ホントいい加減にしろよ皇帝」
「いいじゃないか別に。私は、ヒマなのは嫌いなんだ」

「あーそーかい」エルヴィンに目配りし「え、行くけど」「だろうな」
そういうことになった。
わざとらしく溜息をついてみせて、けれども笑ってしまって、
「お前ら」
「ん」
「何だ」
「――これからも、ずっと友達でいてくれ」
カエサルが、
「ああ」
エルヴィンが、
「――ああ」
伝えるべきことを伝え、背筋を伸ばす。丁度良く寒いせいか、かえって元気が湧いてきた。
「ウチに来るのは構わんが、宿題教えろよー」
「わかったわかった」
「あと、みかん食い過ぎなんだよカエサル。遠慮ってのを知らんのか」
「善処しよう」
「そこらへん、エルヴィンは結構模範的だよな。入り浸るけど」
「褒めてくれ」
「はいはい」
こんなやりとり、いったい何度目になるのだろう。こうして繰り返されることが、とてつもなく愛おしい。
見上げる。
今日は、ほんとうに良い天気だ。新年という門出に相応しいといえる。
カエサルが笑う、エルヴィンが皮肉を言う。
世界が、いつまでもこのままであり続けますように。
――――
平穏な春が訪れ、大洗高校へ無事に進学して、念願の高校戦闘機道を歩み出した赤木は、寮の一室で両腕を組みながら胡座をかいていた。

心臓の鼓動が、レシプロエンジンのように激しく動いている。失速したかのように、その場からぴくりとも動けない。炎上でもしているのか、身が熱い。

赤木の目の前には、携帯が床の上に鎮座されている。その画面には、エルヴィンの携帯番号が映し出されいた。

あとは「通話する」さえ押せば、エルヴィンと話が出来る。生まれて初めての気持ちを、伝えられる。

大きく、息を吐く。

まさか自分が、こんな自分が、無関心を決め込んだ自分なんぞに、運命がやってくるなんて思いもしなかった。

携帯を、そっと手にとる。

もう我慢できない。親友に相談したい。何とかしてもらいたい――

押し慣れているはずの「通話する」が、とてつもなく恐ろしいものに見える。やっぱりやめようかと、ビビリが生じて、

己が頬を叩く。

自分は男だぞ、撃墜したりされたりする戦闘機道履修者だぞ。

勢い任せの指使いで、「通話する」をタップする。

携帯を、そっと耳に当てる。

1コール、2コール、3コー、

『はい、もしもし』

「あ、ああ、もしもし、松本さんですか？」

『え、どうした。私は松本、松本里子、もといエルヴィンだが』

「あ、ああすまない、間違えた」

手のひらで頭を叩く。

『え、何いまの音』

「いや何でも。――あ、あのさ」

『ああ』

「えーっと、このことは他言無用で頼みたいんだが」

『カエサルにもか？』

「頼む」

『――心得た。して？』
逃げるように、ひと呼吸置く。
しかし、身体は少しも冷却されない。話を進めるたびに、心臓や血管が膨張していっている気がする。
けれど、ぜんぜん「不快」ではなかった。
「えっ……と」
『ああ』
「俺、好きな人ができた」
間。
間。
間、
『なに――――ッ!?』
「うわぁっあっ！」
あまりの大声に、手から携帯がこぼれ落ちてしまった。
身体全身を使ってまで、携帯を手早く回収して、大急ぎで耳元に戻す。
『ほ、本当か、本当なのか!?』
「ああ、本当だ、本当なんだよ」
『えっと、私の知っている人か？』
「……ああ」
『――名前は、名前は言えるか？』
予想できた、答えることが極めて難しい問い。
けれど、嘘偽りなく言うしかないのだ。苦しかろうが、恥ずかしかろうが、正直に言うほか無いのだ。それが恋なのだから。
「それは」
『ああ』
「お前……」
『え、えッ!?　えッ!?　へぇッ!?』
「――が、『さっき』、俺に紹介してくれた、」
『へ』
まだ一度しか会っていないというのに、恐ろしいほどその人の顔を

思い出せる。
そうやって回想するたびに、胸が張り裂けそうになる。竹下のことが、芝村のことが、とてつもなく羨ましく思う。
恋なんて、運命の出会いとやらに任せていた。来たらいいね程度にしか、考えていなかった。
そして、その運命の出会いとやらは、情け容赦無く赤木の元へと降り掛かってきたのだ。
きっかけは、たったの『歴女仲間が二人増えた、お前に紹介したい』。
放課後になって、その新たな歴女を目にした瞬間。嘘みたいに撃ち抜かれ、窒息しそうになって、血が発火したのかと思った。
俺は、戦闘機バカだったはずなのに。
恋なんて、二の次だったはずなのに。
しかし、実感するほかなかった。受け止めなければならなかった。
――だって、
「……のがみ、」
『のっ』
あの人と、結ばれたいから。
「のがみ、たけこさん」
『？――あ、あ、あッ！』
「野上武子さんに、おりょうさんに、惚れた」
床を見つめながら、つくづく思う。
この世界は、どう流れるのかまったくわからない。

片思い―後編―

あれは忘れもしない、数時間前のこと――

『新たな同士を二人も見つけた。放課後、お前に紹介したいんだが、良いか？』

休み時間中の喧騒の合間に、エルヴィンからこんなメールが届いてきた。当然、三秒で『いいぜ』と返信する。

高校一年に進学してからというもの、特にこれといった激変は起こっていない。予定通りに高校戦車道を歩み始め、竹下と芝村とは同じクラスに入り、ここぞとばかりに初めて見る顔とも話しかけたりして、実に順風満帆な人生を送れている。

高校に入学したところで、まあこんなもんかと思う。

不幸じゃないだけ、幸いかと思う。

――高校戦闘機道を歩み終え、眠気と戦いながらで数学を乗り越えて、放課後にありつくと同時に、竹下と芝村はさっさと下校デートへ旅立っていってしまった。

あいつらはどうか、幸せになって欲しい。

「さて」と、学生鞄を肩にかける。今日は、エルヴィンとカエサルがいう「新たな同士」と会う約束がある。そうも離れていない大洗公園前で待ち合わせということで、少し早歩きで学校から立ち去っていく。

□

金曜日の晴れ道を数分ほど歩いていって、遊んだことはない大洗公園付近まで難なく到着する。

「おーいたいた、おーい」

同時に、聞き慣れたエルヴィンの声が耳に入ってくる。カエサルが手で挨拶を交わしてきて、赤木も「よ」と手のひらで返す。

――確かに、二人から四人に増えているな。

ここからでは、よく顔が見えない。どんな子なのかなと、少しはや

る気持ちを抑えながらで両足を動かし、
「よく来たな。祝え、私達に新たな仲間が増えた」
――目にした瞬間、高校一年生の心がひっくり返るかと思った。
赤いハチマキをつけた女の子が、「どうも」と頭を下げ、
「はじめまして、私は杉山清美、ソウルネームは左衛門佐という。戦国時代について知りたかったら、私に聞け」
「わかったぜ」
左目をつむりながら、任せろとばかりに不敵な笑顔を決め込む左衛門佐。
対して自分は、なんとか声を絞り出しながらの返答。
――そして遂に、「その人」が、一歩前に出てきて、
「私は野上武子、ソウルネームはおりょう。幕末の知識なら任せて欲しいぜよ」
喜色満面の笑みで、迎え入れられた。
それだけで、赤木の舌が回らなくなる。
変な顔をしないように、なるだけ自制した、つもりだった。
おりょうと、目と目が合う。怪しまれないように、蔑まされないように、自己紹介の場というシチュエーションを最大限に利用しながらで、おりょうの顔と左衛門佐の顔をじっと見つめる。
「この二人とは、教室で知り合ってな」
カエサルが、左衛門佐とおりょうの間に立ち、両方の肩に手を乗せる。
「自己紹介を聞いた瞬間に、それはもうビビッときた。あとは少しだけ様子見して、読んでいる『本』を見定めた後は……こうして、友の契を交わすことに成功したわけだな」
「えへへ」
「ふふ」
左衛門佐とおりょうが、照れくさそうに笑う。
――かわいい
おりょうの顔を見つめながら、シンプルにそう思うほかなかった。
「じゃ、赤木。軽く自己紹介しろ」

エルヴィンが、「やれ」といわんばかりに鉄砲指を向ける。
すっかり感情に呑まれきっていた赤木は、銃口を前に「はい！」とデカい声を出してしまった。カエサルとエルヴィンの不審がる目。
「――あ、いや。あー、うん。……俺は赤木、戦闘機道履修者。エルヴィンとカエサルとは前々から付き合ってもらってる。これからも、よろしくね」
「よろしくぜよ！」
「こちらこそ」
まずは左衛門佐と握手を交わし、次におりょうの、手のひらを繊細に握る。
小さい。
おかしいなと、思う。カエサルとエルヴィンとは、気軽にスキンシップしあっているはずなのに、どうしてこうも恥じらいの熱が生じてしまうのだろう。
「こいつはいい男だから、別け隔てなく接して欲しい」
エルヴィンの紹介に、左衛門佐とおりょうが「うむ」と頷き合う。
心の底から、心底「ありがとう」と思う。エルヴィンは、最高のフォローをもたらしてくれた。
「じゃあ、この後はどうする？」
「本屋へ行きたいぜよ。そこで雑誌を買いたい」
「ほー？」
おりょうは、実に実に嬉しそうに顔を明るくさせて、
「今年の大河ドラマのことが、掲載されているから」
「――ああ」
赤木以外の全員が、察したように口元を曲げる。なんだなんだと、エルヴィンめがけ視線で助け舟を求める。
「今年の大河ドラマのテーマは、坂本龍馬。タイトルは龍馬道という」
「龍馬、」
名前だけは知っている。
「で、おりょうは坂本龍馬のことを尊敬していてな。それ故に、今年の大河ドラマは何としてでも見届けようと気合を入れているわけだ。

――ああ、ちなみにおりょうとは、坂本龍馬の妻の名前な」
――おりょうの、嬉しそうな笑顔を目の当たりにした瞬間、ふたつの意識が空めがけ飛び立った。
一つ目は、坂本龍馬を知らなければいけないという使命感。
二つ目は、
「赤木さんも、一緒にどうぜよ？」
「喜んで」
野上武子に、おりょうに、一目惚れしてしまったという自覚。
――
「――まあ、こんな感じでして……」
『ふーん』
エルヴィンが、苦味たっぷりの反応を示す。
嘘みたいだと、そう思われているのかもしれない。
無理もない、と思う。
自分だって、こんな運命めいた出会いをするなんて思ってもみなかった。
「改めて聞くが」
『ああ』
「本気、なんだな」
『ああ』
けれど、これだけははっきりと言える。
「おりょうさんは、凄く可愛かった」
エルヴィンが、携帯越しに「そうか」と呟き、
『なら、出来る限り協力してやる。――もっとも、私も恋には疎いから、どうしていいかわからないが』
「それについては、考えがある」
『ほう？』
重く、鼻で呼吸する。
「俺に、歴史を学ぶコツを教えてくれ」
『……コツぅ？』
「おりょうさんは、幕末時代が好きなんだよな？」

『ああ』
「それってつまり、歴史ってやつだよな？」
『うん』
「でも俺は、歴史にはとんと疎くて……どう勉強したらいいのか、わからないんだ」
　その時、エルヴィンから呆れ混じりの溜息をこぼされる。
『お前ひょっとして、おりょうと話を合わせたいが為に、歴史の勉強をするつもりなのか？』
「ま、まあ」
『やめとけ』
　きっぱりと言われた。思わず、息が止まる。
『歴史っていうのは学ぶんじゃない、いつの間にか知りたくなるものなんだ。お前がやろうとしていることは、嫌々行う宿題に過ぎない』
「い、嫌々って」
『歴史、好きか？』
　とどめを刺されそうになるが、ここでおりょうの顔がフラッシュバックする。
　――立ち直らせるべく、己が頬を叩き込む。
「好きになる」
『簡単に言うな』
「これからもおりょうさんと、楽しく歴史談義ができるように、俺は頑張るよ」
『……そうか、そこまで本気か』
「ああ」
　エルヴィンは、「嫌々行うつもりか」というリアルを口にした。
　確かに、そう思われても仕方がない。これまでの自分はといえば、歴史談義に関しては頷いたり、ちょっとした質問を口にしてみたりと、あくまで受け身の態度をとっていたに過ぎない。
　知らない話を聞くのは好きだが、自ら熱中して学ぶほどでもない。そういうスタンスを取り続けていた。
　けれど今は、違う。いまの自分にはおりょうがいる。

まずは外見で惚れたが、おりょうは間違いなく良い人だ。だって、エルヴィンやカエサルから声をかけられたのだから。
付き合っていけばいくほど、ますますおりょうという女の子の事を好きになっていくだろう。それはエルヴィンとカエサルとの、これまでの交流が証明しきっている。
だからこそ、このままの自分では友情どまりになってしまう。
趣味人であるおりょうと親しく、永らく交際するには、やはり幕末時代へ思いを馳せることが一番なのだ。
――戦闘機道に関しては、「ついで」で好きになってくれれば良い。そうでなくても、それはそれで構わない。
それほどまで、おりょうにやられてしまっていた。
「大丈夫さ」
敵戦闘機のケツをとった時のような、不敵な笑み。
「愛があれば、うまくいく」

――

「だめだー……」
「だろうな」
休日の図書館の中で、「漫画でわかる坂本龍馬」を両手に赤木はへばっていた。
「お前ら、すげえな……こんな難しい内容を暗記してるんだろ？　俺なんか、何がどう起こっているのかさっぱりだよ。ページをめくると、前のページの内容すら忘れちまうし」
エルヴィンから「まずは漫画を読んでみろ」と言われ、そしてその通りに坂本龍馬の漫画を読んでみたのだ。
――結果は、ものの見事な撃墜だった。
歴史とは、決して簡単なものではない。そういうふうに、覚悟はしていたつもりだった。
その一方で、「頑張ればなんとかなる」という本音も抱えてはいたのだ。なぜなら、戦闘機道もそうだったから。
「まあ、何度も読むのが一番だろうな。漫画もそうだし、何なら小説だっていい、ゲームもいいぞ」

「そう、だろうな。何度もチャレンジするのが当然だろうな……」
「後日、坂本龍馬に関しての重要点をまとめたシートを作っておく。役に立つかはお前次第だが」
「助かる」
改めて、漫画を1ページ目から読み直す。
学習漫画であるから、おそらくは基本的な情報「のみ」が描かれているだろう。対しておりょうは、基本以上の知識を備えているはずだ。
だから、漫画のみで終わるつもりはない。まずは漫画で基礎を学び、いずれは小説で見聞を広め、いつかはおりょうと楽しげに質問し合う――これが、赤木のプランだ。
しかし、歴史は思った以上に難しかった。
まるで単純でないからこそ、たくさんの人によって成り立っているからこそ、赤木の意識なんてあっちにいったりこっちにいったりしてしまう。「なぜこうなったのか？」を学ぶのは、意外にも難しい。
「うーん、黒船がきっかけなのは分かるんだがな……」
「……なあ赤木」
「なに」
「一つ聞きたいんだがな」
「ああ」
隣で坂本龍馬関連の小説を読んでいたエルヴィンが、
「楽しんでいるか？」
側面から伝わってくる、エルヴィンからの強い眼差し。
その質問に関して、赤木は、すぐに正直にでも答えることができない。
「必死に覚えようとしているだけか」
反論できなくて、手も口も止まる。
「知的欲求というものが、今のお前にあるか？」
「そ、それは、ある」
「それは、自分の為にあるのか？」
赤木が、唸る。

「あのな」
　エルヴィンが、思い切り鼻息をつき、
「他人のためだけに始める趣味なんて、長続きはしないものだぞ」
「そ、それは」
「歴史は難しい、若者受けもしにくい。だから、周囲と話が合わなくなることも多い」
　それを言われて、否応なく思い起こされる。エルヴィンとの出会いを、小学校最後の自由研究発表を。
「お前がこうして苦戦するのも、仕方がないことさ。歴史なんて数日かけて理解するものだし、ましてや好きでもなんでもないものじゃあな」
「そ、そんなこと言うなよ。お前らの、歴史談義は聞いてて楽しい」
「知らない話題だからだろ？」
　魂胆を読まれ、再び沈黙する。
「責めるつもりじゃない、お前はそれでいい。聞き手に回ってくれるだけで、私は嬉しい」
「いやでもさあ」
「それに、」
　テーブルの上に、一冊の本が音を立てて置かれる。
「海外の戦闘機道事情」、だった。
「お前は、こっちの本が合う。――ほれみろ、目が輝き出した」
「あ、それはその」
「戦闘機道の魅力なんていくらでも知っているんだから、おりょうを戦闘機道に染め上げることもできるだろうよ」
「……そうだな、それもいいかもしれないが」
　そっと、手で本を押しのける。
　エルヴィンの「あ」が、耳に届く。
「それは後でいい」
「どうして」
「俺の方から、好きになったから」
　いまは、おりょうを喜ばせたい。

自分が笑うのは、その次だ。
再び、漫画の1ページから読み直す。そうして2ページ目、3ページ目と進んでいって、そのたびに記憶が薄れていくものの、それでも赤木は坂本龍馬の背を追い続ける。
「――そうか」
観念したのか、呆れたのか、そんなエルヴィンの声。
「やっぱりお前は、良い男だな」
ふと、図書館の天井を眺めてみる。
自分はまだ、何も成せてはいない。
けれど諦めなければ、好きな人の為ならば、何とでも為せる。世界は、そうできているはずだ。

――――

高校戦闘機道をみっちり身と頭に叩き込みながら、今日も今日とて四人組と帰路についていく。
大抵は雑談混じりに四人組のシェアハウスまで歩んでいくか、或いは本屋へ立ち寄ることが多い。どちらにしても、目的地へ着くまではありとあらゆる歴史談義が飛び交うわけなのだが、赤木以外は「あれはどうなんだろう」とか「それは言えてる」とか「その通りだ」と反応することが多い。対して赤木は、「へえ」「ほお」「ふんふん」。
こうして書くと仲間はずれ感があるが、実際のところは、聞いているだけでも凄く楽しかったりする。四人が織りなす歴史談義とは未知なる世界への案内であり、タイムマシンでもあるからだ。
そして今日は、おりょうを軸に時間旅行を楽しませてもらっている。テーマはもちろん坂本龍馬であり、それに繋がって大河ドラマの話題で四人は盛り上がる。自分はそれを聞くだけでいい、なるべくなら頭の中にインプットさせておきたい。
「――というわけで、今週は遂に、勝麟太郎が登場するぜよ。ここはどういう風にやりとりされるのか、楽しみで楽しみで」
「わかるわかる。脚本家の解釈を楽しめるのも、大河ドラマの醍醐味だな」
「うむ。……おりょう、録画は？」

「ぼっちりぜよ！」
「さすが」
歴女が語り、赤木が称賛する。おりょうは含み笑いをこぼす。
当然というか、おりょうは実に嬉しそうな顔で話しの花を咲かせっぱなしである。大河ドラマという追い風もあるお陰か、おりょうの機嫌は常々良さそうに見える。
ありがとう、龍馬道。
一応ながら、赤木も歴史書片手に大河ドラマを視聴してはいる。その場その場では「なるほど、こういうことか」と頷いたり、復習したりはするのだが、本番（放課後）となると頭から知識がすっぽり抜けてしまうのだ。
――知ったかぶって、おりょうに嫌われたくない。
だから赤木は、あくまでも受け身で、時には簡単な質問を投げかけることに専念している。いつかはおりょうの隣に立てるように、密かに努力はしつつ。
――それにしても、エルヴィンや左衛門佐、カエサルは凄いと思う。
専売特許とはまるで関係がないはずなのに、歴史という軸を通じてこうも語り合えるとは。素直に羨ましいなあと思う、頭の作りが違うんだなあと羨望してしまう。
「――あ、そういえば」
ふと、エルヴィンが上の空を眺める。カエサルが「どした」と反応する。
「そういえばお前、この間の模擬戦はどうだったんだ？」
「え？　まあ、割と良い結果は残せたんじゃないかな。隊長からも、次の年は期待しろって言われたし」
「さすが、天才はこれだから」
「天才じゃねーって」
その時、おりょう「おお」と頷き、
「赤木さんは麒麟児だったと！」
「お、おりょうさん……いやいや、そんな」
その時、左衛門佐の右目が思い切り開眼し、

「一年からのし上がるその姿……まさに羽柴秀吉！」
「いやいや、ここはベリサリウスだろう」
「将来の高杉晋作ぜよ」
「ブルドックだろうな」
「それだッ！」
「それだッ！」
「それだッ！」
春空の下、エルヴィンに人差し指が殺到した。
いやそれは過大評価しすぎじゃないだろうか、と思う。
歴女連携「それだ！」が決まった、と思う。
こうして揃うと、決まって一度は何それ誰それを歴史的出来事、歴史的人物に当てはめる連想が始まるのだ。時には学校における事件だったり、時には個人のやらかしだったり、時には歴女の誰かがテーマに挙げられることがある。無論、自分もだ。
ただ歴史には疎いので、大抵は「無言でスキップ」を行使することが多い。このことは皆も分かってくれているようで、多少のウェイトとともに目配せを、そして次の歴女が例えを口にするパターンが定着化している。
「ま」
エルヴィンが、赤木の背中を気安く叩き、
「私にはそう見えているってわけさ。お前はこれからも飛び続けろ」
「どーも」
「応援するぜよ！」
「頑張って欲しい！」
「ありがとう、おりょうさん、左衛門佐さん」
そうしていつの間にか、行きつけの本屋が見えてきた。
上機嫌を保ちながら、赤木は本屋の扉を開く。
□
本屋へ到着すれば、歴女達はきまって持ち場へ行き着く。
目的地はもちろん、それぞれが担当する歴史コーナーだ。時々は漫画や雑誌を買ったりするのだが、大抵は歴史小説だったり、分厚い歴

史書だったりする。試しに幕末の歴史書を引っ張り出してみたことがあったのだが、値段を見ておったまげそうになったのは記憶に新しい。

しかし、赤木の隣にいるおりょうは、何の躊躇いもなく二冊の本を手にとってみせ、「どっちにしようか」と悩んでいる。

本の分厚さといい、やっぱり千円越えは当たり前なのだろう。それでもおりょうは引かず、あくまでどちらかを買うかで必死に長考している。

すごいな、と思う。

投資することに躊躇なんてなくて、数日間のうちに本の中身を味わい尽くしてしまえるのだろう。

自分なんて、漫画の序盤から躓いているというのに。エルヴィンから貰った幕末チェックシートを見ても、まるでぜんぜん覚えられない体たらくだというのに。

「――どうしたぜよ？」

「あ、ああ、いや。……それにしても、どっちも分厚いね。やっぱり、幕末に関した本なの？」

「うむ」

真顔から、一気にからりと明るくなり、

「大河ドラマも始まったことだし、ここでますます見聞を広めようと思って。こうして歴史書を厳選しているところぜよ」

「さすが」

「うむ。物語も、そろそろ動き出し始めたから」

「へえ」

「龍馬が尽力を尽くして海軍を成立しようとするものの、彼は脱藩浪士であるが故におおっぴらには活動できない……じれったいぜよ」

「うんうん」

頷く。

が、それだけだ。

確かに、大河ドラマは毎週かかさず見てはいる。幕末チェックシートを片手に、「ああ、なるほどね」と口にはしている。

が、それだけだ。
大河ドラマのみならず、ラブドラマや医療ドラマ、果ては戦闘機道だって、本質を理解しようとしなければちっとも頭に入らない。
何かを身につけるには、ほんの少しのやる気と、知的好奇心と、あとは興味を抱けるか抱けないか。これらのみが必要だ。
赤木という男は、戦闘機道に関しては何が何でも覚えようとする、自分のモノにせんとばかりに喜んで学習し、研究して、吸収する。だから上手くやっていけた。
――対して、歴史はどうだ。
歴史道を歩み始めた動機はただ一つ、おりょうと話を合わせたいという「他人行儀」のみだ。そこに自分本位はまるで存在しない。
本質的に興味を抱けないからこそ、無意識的に戦闘機道のことばかりを考えてしまうからこそ、漫画を読もうがシートを目にしようがドラマを見ようが何も学べてなどいないのだ。
エルヴィンは「お前は戦闘機道の人だから」と言ってくれた。けれど今は、それに甘える気はない。
この初恋を実らせるには、困難に立ち向かう覚悟も受け入れなければならない。
「京都も京都で、大変なことになってきたぜよ」
「うん」
「武市半平太が、攘夷に向けて動き出すぜよ。でも、武市は上洛する一橋慶喜公に会見するには身分が低すぎる……だから、三条実美に仲介を――」
頷く。
この時代は大変だったんだなと思う、沢山の人間が動き出したんだなと思う。
大河ドラマの把握が全く捗っていないからこそ、おりょうの知識量に、何より楽しげな表情めがけ夢中になってしまう。
絶対に邪魔をしてはいけない、ド素人が質問なんぞを挟んではならない。いまはただ、おりょうの話に何とかしがみついて、頷いて、後から漫画なりで勉強すればいい――このあとも、赤木は何度も頷く、

小声で反応する、二冊の本を見比べるおりょうのことをじっと見つめていて、
「あ」
「うん？」
ふと、止まった。
なんだろうと、不安混じりに思う。何か、余計なことをしでかしたのかと思考する。
「あ、あの」
「な、なんだい？」
間。
「その……つい、夢中になって語ってしまって……」
「へっ？　あ、ああ、気にしないで。おりょうさんの話、聞いてて凄く楽しい」
「そう、ですか？」
頷く。
――おりょうの、まるで泣いてしまいそうな顔から目が離れない。
不謹慎ながらも、「なんて綺麗なんだ」と揺さぶられる。だから、絶対に忘れまいと目に焼き付けてしまう。
「気にする必要なんかないよ、もっと語って欲しい」
「……すみません、気遣ってもらって」
けれども、おりょうはそれ以上を語ろうとはしなかった。
たぶん、恐らくだが、過去に「こうした」経験を味わったことがあるからだと思う。だからこそ、おりょうは「赤木は幕末には疎い」という事情を機敏に察してくれたのだ。
――ごめん。歴女の中にいるのに、素人で。
沈黙は、まだ続いている。
小さな本屋の中だというのに、ほかの友人との距離が遠く感じる。歴史コーナーと区切られた本棚が、知的めいた檻に見える。本屋ならではの静まりが、言い訳や無駄口を封殺し尽くす。
二つの本を見比べるおりょうの横顔を見て、何とかしようと脳ミソを動かそうとする。こんな時に複座戦闘機があれば、一緒になって楽

しませれるというのに――ちがう、今は戦闘機は関係ない。
頭を小さく、横に振るう。
「おーい」
その時、本屋でエルヴィンののんびり声が響いた。
「本、決まったかー？」
「あ、ああ、じゃあこっちの本にするぜよ」
「おおそうか。赤木は？」
「俺はー、今日はいいかな？」
「ん。じゃあおりょう、お会計済ませてきて」
「わかったぜよ」
気まずい空気はどこへやら。エルヴィンの一声のお陰で、おりょうは気まずさから脱出することが出来た。
大きく息を吸い、吐く。
エルヴィンから、苦笑いが配られた。
「赤木」
「ん」
「無理するなよ」
――ああ、そうか。
「大丈夫、無理なんかしてねえって。俺は、やりたいことしかしない」
「そうか」
「……助かった。今度、何か奢る」
エルヴィンが、小さく声に出して笑い、
「いいって」
エルヴィンが、カエサルが、おりょうが、左衛門佐が、本を片手に、上機嫌顔のままで店から出ていく。
先程までの空気のせいか、数時間ぶりに外の空気を吸った気がする。
空はまだ、青く明るかった。
――
あっという間に8月が訪れ、セミの鳴き声と蒸し暑さが大洗学園艦を覆う。それでも何事もなく、無事平穏に海上を旅しているのだっ

た。
芝村と竹下は、今日も放課後デートへ旅立って行ってしまったし、カエサル率いる歴女達は今日も大河ドラマの話で盛り上がり中だ。相変わらず内容が頭に入らない赤木は、喜怒哀楽を露にするおりょうを見ては「ああ、いいなあ」と浸っている。
だからこそ、ついていけたらなあとつくづく思う。
歴史に関しては未だにちんぷんかんぷんの領域だったが、決して諦めるつもりはない。先週も歴史漫画を片手に龍馬道を視聴したし、エルヴィンとともに図書館で秘密学習もした。結果は大惨敗ではあったが、希望を捨てる気は一切ない。
なぜなら赤木は、戦闘機道では上手くやっていけているから。頑張れば、何事も成せると信じているから。
そうした成功体験があるからこそ、赤木は今日も歴史談義に対して頷け、笑えている。
「ここから、話は段々と複雑化していくぜよ」
「ああ。蛤御門の変に、」
「土佐勤王党の弾圧、だな」
「これだから歴史は面白い」
左衛門佐の総括に、赤木以外が「うむ」と頷く。
――すげえな、と思う。
カエサルはローマで、エルヴィンは戦史で、左衛門佐は戦国なのに、幕末に関する出来事も当たり前のように把握している。エルヴィン曰く「知りたいから、把握出来るんだ」とのことだが、赤木にとっては迷信めいた話にしか聞こえない。
が、諦めるつもりはない。
おりょうを見つめる。
――目が合う。
不意過ぎて、声を失いかけた。
「あ、えと」
「あ、何かな？」
「その……今の話」

「へ？　あ、ああ。前にも言ったけれど、聞いているだけで楽しいから、俺は」
「いえ……やっぱり、語れないのはつまらないでしょうし」
「そんなことないよ。あと、いつもの口調でいいからね？」
気遣われた事実に、胸が痛くなる。
嘘を言っているつもりはない。未知の話題というものは、聞いているだけで物凄く面白いものだし、見識が深まる気がする。覚えているかどうかは別として。
おりょうは、歴女とは、語り語られることで本領を発揮する。だからこそ、誰かの「沈黙」に対しては敏感に察してしまうのだろうし、それに伴って「何とかしなければ」という焦りが生じやすい。
きっとおりょうは、罪悪感と義務感から手を差し伸べてくれたのだろう。
それでも赤木は、そんなおりょうに対して、優しい女性だと思う。
「わ、わか……ったぜよ」
「そうそう。俺らは同級生なんだし、そんな気を遣わないでいいよ」
「でも……」
おりょうとしては、やはりどうしても気になってしまうらしい。
――俺としたことが。
龍馬道は、佳境を辿っているらしい。けれども赤木は、そんな当たり前の事実にすら把握できていないでいた。龍馬が何をしているのかも、どの人物が重要なのかも、何を成せば龍馬が喜ぶのかも、赤木はまるでわかっていないのだ。
セミの鳴き声が、さっきまでよく聞こえてくる。黙っているせいで、暑さが体の奥底まで伝わってきた。
気まずいまま、あくまでも苦笑いをこぼしながらで、不安がるおりょうと顔を合わせたきりそのまま、
「――あ、そういえば」
エルヴィンの声が、沈黙を断じた。
「再来週って、たしかサンダースとの練習試合だっけ？」
「へ？　……あ、ああ、うんうんそうそう」

「だよな。じゃあ、いつもの偵察、行くか？」
エルヴィンが、にやりと笑う。カエサルもまた、「どうだ？」と聞いてきた。
――ほっとするように、赤木はため息をつく。
「おお、もちろん行くとも。ったく、あいつら豪勢だからなー。力押しってのが一番こえーってのなんの」
「なあに、大洗航空隊は揉め手が得意だろう？　ある意味、サンダースとは相性が良いんじゃないか？」
「かもしれねー」
「ま、お前は戦闘機の動きを肉眼で確認しろ。分析は私がやる」
そこでカエサルが、マフラーを翻し、
「私のことも忘れては困るな。エルヴィンほどではないが、戦況把握は大好きだからな」
「さすが皇帝、頼りにしてるぜ」
「うむ――で」
両腕を組んだカエサルが――「あついな」とマフラーを外したカエサルが、おりょうと左衛門佐に視線を向けて、
「どうだ、偵察。都合が合えば、一緒に楽しもうじゃないか」
「練習試合ということは、つまりは戦か？」
「うむ」
「乗った」
戦国といえば合戦だ。それが機械同士であれど、それを操るのは人間であり、どうしたって読み合いや爆発炎上は起こる。
パイロットからすればハラハラするものだが、見世物としては最高の部類に入るはずだ。戦好きの左衛門佐が興味を引かれるのも、必然といえよう。
「で、おりょうは」
「……戦闘機、戦闘機か……」
顎に手を当て、深刻そうな顔を露にしたままで、歩道を歩んでいるおりょう。
――すぐに、赤木は状況を察した。

「おりょうさん」
「な、何ぜよ？」
「その、無理して偵察に同行しなくてもいいからね？」
「え、でも」
　いやいやと、首を横に振るい、
「戦闘機道ってホラ、男くさい競技だしさ。女性であるおりょうさんがこう、悩んでしまうのは仕方がないよ」
「……でも、赤木さんはいつも私の話を」
「いやいやいや、俺は好きで聞いているからさ。だから、おりょうさんが気負うことなんかないよ」
　幕末となると、飛行機の存在はまるきり無縁であるはずだ。そうとなれば、戦闘機道に対する興味が薄いのも頷ける。
　だからこそ、おりょうには無理して欲しくはなかった。おりょうには、のびのびと趣味に生きていてもらいたかった。
「――あ、しまった！」
　左衛門佐のでかい声が、住宅街に鳴り響く。
　いったいどうしたのかと、一同が左衛門佐に注目する中、
「なんてこったー、今月の小遣いがまるでない。これでは、連絡船に乗る余裕すらない」
「何!?」
「く……それはまずいな」
　機敏にカエサルが反応し、エルヴィンが心底悔しがるように握りこぶしを作ってみせる。
　――間もなく、仕組まれた状況を把握した赤木も、
「それはまずい……旅費もタダじゃないしな。無理をしないほうがいい」
「うむ、そうする。……いやしかし、このままでは暇な休日になりそうだな。カエサルとエルヴィン、赤木は戦地へ向かってしまうというのに」
　左衛門佐の視線が、露骨なまでにおりょうへ差し向けられている。肝心のおりょうは「へ」とか「え」とか、「――あ」と声を発し、

「――わかった。左衛門佐、一緒に遊ぶぜよ」
「本当か！　かたじけない！」
「二人きりで遊ぶというのも、たまには良いぜよ。構わん」
「私もそう思う」
左衛門佐が、赤木めがけウインクをかける。
助かったよ、本当に。赤木は両肩で深呼吸し、小刻みに頷いて、
「お土産、買ってくるよ」
「うむ。ま、三人共、戦を楽しんでこい」
カエサルとエルヴィンが、「うむ」と首を縦に振るう。
場の一区切りがついたせいか、身体の力が抜けていく。暑さなんて二の次で、微笑するおりょうのことばかりを見つめ続ける。左衛門佐と休日の予定を組み始め、安堵した赤木は背筋を伸ばし、
おりょうから、ぺこりと頭を下げられた。
――ああ、やっぱりおりょうさんは、聡いな。
そういうところも、好きだな。
ふと、夏の青空を見る。
諦めなければ、想いは報われる。この世界は、そういうふうに出来ているはずなんだ。

送信者：赤木
『さっきは助かった。すまない、エルヴィン、左衛門佐』
送信者：エルヴィン
『気にするな。仲間だろ』
送信者：左衛門佐
『やるべきことをやっただけだ』
――――

高校戦闘機道全国大会が、そろそろ始まろうとしている。
一年の赤木は補欠兼雑用担当だったのだが、赤木が「どこからか」持ってくる戦術ノートは、隊員達にとっては大きな足がかりであり、立派な戦力の一つだった。
そのお陰で、赤木は一年坊主でありながらも「参謀」と呼び親しま

れている。それだけでも破格の立場なのだが、赤木はあくまでパイロットの人であり、日々好き好んで鍛錬を続けているのだった。
二年になれば、レギュラー入りは確定だろうと周囲からはささやかれている。
そして、高校戦闘機道全国大会が始まった。
赤木は雑用をこなしつつ、エルヴィンやカエサルとともに、対戦相手の学園艦に忍び込んでは徹底的な偵察を行った。時には泊まり込んでまでも。
こう書くと忙しく見えるかもしれないが、赤木やエルヴィン、カエサルは完全に乗り気だった。
エルヴィンは元から戦史マニアで、軍事好きで、「お前が行くなら私も行く」の一言で赤木についていった。カエサルはといえば、「ローマといえば戦術戦略だ」の理論のもと、赤木とともに行動し続けた。
肝心の赤木はといえば、「戦闘機道」という文字が付属していれば何でも良かった。
――ほんとう、悪いな。お前らの名前は、ぜひ公表したいんだけれど
――いいって、ややこしくなるし。……本当は、お前だけの功績にしてもいいんだぞ
――それはダメだ。これはお前とカエサルと、そして俺の努力の結晶だ
――ほんとお前は。……ま、お前が活躍してくれれば、私はそれでいい
秘密の戦術ノートは、今もなお「さる友人達がまとめてくれた一品」として提供し、隊員から受け入れられている。
□
そうして、大洗航空隊は大空の中で戦い続けた。
――結果は、三回戦目で敗退した。相手はサンダースだった。
それでも隊長は「歩むだけの道は歩んだ」、そう断言した。そして、二年になれば赤木のレギュラー入りを約束する、そう告げてくれた。
試合後の空気に飲まれ、隊長からのお墨付きを貰い、帰り際の夕日

を見ては血が熱くなっていく。それでも涙を流さなかったのは、まだその時ではないからかもしれない。
芝村と竹下は、彼女と一緒にざんねんパーティーを開いたらしい。
赤木はといえば、帰艦後に「食べに行くぞ」とエルヴィンから腕を引っ張られた。行き先はもちろん、定食屋だ。
そこで無理やり奢られながら、カエサルが「お前も頑張った」と笑い、左衛門佐から「来年の活躍が楽しみだな」と期待されて、
「大洗航空隊の夜明けを、見せて欲しいぜよ」
歩む道は違えど、おりょうは、明るく元気よくこう言ってくれた。
――それだけで十分だった。
だから、改めて誓う。何としてでも、自分は幕末を勉強し、しっかりと脳裏に焼き付けよう。そしていつかは、おりょうの良き話し相手になりたい。
上機嫌になったせいか、自然と含み笑いがこぼれ落ちた。おりょうは、「いい笑顔ぜよ」と言ってくれた。
「――機嫌が、良さそうだな」
静まり返った微笑を浮かばせながら、隣に座っていたエルヴィンが水を組んでくれた。
こうして、高校戦闘機道全国大会は幕を閉じた。

――

そろそろ冬も間近となった頃、赤木はひとり、スーパーへ出向いていた。
簡単な料理の食材を買い求めつつ、ついでに食玩コーナーへ立ち寄っては「飛行機モノ置いてねーかな」と呟く。戦車の食玩コーナーを通り抜け、ヒーローシリーズの棚も通りすがり、戦闘機コーナーを目の当たりにして「おっ」と声に出る。
箱の中身は――ドラケンか。これはいい。
カゴの中に突っ込み、ホクホク顔でレジへ向かおうとする。子連れの主婦とすれ違い、名も知らぬ女子生徒を横切っていって、真正面から歩んできたおりょうと目が合って、
「あ」

「あ」
　もちろん、その場で動きが止まった。
「おお、赤木さん。こんにちは、何か買い物を？」
「こんにちは。えーっと、まあ、焼きそばを食おうかなって」
　カゴを持ち上げ、おりょうに食材を見せる。おりょうはほうほう、と頷きつつ、
「料理も出来るとは、さすがぜよ」
「簡単な奴しかできないけどね」
「それでも、ぜよ」
「ありがとう、たはは」
　好きな人から褒められて、つい浮かれてしまう。おりょうも、くすりと笑ってくれた。
　そして、おりょうの買い物かごを目にしてみる。
　肉、しらたき、ねぎ、しめじ――これらを視認して、思い浮かぶ料理といえば、
「おりょうさんは、もしかして鍋を？」
「うむ。軍鶏鍋を食べようかなと」
「しゃも？」
　おりょうは、重く頷き、
「坂本龍馬の好物ぜよ」
「おー、好物！」
「うむ。……最終回も近いので、これを食べながら坂本龍馬を見送ろうと思っているぜよ」
「――え」
　最終回という響きを前に、「マジで」と思った。
　まだ、ろくすっぽも内容を掴み取れていないというのに。なぜ、坂本龍馬が偉大なのかすら理解出来ていないというのに。そもそも、龍馬道が終盤にまで突入しているとは思ってもみなかった。
　ドンピシャな大河ドラマが放送されているというのに、どうして自分はこうも馬鹿なんだ。勉強しているはずなのに、エルヴィンに監修してもらっているのに。

「先は分かっている、分かっているぜよ。けれど、彼には生きていて欲しかったぜよ……」
「う、うん」
「いったい、誰が手をかけたのか。京都見廻組か、或いは西郷か……」
スーパーの調味料コーナー前で、おりょうが思考の海に飛び込んでいく。
呟かれる考察を前に、赤木は為す術もなく頷くことしかできない。途中でドラマの回想も入ったが、せいぜい「あれ、そんなことがあったような」程度しか思い出せない。
――ドラケンのことなら、熱にうなされるように話せるのに。
ここにはエルヴィンも、カエサルも、左衛門佐もいない。赤木に出来ることはといえば、ただ、おりょうの言葉に対して首を振るうだけ。大河ドラマも最終回間近ということで、スイッチの入ったおりょうは今もなお熱く思考中である。
ほんとうに好きなんだな、おりょうさん。
かっこいいな、おりょうさん。
わからなくてごめん、おりょうさん。
「――あ」
――そして、おりょうは察してしまうのだ。赤木のいまの気持ちを、歴女であるが故に。
「ご、ごめんなさいっ、私はまた」
「いやいやいや。最終回が近いんだし、熱くなるのはしょうがないと思う」
「そうですか……そ、その、龍馬道は、楽しかった、ですか？」
「うんうん、楽しかった……よ。難しかったけれど」
「そう、ですか」
沈黙。
「あー、えと、坂本龍馬は、凄い行動的だと思う。かっこいい」
「あ、はい。そうですね、海軍を作るなんてこと、簡単ではありませんでしたから」
「うんうんそう思う。海軍だもんね、海軍、海軍……」

沈黙、
「あ――そ、そういえば！　大会、お疲れ様でした！」
「ああ、ありがとう。といっても、俺は何もしてないけどね」
「いえ、赤木さんは戦術面でフォローしていたらしいじゃないですか。それは立派な活躍ですよ」
「そ、そうかい？　ありがとう。……っかし、サンダースは質も量もあって羨ましいよ」
「それでも、隊長殿が見せてくれた奮闘っぷりは素晴らしかったぜよ。あの食らいつきは、まさに箱館戦争の土方歳三のような食らいつき！」
沈も、
「あ、ああ！　そうなのかもね！　うん、隊長すごかった。土壇場でハイ・ヨー・ヨーを決めるなんて」
「は、はい、よー？」
「あ、うん。まあ、追跡みたいなものだね」
「へえ……」
沈、
「あ、ああ！　でも、惜しかったですね。隊長があそこまで頑張ったのに、後ろから横槍を入れられるとは～ッ」
「横槍を入れたＰ５１なんて、ズタボロだったはずなのにね。さっすがタフな奴だよ」
「あれは、Ｐ５１という？」
「うんそうそう。最強に入る飛行機だね」
「うむう。どこか、河上彦斎めいているな……」
ち、
「す、すみません。戦闘機道の話をしているのに、ついうっかり」
「あ、ああいやいや。おりょうさんは、それだけ幕末を愛しているんだなって。俺も飛行機のことばっかりだから」
「な、なるほど。いやあ、私も戦闘機道のことを勉強しなくては」
「いやいやいや、無理しなくてもいいからね、興味を持ち始めてからでいいからね？」

「でも」
「いやあ、他人のためだけに始める趣味なんて、」
——長続きはしないものだぞ
友人（エルヴィン）の言葉が、鮮明にフラッシュバックする。何度も幾度も、頭の中で反響し始める。
今になって、ようやく痛感した。
誰かのために始める趣味なんて、やっぱり負担でしかないんだな。他人から見ても、尾に引く気まずさが生まれちまうものなんだな。
小さく鼻息をつく。
おりょうのことを見つめる。
「おりょうさん。戦闘機道は……本当に、興味が出てきた時に、出てきた時でいいからね？」
「ですが、」
「応援してくれるだけで、十分だよ」
笑えたと思う。
「そう、ですか」
「うんそうそう。あと、そんなに気を遣わなくてもいい、いつものおりょうさんでいいから」
「……わかったぜよ」
時間をかけて、けれどもゆっくりと、おりょうは口元を曲げてくれた。
「赤木さん」
「うん？」
「幕末のことを知りたくなったら、いつでも聞きに来て欲しいぜよ」
「ああ、もちろん」
「無理して、話に合わせる必要はないぜよ。嫌な顔をせず、頷いてくれるだけで、私は嬉しいぜよ」
納得するように、赤木は頷いてみせた。エルヴィンからも、おりょうからも、確かに「無理はしなくていい」と言われた。
——それでも赤木は、歴史を、幕末を学ぶことを止められそうにない。

初恋の人は、こんなにも優しいから。今日という日を以て、ますますおりょうのことが好きになったから。
「――わかった、そうするよ」
「うん」
そして、赤木は心の中でおりょうに謝る。
帰ったら、幕末について勉強しようと思っているから。
「それじゃあ、そろそろお会計に行こうか」
「わかったぜよ」
スーパーで会計を済ませ、外に出てみれば、空はすっかり満天の星々に覆われていた。
街頭はあれど、暗いものは暗い。学園艦というある一種の安全地帯であろうとも、女の子一人ではやはり心細いものがある。
「送ってくよ」
「え……でも」
「いいからいいから」
「……それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらうぜよ」
思うと、これで初めて二人きりになった気がする。先程の場面は、流石にカウントし辛いものがあった。
夜中の歩道を歩きながら、寒くなったとか、夕飯のこととか、将来について何となく話し合う。バランスの保てる話題といえば、だいたいはこんな感じだった。
そうして、おりょうをシェアハウスまで送り届ける。あとは、その場で溜息をついてみせて、何となく星空を眺めた。
時間をかけていけば、情熱を失わなければ、きっと報われる。そういう世界で、あって欲しい。

――――

「――で」
定期連絡の名の下、赤木とエルヴィンは図書館で本を読み合っていた。エルヴィンは「小説、坂本龍馬」、赤木はやっぱり「漫画、坂本龍馬」。
無感情な表情のまま、ページに目を通しながら、エルヴィンが「で」

で次を促す。赤木は、痒くもない頭を掻きながら、
「すまん。全く進展していない」
「だろうな」
「出会って半年以上になるんだけどなあ……何がいけなかったんだろう」
　原因なんて分かっているくせに、つい口にしてしまう。これでも大真面目に漫画を、チェックシートに目を通しているつもりだが、やっぱり要領を得ない。
「んー、顔？」
「あ、そうなの？　じゃあ身だしなみや服装に気を使えば、」
「いや、そのままで十分だよ。お前の場合は、やっぱり趣味の不一致だろうな」
「……まあそうなんだけどさー」
　力なく溜息をつく。これまでの経験からして、反論のはの字も立たない。
「大河ドラマもいよいよ終盤だが……どうだ、内容は頭に入っているか？」
「……龍馬は、海軍を欲しがっていて……えーっと」
「わかった」
　その一言は、心の髄までグサリと刺さった。
　友人だからこその反応が、今となっては恐ろしい。
「言っただろ、お前はあくまで戦闘機道の男だ。だから航空戦術を覚えられるし、戦闘機に関する知識も喜んで勉強しようとする。……対して幕末はどうだ、戦闘機道とは何の関係もない、だから覚えられない」
「ぐぐ」
「お前の頭の中は、戦闘機でいっぱいってことさ。だから、これ以上の知識なんて蓄えられそうにない」
「で、でもよお、お前らの話は面白いって思うぜ？」
「そういう奴だからな、お前は」
　エルヴィンが、音を立ててページをめくり、

「前にも言ったが、お前は聞き上手なんだよ。友人の話なら何でも楽しめる、それって立派な特技なんだからな」
「えー？　それでいいのかよお。理解もしていないんだぜ、俺は」
「いいんだよ」
　エルヴィンが、小さな含み笑いをこぼす。
「話を聞いてくれるだけで、人は喜びを覚えるものなんだ。少なくとも私は、嬉しいと思っている」
「……おりょうさんは？」
「あいつもだろうな」
　同業者であるエルヴィンが言うのだ。その答えは、きっと正しい。
　聞き手に回り続ければ、おりょうとはいつまでも良き話し相手として、友人として一緒にいられるだろう。それもまた、交流のありかたの一つだ。
　けれど、赤木はおりょうに対して「それ以上」を求めている。単なる会話仲間に留まらない、互いに理解しあえる相思相愛の仲を夢見ていた。
「なあ赤木」
「うん？」
「そんなに、おりょうのことが好きか？」
「ああ」
　きっかけは、外見そのものに一目惚れしたから。
　あの大きな瞳、それを彩る眼鏡、女の子らしい身長、ふわりとした髪型、親しみやすくよく響く声。それらを体感して、理性だの本能だのが総立ちしたのだから間違いない。
　最初は、そんな感じだった。
「……凄く、好きだ」
　この前のスーパーでの一件で、いよいよもっておりょうに対する想いが溢れ止まらなくなった。
　だって、あの人はあんなにも優しかったから。無知な自分のことを、あの人は許してくれたから。
　こんなの、交際したいに決まっているじゃないか。

だからこそ、おりょうと肩を並べたくなるに決まっているじゃないか。
「――そうか」
「ああ。だから俺は、歴史を、龍馬の行く末を学ぶよ」
「わかった」
そして、エルヴィンと目が合った。
こんな自分のことを、ずっと見守ってくれるエルヴィンは、何が嬉しいのか穏やかに目を細めていて、
「ほんと」
「うん？」
エルヴィンが、頬杖をついて、
「羨ましいよ。お前に、そこまで想われるあいつのことが」
赤木は、「そうかい？」と言った。
エルヴィンは、「ああ」と応えた。
数分ほど漫画を読んだが、やはりどうしても、覚えたての知識が頭からすっぽり抜け落ちてしまう。
エルヴィンの言う通り、自分は戦闘機道の人でしかないのかもしれない。
けれど、諦めるつもりはない。だって、恋をしたのだから。

――――

冬休みがやってきて、まずはエルヴィンとカエサルが実家めがけ怠惰に襲いかかってきた。
瞬く間にコタツを占領し、チャンカーから与えられたおしるこをのんびりと味わう二人めがけ、赤木はけーれけーれと抗議の声を唱えた。
しかしエルヴィンは、カエサルは、その反応を待ってましたとばかりに不敵に微笑んでみせて、鞄からプリントの束を引っこ抜いてみせた。
――宿題という必殺の武器を前にして、赤木の反抗なんぞは瞬く間に沈静化した。
そうして、三人がかりで宿題をやっつけている最中、

「赤木」
「ん」
「戦闘機の方、どうだ」
「ああ。このままいけば、レギュラー入りは確定だってさ」
カエサルが、エルヴィンが、同時に「ほほー」と笑って、
「大したものだな」
「うむ。三年になれば隊長になれるんじゃないのか？」
「あーどうかなー、なれるといいなー」
口ではこうも言っているが、実際は「なる」だ。こと戦闘機道に関しては、妥協するつもりは一切ない。正確に言えば、「できない」だ。
戦闘機を目にするたびに「乗りてえ」と思うし、コクピットに入り込めば一刻も早くエンジンを吹かしたくもなる。これで戦闘機道という勝ち負けが生じれば、いよいよもって戦闘機に対する想いに火が点き始めるのだ。
俺が世界一のパイロットだ
勝ちてえ、負けたくねえ
夢を叶えるためなら、俺は喜んで難しいことも覚える
中学一年生になって、はじめて戦闘機に乗った時から、このスタンスはぴくりとも変化していない。
それで上等だと、赤木は思っていた。空を舞い、いつかソラノカケラになってしまっても、きっと後悔なんてしないんだろうなと、「前までは」考えていた。
「――ま、お前ならなれるさ。お前から飛行機を引っこ抜いたら、何が残るんだ？」
「なんもねえや」
カエサルと赤木が、はっはっはと笑う。エルヴィンも「ばかだなー」と言ってくれた。
――嘘をついた。
「で、最近のお前らはどうよ」
「あ？　ああ、私は見ての通りさ。人生を変えたいほど、人生に不満を抱いていないしな」

「うおっ、さすが」
カエサルが、自信たっぷりにふふんと笑う。たぶんカエサルは、歴女の中でも一番生き長らえると思う。
「エルヴィン、お前は」
「私か？　……っふふふ」
含み笑いを耳にして、カエサルと赤木がエルヴィンに注目する。
何だ。
普段はぼんやりと感情を表現するタイプなだけに、この露骨な喜びを前にしては戦慄も走る。
自分の預かり知らぬところで、エルヴィンの身に何が起こったのだろう。宝くじでも当たったか、或いは戦車とツーショットでも撮ったのか。
「実はな」
「うむ」
「ようやく、ブーツを買えたッ！」
「ぶっ、」
「ブーツ？　それはなんだ」
カエサルがエルヴィンめがけ、真顔で迫る。それでもエルヴィンは臆すること無く、「それはな」と悪そうに口元を曲げ、
「ドイツ軍が使っていた、軍用のロングブーツだ。……っふふふ、これでコスチューム関連はコンプリートだ」
「……！　羨ましい……！　頭も体も足も制覇するなんて……ッ！」
あの冷静なカエサルが、本気で歯を食いしばっている。エルヴィンは、未だに笑いが止まっていない。
赤木の目からすれば、これまでのエルヴィンは完璧な「ドイツ元帥」だった。母も「かっこいいわね、松本ちゃん」と評していたし、エルヴィンも「ど、どうも……」と照れていた。
――しかし、エルヴィンは更なる高みに辿り着いてしまった。
まさか、靴までそれらしくしてしまうとは。
金がかかるのに、よくやる。
「すげえ」

だから、本心からこう言った。エルヴィンは実に実に上機嫌そうに
「ふはははは」と笑い、
「これで私は完成された」
「ッ!!!」
カエサルが、一瞬にして歯を食いしばった。
ビビる赤木をよそに、カエサルは「うう」、「おお」、「うらっやましい」と唸りに唸っている。
――思うと、コスチューム的にはカエサルが一番控えめかもしれない。
まずエルヴィンだが、見ての通り全身ドイツ元帥だ。これ以上を求めるのは逆に困難といえる。
左衛門佐も、頭には鉢巻、体には胸当てと、実にわかりやすい。やろうと思えば、足袋を履くことで戦国度を高めることも可能だろう。
おりょうはといえば、特記すべきは羽織のみといえる。ただ羽織とはどうしても目につく上に、家紋らしきものも刻まれているから、おりょうからすれば羽織一つで満足しているのだろう。
対してカエサルは、現代でも通じそうな赤いスカーフのみ。これはこれでローマ的に完成されているはずなのだが、目の前のエルヴィンに刺激されてしまったのか、途端に物足りなさを覚えてしまったようだ。これも歴女故の対抗心なのかもしれない。
見ていられなくなった赤木は、「なあ」と声をかけ、
「なんかねえの？　こう、お手軽なローマファッション」
「……トガという……ほら、ローマ市民らしい服装があるだろ？」
「ああ、あれ、うん」
「あれこそローマオブローマなんだが……あれを着て歩ける自信は、さすがにない」
「ああ――目立つもんね」
「現代社会めぇッ！」
カエサルがコタツの上に顔を伏せながら、悔しそうに「うらやましいうらやましい」と主張し始める。しばらくは笑いが止まらなかったエルヴィンも、次第に落ち着きを取り戻していって、

「――まあ、古代のコスチュームは目立ちがちだしな……」
「うん……」
「私のは、ほら、コートですって言い張れるし。軍帽はまあ、ギリ？」
「うん……」
　そうして、エルヴィンがカエサルの肩をぽんぽんと叩き、
「カエサル、お前の気持ちはよくわかる。けどな、けれどな？　お前は私達の皇帝であり、カエサルなんだ。だから、そう嘆かないで欲しい」
「……エルヴィン」
　のっそりと、カエサルが身を起こしていく。
「服を着込まなくとも、お前にはローマに対する想いが、ローマの魂が心の中にある。そうだろう？」
「！　その通りだ。お前にも、ドイツ魂があるッ！」
「そうだろうそうだろう！」
　ソウルが通じ合ったらしく、元帥と皇帝がハイタッチを交わし合う。コタツに浸りながら。
　一方の赤木は、何となく「羨ましい」と思っていた。歴史に関してはド素人なので、こうして傍観することしか出来なかったが。
　まあいいか、と思う。
　無事解決したということで、シャーペンを握り直す。
「……しかしまー、ほんと」
「ん？」
　いい顔をつくれたと思う。
「付き合いやすいわ、お前らとは」
　そうしてまた、エルヴィンとカエサルが笑った。
□
　のんびりと目を覚まし、今日も役目を果たせなかった目覚まし時計をオフにして、私服に着替えては歯を磨く。その後は、軽く朝飯を。
　軽く欠伸を漏らし、点けっぱなしのテレビを耳にしながらで、何となく窓から空を覗き見てみる。
　――空は嘘みたいに白く、実に晴れやかだった。
　それを見て、どこか上機嫌が湧いてくる。ここに飛行機があった

ら、迷うこと無くかっ飛ばしていただろう。
さて。
時計を見つめては、「そろそろか」とジャンバーに着替える。父は「行くのか？」と言い、赤木は「そろそろね」と返して、
インターホンが鳴った。
母が「来たみたいね」と赤木に伝え、赤木も早速とばかりに玄関へ早歩きした。
はやる気持ちが抑えきれない。
だって、今日は、
「よっ――あけまして、おめでとうございます」
青い着物を着込んだエルヴィンが、相変わらずのカエサルが、赤い着物で決めてきた左衛門佐が、
「や。――こちらこそ、よろしくお願いします」
「よろしくぜよ」
1月1日で、正月で、おりょうの着物が見られる日だったから。
「いやあ、みんな着物似合ってるよ。うん、凄く綺麗」
「はは、そうか？」
「ふふふ」
左衛門佐が気恥ずかしそうに微笑み、エルヴィンが口元を緩ませ、
「あ、ありがとうぜよ。正月だから、つい張り切ったぜよ……」
「い、いやあ、凄く似合ってる。凄くいい、すごく」
「う、うん」
おりょうは、すっかり顔をうつむかせていた。
いま一度、歴女メンバーを一瞥する。
赤い着物を着込み、かんざしで髪をまとめた左衛門佐は、間違いなく大和撫子だった。日傘を手にしていれば、お嬢様と何ら変わらなくなってしまうと思う。
次にエルヴィンだが、やっぱり青い着物がよく合っている。あえて軍帽を被っていないところが、エルヴィン独自のこだわりを感じさせてくれた。
そしてコート姿のカエサルだが、何となく「らしい」と思う。男性

的な雰囲気があるからだろうか。赤いマフラーが、コートを栄えさせている。
最後に、おりょうについてだが――おりょうは紺色の、花柄の着物を何ら違和感なく着込んでいる。髪の色に近しいからこそ、自然とそう見られるのだろうか。
再び赤木と目が合い、「あう」と目を逸らされてしまった。似合っているというのに、そんな謙虚さを見せつけられては、赤木の精神なんてたまったものではない。
総括すると、超やばいかわいい。
「――ほれほれ、早くお参りに行くぞ」
エルヴィンから冷ややかに声をかけられ、赤木は「そ、そっすね」と怯む。
今日は、いいものが見られた。記念撮影したい。
□
正月の神社はすっかり混んでいて、そこに厳粛さや寂しさはどこにもない。正月という空気もあってか、どこか祭りのようにも見える。
左衛門佐も「賑やかだなー」と呟いているし、カエサルも「並ぶのかー」と苦笑い。それでも一同は、鈴を鳴らすために行列の一員となるのだ。
「いやー、これは時間がかかりそうだな」
「まあな。ま、何か話していればあっという間だろ」
「そうだな」
左衛門佐が、どこか消えてしまいそうな薄い笑みをこぼし、
「まさか、友達と一緒に初詣に出かけられるなんて、な」
「え」
「ほら、私は歴女だから」
――その説明で、すべてを察することが出来た。
だからカエサルも、エルヴィンも、そしておりょうも、それ以上は問わない。
「だから、こうしてみんなと一緒にいられることが、一年を通せたことが、とても嬉しい」

「……俺もさ」
「私も、私もぜよ」
おりょうの言葉に、赤木は黙って頷いた。
気づいてみれば、本当にあっという間だった。進学した時は「長くなるな」と思っていたはずなのに、もうじき高校二年生になろうとしている。
楽しい時間はあっという間だというが、まさにその通りなのだろう。
――おりょうの横顔を見つめる。
恋することが出来て、本当に良かった。
「友達になってくれたカエサルには、エルヴィンには、感謝するしかないぜよ」
「こちらこそ。私も、お前達が歴女じゃなかったら声をかけられなかった」
「――あ、そういやどうやって、歴女だって判断したの？」
カエサルが、何かをつまむジェスチャーを披露し、
「本だ」
「――ああ」
どうやら、歴女とは本を通じて集うものらしい。
それもそうかと、赤木は納得した。
「あ、そういえば」
「うん？」
「エルヴィンとカエサルは、昔からの付き合いなんだよな？」
カエサルが空を見つめ、「ああ」と返し、
「中学一年の頃にな。教室でひとりぼっちだった私に、エルヴィンが声をかけてくれたんだ」
「おお……連鎖しているぜよ」
「まあ確かに、それはそうなんだが」
そしてエルヴィンが、赤木のことをはっきり見つめ、
「小学校の頃な、私も友達がいなかったんだ。そこを、赤木が声をかけてくれてな」

「おおー！」
聞いていて楽しくなったのか、おりょうが手を握りながらで「それでそれで」と促す。
エルヴィンは、恥ずかしいのやら懐かしいのやら、薄く口元を曲げて、
「赤木がいなかったら、私は今頃、人と話す喜びだとか楽しさだとかに目覚めなかったと思う。……私が、カエサルに声をかけられたのは、あれだ。赤木の影響みたいなものなんだ」
「……ほー」
どんな感情を孕んでいるのやら、カエサルが実に実に楽しそうに表情を緩ませる。
なんだかこっ恥ずかしくなった赤木は、「ま、まあ」とぎこちなく口を挟み、
「エルヴィンとは隣の席だったから、まあ、その、あれだ。ほっとけなかっただけ！　以上！」
「……へえー……」
そして、おりょうからの強い視線。当然見過ごせるはずもなく、
「な、何？」
「いやあ、その……」
そして、おりょうは口と目で精一杯に笑い、
「いい人ぜよ、赤木さんは」
心が破裂するかと思った、血が沸騰しかけた。このまま消えちまっても良いやと、割と本気で考えた。
逃げ出したくなったが、おりょうの誠意をなかったことになど出来ない。だから赤木は、深呼吸一つで身体の力を緩め、おりょうをずっと視界に入れながら、
「ありがとう、おりょうさん」
言えた。
お礼はしっかりと伝わったのだろう。おりょうも、笑顔のままでこくりと頷いてくれた。
「……赤木」

「ん。どした、エルヴィン」
赤木の肩に、エルヴィンの小さな手が乗る。とても軽くて、けれども熱みが確かにあった。
「――よかったな」
エルヴィンは微笑する。どこか陰りが感じられる、いつもの色で。

そうしていつの間にか、鈴の前にまで辿り着く。
カエサルが「準備は？」と聞き、各々が何の躊躇いもなく五百円玉を取り出してみせた。流石だと、赤木は思う。
こうして賽銭箱の前で会釈し、カエサルが鈴を高らかに鳴らす。そうして一同が賽銭箱へ五百円玉を入れ、二礼二拍手一礼を行い――
どうか、おりょうさんともっと仲良くなれますように
戦闘機道だって、頑張ったからうまくいったんだ。だから、諦めなければ恋も叶うはず。
世界は、そういうやつの背中を押してくれる。そう信じたい。

両思い

高校二年に進級し、そのまま剣道を選択して、憧れの窓際席へ割り振られた青井は、余すところなく溜息をついていた。

勉強が終わってしまえば、どうしても休み時間はやってくる。そうなれば当然、気の合うクラスメート同士の雑談が耳に届いてしまう。そのたびに青井は、羨ましいとか、混ぜて欲しいとか、ロクな話題を持っていないとか、そういうふうに尻込みしてしまう。

青井は現在進行系で、ぼっちだった。

昔っからこうなのだ。子供の頃から家で本ばかり読んでいて、父が見ていた大河ドラマをたまたま見て、そのまま歴史に興味を抱いて、とある偉人の影響で剣道を始めた。そうやって一人の世界に入り浸っていた結果、人との触れ合い方とか、同年代における流行りだとか、そういったものに疎くなってしまっていた。

つまらない奴と思われたらどうしようという恐怖、滑って恥をかきたくないという羞恥心、「話題についていけないから仕方ない」という言い訳のお陰で、自分は今もここにいる。

溜息。

去年までは、確かに友達は居た。その友達はよく気が利いて、こんな自分にも話しかけてくれて、剣道の楽しさとか辛さとかをよくよく聞いてくれた。

剣道を始めた理由も、ふと口にしたことがある。自分ときたら、「あの人のようなデカい男になりたい」なんて、小さく控えめに口走ってしまったものだ。

――それを聞いた友達は、「いいじゃねえか、そういうの」と肩を叩いてくれた。

今となっては、それがとても懐かしく思える。

それがあったからこそ、腐らずにいられたのだと思う。

溜息。

その友達は、別のクラスへ移っていってしまった。あの人柄のことだ、今頃は楽しく元気よく新たな友達と雑談を繰り広げているだろ

う。
それに比べて自分は、クラスメートからの声を待つ事しかできない。話しかけられたところで、ロクな立ち回りが出来るかどうかも怪しいのだが。
溜息。
授業中はいい。やるべきことをやれば、評価される。自発的な発言は、特に求められていないから。
特に剣道はいい。「憧れのあの人」になる為に、大真面目に剣を振ることが出来るから。剣を握っている間は、「あの人」の名に恥じぬよう精神も声も研ぎ澄ませられるから。お陰で教師からの評価も上々だ。
聞き耳を立てる。今話題の恋愛ドラマの話、放課後の予定について、発売されたばかりの音楽の感想――だめだ、自分が持つ話題にかすりもしない。
やっぱり、大河ドラマを見ているクラスメートなんていないのかなあ。剣道という授業の話題をするなんて、休み時間からすれば野暮でしかないしなあ。
――友達作りの為に、新しく趣味を開拓した方がいいのかもしれない。
今日の帰り際、何か音楽でも買おう。それがいい。
そう結論づけて、青井は鞄から一冊の本を取り出す。そうして栞が挟まれたページから開いて、字の羅列を目の当たりにした瞬間に身が引き締められていく。
この時が、一番落ち着く。
そうして数分が経過して、そろそろ休み時間が終わろうとする頃、
「なあ」
不意な声に意識をふん捕まえられ、青井の首がからくり人形のように反応する。
クラスメートだった。
男だった。
まるで機嫌が良さそうな顔つきで、自分のことを明らかに見つめて

いた。
「な、何？」
「いや、それさ」
指をさされ、青井の口から「え」が漏れる。
自分――違う。よく見たら、小説に向けられている。
「俺さ、実はその、幕末に興味があるんだ」
「え……そうなの？」
「うんそうなの。でも俺ってバカだからさ、ぜんぜん覚えられなくてね……」
「そう、なんだ」
「そう、そうなのよー。だからさ、よかったら色々教えてくれねえかな、一人じゃ限界があるしさ」
目の前で懇願している男の――赤木の意図に気づけ無いほど、青井も馬鹿ではない。
恐らく赤木は、幕末という糸口を以て交流を持ちかけてきてくれたのだ。クラスの中でも話し相手が多い、あの赤木君が。
間違いなく、気を遣ってくれたのだと思う。うじうじしていた自分のことが、放っておけなかったのだと思う。
――正直な気持ち、
「あ、ああ……いいよいいよ。うまく、教えられるかは分からないけど」
「マジで？　やったやった、お前いい奴だわ！　これからもよろしくな！」
赤木から、遠慮なく手を差し出される。
少し怯みながらも、けれども赤井は立ち上がって、その手を握りしめる。
――正直な気持ち、とてつもなく嬉しかった。
「こちらこそ、よろしくね。……その、変なことを言ったら、遠慮なく指摘してね」
「いいっていいって。――で」
視線が、赤井の顔から小説に移り変わる。

「ああ、これ？」
「おう。これ、おすすめの一冊なのか？」
「……いや、どちらかといえば、その……」
「うん」
この人になら、言える。
だから、
「……憧れてるんだ、彼のこと。だから、好きで読んでいるだけ」
赤木が「そうか」と頷く。
赤木が、「そっか！」と指を鳴らす。思わず腰が退けてしまった。
「実はさ」
「う、うん」
「俺の仲間に……女性なんだけれども、龍馬好きがいるんだよ」
マジで――
青井の口が、驚きのあまり丸く開いてしまった。
「たぶん、気が合うと思うから紹介するよ。放課後、時間ある？」
自分は先程までぼっちだったのだ。そんなの余裕で空いているに決まっていた。
――机の上の小説を、坂本龍馬伝を、ちらりと見る。
やっぱり、デカい男には人が寄ってくるものらしい。

昼休みがやってきて、食堂でいつもの定食を注文し、今日も一人で食おうかなと空き席を探そうとして――グループで昼飯を食べあっていた赤木と目が合い、一緒に食おうぜと誘われた。
好意的なグループの目におっかながりながらも、けれども「これが最後のチャンス」と思い込んで、竹刀を構えるように呼吸を整えて、僕は、赤木君のグループにお邪魔した。
お前剣道履修者だっけとか、こいつ歴史に詳しいんだぜとか、クールな奴だよなと言われた。
だから僕も、普段は何をやっているのかとか、よく聞くドラマの内容について質問したりとか、戦闘機道の感じについて聞いてみたりした。慣れない舌を使ったから、少し行き詰まった喋り方になってし

まったけれども。
今日は、とても良い日だ。心の底から喜びながら、昼飯を食べながらでそう思う。
□
待ちに待った――こう思えるなんて――放課後が訪れ、赤木が早速とばかりに「行こうぜ」と誘ってくれた。
赤木が言う幕末好きとは、いったいどんな人なんだろう。
はやる気持ちを何とか抑えながら、春の日差しに当てられた廊下を歩んでいく。遊園地の入り口のような階段を、表向きは淡々と降りる。これから本格的な「何か」が待ち受けている玄関を前に、表情なんてすっかり崩れきってしまっていた。
それを見た赤木は、「いい人達だよ」と言ってくれた。「そうなんだ」と、青井は頷いた。「異性だけどヘーキか？」と赤木が聞いてきて、「たぶん」と青井は無根拠に返事した。

大洗公園前には、確かに四人の少女達が待ってくれていた。
話慣れない異性ということで、ここで足踏みが怯んでしまう。大丈夫かなと漏らしてしまったが、赤木は「大丈夫大丈夫、歴史好きなら問題ねえ」と、軽く背中を叩いてくれた。
――そうだ。
いつまでもビビリでいるわけにはいかない。友人からの好意を無下にしてはいけない。なけなしの勇気をかき集め、手のひらからそれを飲み込み、ひと呼吸で気合を入れる。
「お、この人が期待のルーキーこと青井君か。はじめまして」
四人組の顔が見えてきた頃。コートを着た少女から、軍帽らしきものを外しながらで軽く一礼された。
反射的に、青井も同じようにして返し、
「あっ」
「んっ？」
眼鏡をかけた、羽織を着込んだ少女を注視する。恐れもへったくれもなく前進し、

「そ、その羽織……家紋は！」羽織の少女は目も口も開け「まさか、あなたは！」青井は羽織の少女をガン見し「その姿勢、もしかして!?」羽織の少女の表情がきらきらと光りだして「あなたは、幕末に興味が？」青井は張り切って頷いて「去年の大河ドラマは全部見たよ！」羽織の少女がうんうんと応え「素晴らしいぜよ！　期待のニューフェイスぜよ！」青井の鼓膜がびくりと震え「その口調……ああ、そうか。君の好きな、いや、尊敬する偉人は」その質問を待っていましたとばかりに、羽織の少女がニタリと笑って「まさか……あなたも？」己がエンジンに火が点いたまま「うん、僕も君と同じ。――一応、確認する？」羽織の少女は嬉しそうに頷いてみせて、

「坂本龍馬！」

「坂本龍馬！」

シェイク（握）ハンド（手）。

「いやあー、まさかほかに幕末好きがいようとは！　感激ぜよ！」

「いや、僕も嬉しいよ。これほどまでの幕末好きに出会えるなんて……羽織か、凄いな……」

「通販で買ったぜよ」

「本格的だ……僕も一応、彼にならって剣道をやってはいるんだけれど」

「それは立派ぜよ！　楽な道じゃないだろうに」

「まあ、ね。でも、やっていて凄く楽しいし、身が引き締まるし、精神が磨かれる気がするんだ。……それを繰り返していって、いつかは龍馬のような大きな男になりたい」

「素晴らしいぜよ！」

「いやでも、口下手で、これまで友達が少なかったから。彼にはまだまだ遠く及ばないよ」

「なら、これからも歩めばいいぜよ。人は、足を止めない限り進歩していく存在ぜよ」

「そっかー……そうだよね。ありがとう！」

羽織の少女が上機嫌そうに笑う、青井もたまらなくなってしみじみと頷く。

そうして話に一区切りがついて、多少ながら頭が冷え、目の前以外がようやく見えてきた。
――自分と羽織の少女、それ以外のメンバーがぽかんと立ち尽くしている。
交流に慣れていない青井でも、一瞬にして理解した。「やっちまった」という事実を。
羽織の少女も状況に気づいたらしく、「あ」と苦笑い。
「すまないぜよ。つい、熱くなってしまって」
「……いや」
六文銭の鉢巻をつけた少女が、まるでまるで嬉しそうに含み笑いをこぼし、
「赤木」
「おう」
「期待の新人を連れてきてくれたな」
「だろ？」
鉢巻の少女と赤木が、けらけらと笑い合う。改めて期待と称され、嬉し恥ずかしい気持ちが生じる。
「好きな部類となると、熱くなる……それこそ、我らが歴女チームに求めていた人材だ」
「い、いやあ、どうも」
「私は鈴木貴子、ローマ担当だ。カエサルと呼んでほしい」
横文字を耳にして、青井が首をかしげる。
カエサルと名乗る少女は、「ああ」と一声つけて、
「私達は、得意としている歴史にちなんだニックネーム……ソウルネームを名乗り合っているんだ」
「うむ。私は戦国時代が好きだから左衛門佐と名乗っている」
「私は戦史、特にドイツに関するものが好きだから、エルヴィンと呼ばせてもらっている」
と、いうことは――
期待するように、羽織の少女に目を向ける。
「私は、おりょうと名乗っているぜよ」

予想が外れ、青井の口から「え」が漏れる。
何を考えているのかがわかりやすかったのだろう。おりょうは、
「いやあ」と頭を掻いて、
「当初は坂本の名を戴こうとしたぜよ。でも私は、まだその域には達していないと思って……一歩引いて、おりょうと名乗ることにしたぜよ」
「おおー……」
まちがいない。この人は、おりょうはマジモンの坂本龍馬好きだ。
恐らく、周囲からは許可が下りていたはずだ。それでもおりょうは、「まだ未熟」の一言で一歩退いてしまった、退くことができてしまった。
本当に坂本龍馬のことを尊敬しているからこそ、大好きだからこそ、おりょうという立場を後悔なく選べたのだろう。本人曰く「まだ」とのことだが、数年経過しても、おりょうはおりょうのままで生き続ける気がした。
「すごい」
「そんなことないぜよ」
「いや、僕だったらつい坂本龍馬って名乗っていたかも」
「それは当然ぜよ」
「いやでも……」
そこで左衛門佐が、「へえ」と声を出して、
「君の名前は」
「え？　あ、青井といいます」
「そうかそうか。じゃあ青井君、君は今日から坂本龍馬と名乗りなさい」
間。
「えッ!?」
大洗公園前で、でかい声が響き渡る。カエサルから、うわびっくりしたの反応。
「だ、ダメだよ左衛門佐さん！　僕はまだまだ未熟者だし、口下手だし……」

「それを覆すために、日々剣道を歩んでいたり、こうして赤木と付き合いだしたんだろう？　なら、いいじゃないか」
「で、でも、」
「君のような逸材を本名呼びするのは、正直惜しい！」
カエサルに視線を逃がすが、「うむ」と同意された。エルヴィンを視界を入れるが、「確かに」と言われてしまった。赤木と目が合ったが、「わかるぜ」の一言で逃げ道が塞がれた。
そして、目の前がおりょうに戻る。
周囲が許してくれたとしても、坂本龍馬好きのおりょうが許可を下さない限りは、決して坂本龍馬と名乗ってはいけない。気がする。
「――いいと思うぜよ、龍馬」
あっさり判定された。
「い、いやー……うわあ、龍馬か、恥ずかしい……」
「慣れる慣れる」
カエサルが、皇帝が、からからと笑う。エルヴィンが、元帥が「そんなものさ」と親指を立てる。左衛門佐が、戦国一の武将が「うむうむ」と二度肯定した。
みんな、楽しめと言ってくれている。それは分かってはいるのだが、やはり坂本龍馬のことを尊敬しているからこそ、簡単には承諾できなかった。
――一同からの視線を浴びる中、青井は声にならない声を唸り、授業中以上に頭を働かせ、坂本龍馬という名を頭の中で何度も連呼し、ふたたび、おりょうと目が合った。
その時、一つの天啓が降ってきた。
「……じゃあ」
「ああ」
「梅太郎、今はそう名乗るよ」
「……おお」
梅太郎とは、坂本龍馬の変名の一つだ。それをわかっていたおりょうは、それに賛同するかのように声を漏らし、
「うむ。今日から青井さんは梅太郎ぜよ！」

「わかった。よろしくな、梅太郎！」
「坂本龍馬になれることを、心から応援する」
「今後もよろしくな。あ、私達のことは呼び捨ててでいいからな」
カエサルから、左衛門佐から、エルヴィンから歓迎されて、思わず顔がほころんでしまう。たぶん、今日この日のことを忘れないと思う。
「――赤木君」
「うん？」
「ありがとう。こんなにも素晴らしい人達と、巡り合わせてくれて」
「いやいや」
赤木は、気恥ずかしそうに頭を掻いて、
「俺はきっかけを与えただけさ。こうなったのはお前の、坂本龍馬に対する熱意あってのもんだ」
「……そっか。ありがとう、赤木君」
なぜ、赤木に友達が多いのか。それがよく分かった。
各々の明るい顔を見て、日々抱えていた寂しさが霧散していく。おりょうと顔を合わせ、おりょうが小さく「うん」と首を動かして、
「坂本龍馬の名は、お主に預けておくぜよ」
「ありがとう。その域に達せるまで、僕も僕なりに頑張ってみる」
「その意気ぜよ」
ソウルネームの軟着陸が済んで、一通りの紹介も終わって、初対面特有のぎこちない空気も何処かへ吹っ飛んでいき、青井は気楽そうに笑えている。
――こんな空気を、吸えるなんて。
誰を見ても、嫌な顔を一つもされない。ろくなことが言えず、力の抜けた笑いをこぼそうとも、この場に居る誰もが小さく頷いてくれる。受け入れられたのだと実感して、体全身で安堵する。
「――それにしても」
左衛門佐の言葉に、周囲が聞き耳と視線を傾ける。
「もしお前が、坂本龍馬の域に達したら」
うん。全員が、無言で頷く。

「……おりょうと坂本龍馬ということで、夫婦ということになるのか？」
左衛門佐が疑問顔で、ぽつりとそんなことを言った。
――考える時間なんて、数秒もいらない。
青井とおりょうが顔を合わせあい、頭の中でおりょうとの青春劇が強制的に再生されてしまった。どうやらおりょうも同じことを考えてしまったらしくて、同時に視線を上の空へと逃がす。
そんなことがあったが、赤木とカエサル、エルヴィンに左衛門佐、そしておりょうと無事に分かり合うことが出来た。ここから友達に、そして親友になれるかどうかは自分次第だ。
――メールアドレスと番号を交換しあったが、その行為そのものがとてつもなく嬉しかった。
その後は、剣道について多少語ったり、それぞれが持つ歴史の魅力を披露して貰ったりした。かじった程度の知識しか持たないからこそ、歴女たちが織り成す話には常々頷けたものだ。
一方の赤木は、戦闘機道について話してくれた。団体戦だからこその高揚感に、空を舞うというかけがえのない感覚、そしてエルヴィンとカエサルの軍師っぷりについて語ってくれた。本人がたは「はっはっは」と笑っていたが、友情とはこういうドラマを生み出すものなんだなあと、多少ながら羨望してしまう。
けれど、そういったものはこれから積み重ねていけばいい。
赤木が作ってくれたこの人間関係を、自分は大切にしていきたい。
青井は、アスファルトに視線を向ける。
こんな自分にも、歴史は優しく動いてくれるものであるらしい。
――
「――てなわけで、こいつもよく笑うようになってさ。いやあ、青井の飲み込みの速さは流石だと思うわ」
「いやあ、赤木君達がちゃんと教えてくれるから……」
それからというもの、青井は積極的に今時の音楽を聞き、流行りのドラマを見て、戦闘機道について聞きかじってもみた。
青井にとっては未知の世界だったが、馴染んでみればかなり面白

かった。音楽は心を躍らせるし、ドラマは感情を揺さぶってくれる。戦闘機道に関しては、空で戦う感覚というものが非常に複雑怪奇で、だからこそ聞くのが楽しかった。
「いやでも、知ろうとしたいものをキチンと覚えられるって、相当スゲーことだからな。俺なんて、未だに幕末がよく覚えらんなくて」
「大丈夫だよ、赤木君なら。あの複雑な戦闘機道の中でレギュラー張れてるんだから」
エルヴィンも同意するように、「うむ」と頷く。
「あれは好きでやっているだけだからな……ま、追々覚えるよ」
「ゆっくりでいいぜよ」
「赤木君なら大丈夫」
放課後が訪れれば、決まって赤木が誘いをかけてきてくれて、いつの間にか歴女グループとも帰路につくようになった。
前までは一人きりでアスファルトを踏みしめ、時には仲良しグループとすれ違っては羨んだりもした。こういう時の曇り空は、いつも自分の心を癒やしてくれたっけ。
今となっては、青い空がとても恋しく思える。せっかくの放課後なのだから、清々しい天候の下で自由を満喫していきたいと、心から思う。
「いやいや、それにしても。赤木とは上手くいっているようだな」
「うん、彼にはよく見てもらってるよ。彼がいなかったら、今頃僕はどうなっていただろう」
「――確かに、赤木さんのお陰で梅太郎は立ち直れたのかもしれないぜよ。でも、それを選んだのも梅太郎ぜよ」
「そう、だね」
おりょうが、「うん」と励ましてくれる。続いて、左衛門佐も親指を立ててくれた。
ほんとう、剣道を歩んでいてよかったと思う。気だけは真面目に整えていたからこそ、グレずにいられたのだから。
「ま、おりょうさんの言う通りさ。お前はいい奴ってこと」
「あ、ありがとう、赤木君……おりょうさん」

赤木とおりょうが、からっと笑ってくれた。
「――あ、そういえば」
エルヴィンの声に、赤木が「ん」と反応する。
「今日は、ミリタリー雑誌の発売日だった。……というわけで本屋へ寄ろうと思うんだが、いいか？」
「いいぞ」
左衛門佐の同意により、これからの予定が決まった。
同級生とこうして遊べるなんて、自分からすればまるで信じられなかった。だからこそ、こんな関係を紡げるように自分も腐らず元気良くいきたいと思う。
□
歴史へのチケットとは、姿かたちを変えながらそこに存在しているものだ。
時には映像が提供してくれたり、時には娯楽を通じて探求したり、時には本が過去へと誘ってくれる。それ故に、一旦本屋へ入ってしまえば、「何か掘り出し物はないかな」の一言で軽く数十分は楽しく拘束されてしまうのだ。
だからエルヴィンが、数秒でお目当ての雑誌を手に取り、そのままレジへ直行――するのではなく、我らが歴史コーナーへと合流するのは必然だった。
気持ちは分かる――幕末担当の梅太郎は、エルヴィンの行動に始終同意していた。
さて。
青井もまた、歴史コーナーの中に埋もれている。お目当てのジャンルはもちろん幕末で、今日の気分は「坂本龍馬関連で読んだことのないやつ」。
そうして本棚を目で追っていって、「龍馬道で追う坂本龍馬」というタイトルが視界に飛び込み、何の躊躇もなく手を伸ばして、
「あっ」
手と手が触れ合った。
視線を指から腕へ、顔に移すと、そこには野上武子か、おりょうが

いた。
「――！　ご、ごめんっ」
「い、いやっ、別にいいぜよ。……それよりも、それ」
「あ、ああ、これ？　いいよ、おりょうさん」
「あいや、梅太郎が先だったぜよ」
「いや、おりょうさんの方が早かった気がする」
「例えそうだとしても、梅太郎は坂本龍馬になるという崇高な使命があるぜよ。だから、その本を読むべきぜよ」
「待ったおりょうさん。おりょうさんの魂の中にも、坂本龍馬がいるんだから。だから、おりょうさんが……」
「いやいや」
「いやいやいや」
この時、青井の頭の中は「どうしたらおりょうへ献上出来るんだろう」でいっぱいいっぱいになっていた。
だから、あまり異性と付き合ったことがない青井は、この時は平然と、
「おりょうさんは女の子で、俺は男なんだから。だからこの本はおりょうさん優先だよっ」
言い終えてみて、今なんて言った自分と冷静になる。
振り返ってみて、なんてクサいことを言ったんだと強く思う。
言われたおりょうもタダでは済まなかったらしく、顔を赤く染めながら「え」「え」「いや」、
「お、女の子なんて……そんな……いや、そうなんだけれども……」
「あ……いや、なんというか。と、とにかくこれはおりょうさんのものってことで」
本棚から目的の本を引っこ抜き、両手でおりょうに差し出す。
完全にノリと勢いだけの行為だった。けれどもおりょうは、躊躇うように視線を逸らして、唇をちょっと尖らせながらも、
「わ、わかった、ぜよ」
そうして、本を受け取ってくれた。
――手元から本が離れた瞬間、体全体から力が抜けきったと思う。

やり方はともかく、おりょうへ本を差し出すという目的は完遂出来た。お陰で、達成感めいた気持ちが湧いてくる。
「……梅太郎」
「な、なに？」
「こ、この恩は忘れないぜよ。いつか必ず、返すぜよ」
「え、いや、いいよべつに、」
「だめ」
本を胸元に抱いたおりょうが、一歩踏み出してきた。
「恩義はキチンと返す。これもまた、坂本龍馬を追う者のモットーぜよ」
真剣な顔だった、眼鏡越しの青い瞳がよく見えた。
異性からこんなにも見られて、近づかれて、青井は呼吸すらも忘れた。
「まあ、そういうことぜよ」
そして、おりょうが一歩、離れていった。
——思う。
おりょうさんって、なんて、
「梅太郎」
「え、何？」
「……そ、その、さっきの、言葉」
「う、うん」
「——あ、ありがとう、ぜよ」
おりょうさんって、なんてきれいなんだ。
そうしておりょうは、逃げるようにしてレジに向かっていってしまった。
——ひと呼吸。
こんなにも女の子と話したのは、始めてだった。あんなにも至近距離で向き合ったのなんて、今までにないことだった。
おりょうの後ろ姿を、自動的に目で追い続けてしまっている。
「青井クン」
不意に後ろから声をかけられ、絶叫するかと思う。

「な、何？」
赤木が、口元だけを曲げながら、
「イケメンだな」
「え、いやー……その」
「お前はやっぱ、いい男だよ」
そんなことを言われて、視線が右往左往に動いてしまう。
よく見てみれば、左衛門佐が上機嫌そうな顔で自分を見つめている。カエサルは無表情で、エルヴィンは軍帽の角度を下ろしていた。
考えてみれば、歴女達との距離がそうそう離れるわけがないのだ。求めている本のジャンルが一緒なのだから。
あまりの恥ずかしさに、視線を床に伏してしまう。けれどむず痒いような、高揚してしまうような、そんな手放せない気持ちを抱えたままで、「そうでもないよ」と答えてしまった。
――こんな自分の歴史にも、激動というものはやってくるらしい。
その後は、自分は幕末関連の小説を、赤木は「図解、幕末時代」を購入した。その他のメンバーも、満足げに本を抱えていた。
そうして本屋から出た頃には、空はすっかり夕暮れ模様だった。海の上から見ているからか、友人と共にいるからだろうか、それがどこまでも広く透き通って見える。
――ふと、おりょうさんと目が合い、
「読み終えたら貸すぜよ」
「ありがとう」
うまく言えたと思う。
その後は、歴女四人をシェアハウスまで送り届けて――赤木と二人で、寮に帰っていった。
――
「乾杯！」
あれからほんの少しが経過した後、プラウダ高校と剣道の練習試合を行った。――結果は、敗退であったけれども。
しかし、「三人抜きか、凄いな！　これは祝うべきだ！」とカエサルから提案され、自分以外のメンバーもそれに賛同。そんな経緯があっ

て、行きつけ（らしい）の定食屋にて飲めや食えやをしている最中である。
　最初こそ恥ずかしかったが、時間が経ってみればやっぱり嬉しかった。それは顔にも出ていたと思うし、何度も何度も「ありがとう」と言ったと思う。そんな自分に対して、赤木は「遠慮すんなって」と言ってくれた。
　それで、胸のうちに残る敗北感はだいぶ霧散してくれたと思う。
　コップとコップを触れ合い、六人同時で中身を飲み干して、一斉に「たはーっ！」と声に出す。なんだか青春しているような気がして、青井はすっかり浮かれきっていた。
「――いやしかし、本当に凄かったな。普段のお前は穏やかだというのに、剣を握ると鬼になる」
「お、鬼なんてそんな」
「そうだぞエルヴィン。侍と言え、侍と」
「さ、侍なんて……」
「じゃあ武士ぜよ！」
「お、おりょうさん」
　カエサルが「はっはっは」と笑い、
「それくらい、お前の気迫が凄かったということだ。正直ちょっと怖かった」
「そ、そうなの？」
「声は鋭かったし、スキあらば剣を振りかざすし、まるでお前でないようだった。お前がレギュラーなのにも納得がいく」
「ど、どうも」
「いやー、あれは男の俺でもマジ怖かったわ。いや、お前には戦士の素質がある。……で、戦闘機道を歩んでみない？」
　赤木の隣に座り込んでいたエルヴィンが、赤木のことを軽く肘打ちする。赤木が「ってーなー」と悪態をついた。
　左衛門佐が、ほっけの骨をぺりぺり剥がしながら、
「怖いだけじゃなくて、ちゃんと実力があるからなあ。これは、将来が楽しみな武士だ」

「あ、ありがとう、左衛門佐さん」
「怖くて、強くて、けれども優しい面がある……やはりお主は、坂本龍馬の素質があるぜよ」
しみじみと微笑みながら、おりょうが総括する。
ここまで堂々と「優しい」なんて言われてしまっては、恥ずかしくなってうつむくしかない。
――けれど、
「あの、さ」
「うん？」
「これまでは二人抜きが限界だったんだけれど、今回で始めて、念願の三人抜きが達成できたんだ」
顔を、そっと上げる。
一同は、「マジか」といわんばかりに表情が硬直していた。
「たぶん、みんなが応援してくれたからだと思う。僕は一人じゃない、みんな応援してくれている……だから、僕はここまで戦えたんだ」
精一杯、笑ってみせて、
「ありがとう」
ほんの少しの沈黙が訪れ――そしてカエサルが、エルヴィンが、左衛門佐が歯を見せて笑う。赤木は「どういたしまして」と苦笑してくれて、
「梅太郎」
「うん？」
「よかったぜよ、力になれて」
「うん。……これで、貸しは無しってことで」
「むう」
おりょうの口が、への字に曲がる。
――自分は間違いなく、正しいことを口に出来たと思う。これまでは透き通った孤独感の中で戦い抜いてきたが、先日の試合中の中では、みんなが応援に駆けつけてくれたあの日は、心がつい躍ってしまったのだ。
それはきっと、声にも剣さばきにも影響を及ぼしてくれたのだと思

う。一人じゃないという絶対的な根拠が、目には見えない重荷を消し飛ばしてくれたのだと想う。
だから、お礼を言った。おりょうの貸しは、これでなくなった。みんなのお陰で強くなれたのだから。
そうして、味噌汁を飲む。
「梅太郎」
「何？」
左衛門佐が、横目でおりょうを見つめる。
「おりょうな、凄かったんだぞ」
「え、何が」
「試合中の、お前を見守る顔が」
「え」
左衛門佐が、しみじみと頷いて、
「無言で、けれども真剣のような顔で、お前のことをじっと見守っていた。終始無言だったから、おりょうも怖かったのなんの」
「そ、そうなの？」
「そ、そんな顔なんかしてないぜよ」
「してた」
左衛門佐が、しれっとした表情でほっけを完食し、
「余計なことをしたら、絶対に斬られてたなアレは」
「適当なことを言うな、もんざ」
「本当だ。隣りに座っていたから間違いない」
左衛門佐の証言を信じているのだろう、一同も「へえ」という表情を露にしていた。
「あんな顔のおりょう、始めて見たよ。なんというか、お前もカッコ良かった」
「そ、そうか……」
そうして、おりょうと目が合う。
――なんだか、急に恥じらいが芽生えてきた。
思わず、視線を白米に落とす。大して味覚が働かないまま、白米を口の中に入れていく。

そこまで異性から見守られるなんて、なんだかこう、凄いとしか言いようがない。女の子慣れなんかしていない自分は、ただただメシを食うことしかできない。

けれど、フラッシュバックしてしまうのだ。本屋で見た、おりょうが見せる青い瞳を。

あの時、自分はどんな感情を抱いたのか、いまいち言葉にできない。けれども、拒否感なんてまるでなかったことは覚えている。

ある程度お椀が軽くなったところで、ちらりとおりょうの顔を伺う。

同じくしてお椀を手にし、うつむきがちだったおりょうと目が合う。

恥ずかしさが爆発したと思う。おりょうからは、何の言葉も返ってはこない。それが余計に恥ずかしい。

「……なんか、ここだけ青春感がすごいな」

そして、左衛門佐があっさりとどめを決めてきた。

青井は、ものを食べることしかできていない。

――その時、カエサルが呆れたように溜息をついて、

「――お前は何を言ってるんだ」

「え？　そう？　……なんかすまん、ふたりとも」

「あ、いや」

「あ、いや」

「いや？」

「ああいや、なんでもない！　……そ、それよりもほら、食べよう？ねっね？」

赤木が「だな、食え食え」と続く。

その一声で空気に一区切りがついたのか、一同が食べたいものを口にしていく。そうしておりょうと目が合ったが、にこりと笑ってくれた。

そんなおりょうの顔が嬉しくて、青井も無言で笑い返す。

「――そういやエルヴィン、見たぞ」

「何が？」

「大洗ＷＥＢニュース。お前、戦車道始めたんだって？」
「うわ、見られたのか」
「新聞も配られたしな、『大洗戦車道、数十年ぶりの復活！』って」
　青井が「あ、それ僕も見た」と口にし、
「号外扱いだったよね。手渡された新聞を目にしても、戦車道一色だったし」
「なー。エルヴィンお前、写真写りよかったぞー」
「やめろ、余計なことを言うなッ」
　カエサルが「はっはっは」と笑い、エルヴィンが睨む。それでもカエサルは、てんで動じない。
「けどさあ」
「うん？」
「お前ら、確か忍道を履修してたよな。なんで路線変更したんだ？」
　その時、青井は見逃さなかった。エルヴィンの表情から射出された「げっ」を。
「それはな」
「い、言うなッ」
　カエサルは、やっぱり不動の姿勢を築き上げたまま、
「戦車道のプロモーションビデオを見ている時の、エルヴィンの目がとっても輝いていたからだ」
「あー」
　赤木が、納得したように頷いた。
　エルヴィンが恨めしそうな顔でカエサルのことを凝視するが、皇帝はそんなことでは動揺したりしない。
「これは入らないといけないと思ってな。もちろん、おりょうと左衛門佐も同意したぞ」
　おりょうと左衛門佐が、「ねー」と見つめ合う。エルヴィンは、すっかり歯を食いしばっている。
「それに、個人的な興味もあったしな」
「お、なして？」
　カエサルが、にやりと笑って、

「ドンパチできると思ったから」
「さすが」
「実際のところは、凄く忙しかったけどな。弾は重いし」
「視界は狭いし」
「なかなか当たらないし」
「指揮で頭がこんがらがりそうになったし」
「相手はあの西住流だったし」
　西住流？　青井と赤木が、揃って首をかしげる。
「戦車道における、最大の流派のことぜよ。……その後継者が、大洗戦車道に入ることになって」
「マジで？　すげえな」
「凄かったぜよ。次々と戦車を討ち果たしていくその姿は」
「――そ、それで、おりょうさん達は？」
　そこで、おりょうの視線がエルヴィンに傾く。
「エルヴィンとカエサルの知識のお陰で、背後を取ることが出来たぜよ」
「お、すげえなお前」
「はっはっは」
「いやー、あの時はすまなかった。肝心なところで弾を外してしまって、お陰で返り討ち」
「構わん構わん。これから伸びるさ」
　エルヴィンが悔しくなさそうに笑い、左衛門佐が「えへへー」と苦笑い。どうやら、大砲の担当は左衛門佐であるらしい。
　カエサルがエビフライを噛みちぎりながら、
「結果はどうあれ、最後まで生き残ったんだ。初心者にしてはいい結果だろう」
「うむ。お陰で教官殿から、西住さんからもお褒めの言葉をいただいたぜよ」
　どうやら、緒戦は上手くいったらしい。おりょうの満足そうな笑みが、それを物語っている。
「しかし、知識とは応用が利くものなんだな」

「どゆこと」
　エルヴィンが、左手で赤木を指差し、
「戦術ノートをとっていたお陰で、地の戦いにおいても頭が上手く回ってくれたんだ」
「お、そうなん？　すげえじゃん、さっすが裏のブレイン」
　裏のブレインと聞いて、「そういえば」と青井は思う。
　赤木曰く、今年の大洗航空隊はかなり上手くいっているらしい。隊員の士気もそうだが、エルヴィンとカエサルが提供する「匿名の戦術ノート」のお陰で、大洗航空隊の実力そのものが大きく底上げされているとか。
　なるほど。
　熟練相手の背後につけた理屈も、最後まで生き残れた理由にも納得がいく。
「お前が機会を与えてくれたお陰だ、ありがとう」
「何言ってんだ。ぜんぶお前がやったことだろ」
「それでも、だ」
　その時、青井は見えたと思う。
　エルヴィンの、本当に嬉しそうな顔を。
「……さて」
　カエサルが、静かにお椀を置く。米粒が一つも残っていない。
「赤木、青井。実はこのたび、私達は高校戦車道全国大会へ出場することになった」
「ほんとう？」
「ああ。広報殿（生徒会）の決定でな」
「へー」
「そこでだ、お前達に協力して欲しいことがある」
　赤木と顔を合わせ、再びカエサルに目をやる。
　カエサルは、いたって大真面目な真顔のまま、
「我らがチーム名を決めようと思う」
　間。
「は？」

「チーム名だ。西住さんからは、『動物の名前で揃えるのはどうでしょうか？』って提案されたのだが……」
カエサルが、椅子の背もたれに身を預ける。まるでアテがないらしく、ぼうっとした表情で天井を見つめていた。
どうやらおりょうもエルヴィンも、左衛門佐も良い案が思い浮かばないらしい。黙々と箸が動き、声にならない唸りが漏れ、エルヴィンに至っては「これは難しい」と意見している。
「ら、ライオンは？」
「それは真っ先に出たんだが、」
カエサルは、未だ天井を眺めたまま、
「他のチームと被りそう」
「あ、確かに」
「だろう」
青井も本気で悩む、赤木だって「何かあったか？」と腕を組む。
名前というものは非常に重要な概念であり、一度決めたらそう簡単には取り消せないものだ。この契約は、一発で決めなければならない。
エルヴィンが、
「鷹」
「被りそう、かっこいいし」
「確かに」
左衛門佐が、
「馬」
「馬、か……保留」
おりょうが、
「にわとり」
「にわ、とりか……」
「確かに、殺意が伝わりにくいかもしれないぜよ」
赤木が、
「意外性は？」
「プラス対象」

「サメ」
「……海、か……」
「そうだな……」
赤木という牙城が突破された今、視線は瞬く間に青井へと殺到する。
十の目に見つめられ、青井は両腕を組んでまで脳ミソを働かせる。ろくな動物知識なんてないものだから、定番の猛獣のみが頭の中を走り回っている。
駄目だ。自分ひとりじゃまるで閃けない。意外性があって、強そうで、地に足をつけている動物といえば――
「……速いのがいいかな」
「うん」
左衛門佐が頷く。
「……強いのがいい？」
「そうだな」
エルヴィンが同意する。
「土の上、じゃないと駄目？」
「……水にも陸にも対応出来るんなら、その分強そうじゃね？」
赤木が、万策尽きたような顔で応える。
「デカいのが、いいのかな」
「なるべく」
カエサルが、人差し指で額を支えている。
「……デカい……強い……水陸に対応……しかも速い……」
視線なんて上の空、ギリギリで生きているかのようなか細い声。心当たりがありそうで、けれども知識不足故にあと一歩思考が走らない。
こんなことなら、動物に関する本をたくさん読んでおけば――
「あの」
神経を張り巡らせていたせいで、かえって声に反応してしまう。
誰。声の主を目で追い、
「それって」

おりょうが、控えめに手を挙げていた。
何。一同が、おりょうの言動を見守ろうと視線が殺到し、ついに、
「カバ、では？」
――、
「それだ！」
「それだ！」
「それだ！」
「それだ！」
「それだ！」

その後、一同は定食を無事平らげ、今日からカバチームだーと左衛門佐が意気込み、そのままお会計を済ませて店から出る。
おりょうからは「梅太郎のお陰で決まったぜよ」と笑顔を向けられてはノリと勢いでシェイクハンド。あとはそのまま、シェアハウスまで送り届けていく。
――上機嫌を胸に秘めたままで、青井は余韻に浸るように地を見つめる。
今日はとても良い日だった。ここから、自分の歴史は面白おかしく動いてくれるのだろうか。

――

7月がやってきて、戦闘機道、剣道、そして戦車道は、いよいよもって大会へ力を注ぎ込んでいた。
まずは赤木の戦闘機道だが、継続、アンツィオを破って、無事に三回戦目の切符を手にした。次に青井の剣道だが、こちらも三回戦目まで進出することが出来た。部長曰く、今年は筋のある男が多いのだとか。
そして戦車道だが、こちらも強豪サンダース、そしてアンツィオを見事に突破したらしい。これらの事態に我らが大洗高校の松山会長は、「このまま勝ち進んでくれ！」と実にハッスルしている。元より負けるつもりはないから、そのつもりではあるのだが。
――そんな激闘から数日後、青井と赤木はスーパーめがけぶらぶら

と歩いていた。空はすっかり夕焼けに染まっていて、気温も夏らしくずいぶんと暑い。後ろから一両の自転車が追い越していく。
今日は時間が出来たのと、大会を勝ち進んでいけたテンションを動機に、赤木の友人であるらしい竹下、芝村という戦闘機道仲間が紹介される予定だ。今晩は、その友人達と夕飯を共にするつもりでいる。
赤木曰く「いい奴ら」とのことで、会えるその時が実に待ち遠しい。
「――っかしな、すまんなー」
「え、何が？」
ぼんやりと歩みながら、赤木が背筋を伸ばす。
「いやさ、お前から幕末について教えてもらっているのに、ぜんぜん覚えられなくて」
「いや、いいよ。難しいからね、歴史っていうのは」
「まあ、そうなんだけどさ」
それでも赤木は、幕末に対しての知的好奇心を止めるつもりはないらしい。戦闘機道もそうだが、ほんとうに努力の人なんだなと青井は思う。
「赤木君なら絶対に覚えられるよ。あの戦闘機道と付き合えているんだから」
「サンキュー」
「また何か分からないことがあったら、何でも聞いてね」
「ＯＫ、頼りにさせてもらうぜ」
まるで屈託のない笑み、余裕そうなサムズアップ。
――自分もいつか、ああいうふうになれたらな。
そして数分後、馴染みのスーパーが見えてきた。
□
スーパーの中に入ってみれば、半袖には少し堪える涼しさが全身に染み渡ってきた。どうやら赤木も同じだったらしく、「おーさむ」と苦笑い。
早速とばかりに、買い物かごを片手に食材を探し求めることにする。今日は大多数で食事をするから、すき焼きで親交を深める予定だ。軍資金も、参加メンバーから預かりを受けていた。

まだ顔も合わせていないのに、信用してくれているんだな。赤木の友達だから。
その事実が、とてつもなく嬉しい。改めて、赤木のような男になりたいと強く思う。また一つ、目指すべき目標が増えた。
そうしてしらたき、豆腐、しいたけをかごの中へ突っ込んでいって、あとは肉を買い求めるだけになった。赤木が「肉なんて久々だなー」と微笑み、青井もそれに頷く。
まるで優勝した後のようなテンションだが、無事に二回戦も勝ち抜いたのだ。これぐらいの浮かれは許して欲しい。
――そうして、肉類の販売コーナーに差し掛かって、
「あっ」
「あっ」
別コーナーからやってきたおりょうと、鉢合わせになった。
予想外だったもので、思わず身も心も固まる。それは赤木も同じだったようで、ほんの少しだけ間が生じ、
「梅太郎に赤木さん、会えて嬉しいぜよ」
「おお、俺も俺も。で、今日の夕飯はおりょうさんが？」
赤木の質問に対し、おりょうが買い物かごを掲げる。よく見てみれば、かごの中身は自分達のものとほぼ一緒だ。
「あ、それは……えーっと、なんだったかな。し、ししゃも……じゃねえし……」
青井は、あっさりと「ああ」と頷き、
「軍鶏だね？」
おりょうの顔が、分かりやすく明るくなる。
「さすが梅太郎、わかっているぜよ」
「いやー、だって坂本ファンだからね」
「ねー」
おかしくなって、互いにけらけら笑ってしまう。
「しかし、軍鶏か……食べるものも本格的だね、おりょうさんは」
「おりょうさんですから」
「流石」

そして、青井は静かに鼻息をつき、
「軍鶏、か……いや、いいんだけれど、複雑だよね」
「……わかるぜよ。好物を食べようとしたその日に、龍馬は」
「本当、犯人は誰だったんだろうね」
「わからんぜよ。もう、過去のこと」
「そうだね、もう昔のことだもんね。……龍馬道の最終回も、犯人はぼかされてたし」
「思い切った演出だったぜよ。けれど、ああいうのも私は好きぜよ」
「うん。僕も、あえてそんなふうに解釈するんだなって、テレビの前で関心してた」
「ああ、懐かしい、もう半年前ぜよ。……最終回は、皆で軍鶏を食べながら視聴していた。とても、うまかったぜよ」
「わかる」
うつむく。
小さな溜息とともに、頭の中で龍馬道の最終回が鮮明に再生されていく。その人はあまりにも大きくて、閃光のようで、格好良かった。
「梅太郎」
「ああ、ごめん。つい思い出しちゃって」
おりょうは、共感するように小さく頷いて、
「梅太郎は坂本龍馬を目指している男、そうなるのも仕方がないぜよ」
感傷的になってしまっていた青井にとって、その一言は不意に深く突き刺さった。
坂本龍馬という大いなる男に比べて、自分は、
「――坂本龍馬か」
「梅太郎？」
重く、重く鼻息をついて、
「剣術の方はいい、まだいい。けれど、僕は彼のような人柄を得られるのかなって」
「人柄」
「うん。おりょうさんと出会えたのだって、元はといえば赤木君のお陰だからね。それまでの僕は、パッとしなくて、友人が少ない奴だっ

たから」
剣道で精神が研ぎ澄まされようとも、剣さばきが磨かれようとも、結局は他人が恐ろしいままだ。
もちろん、今現在はとても幸せに満ちていると断言できる。これだけの友情に囲まれているから。
けれどそれらは、全て赤木から与えられたものだ。坂本龍馬のように、人を引き寄せたわけでも、誰かを誘った経験もない。自分のことは嫌いではないものの、大きい男になれるかと聞かれたら――それは怪しい。
だから、つい不安を口にしてしまうのだ。梅太郎という名前すらも大きすぎると、ふと思い込んでしまう。
「梅太郎」
「あ、ああ。ごめん、つい気弱なことを」
「梅太郎は、しっかりとした人柄も備えているぜよ」
「え」
一瞬にして、それ以上の言葉を見失う。
「きっかけは確かに、赤木君の好意かもしれない。でも梅太郎は、義を以て、私達との絆を育んでいるぜよ」
「お、おりょうさん」
おりょうはどこまでも真顔だった。一切合切の自虐なんて切り捨ててしまうような、そんな気迫が本能で伝わってくる。
「梅太郎はよく笑って、よく話して、善く戦っているぜよ。梅太郎はまだ若い、焦る必要なんかないぜよ」
呼吸。
「梅太郎は、坂本龍馬になれる素質がある」
「そう、かな」
「うむ。シェイクハンドもきっちり行っているし」
「あ、あれは……まあ、ね？」
思わず苦笑いしてしまって、面倒な雰囲気が瓦解していく。おりょうも、さっきのような明るい顔を見せてくれていた。
そうか。

そういえば自分は、まだ若いんだっけ。
「おりょうさん」
「うん」
「ありがとう。つい弱気になってしまったけれど、おりょうさんのお陰で吹っ切れたよ。さすがおりょうさんだ」
「龍馬を支えるのは、おりょうの仕事ぜよ」
「そうか、そうだよね、」
頷いてみせて、ふと思考がつまづく。
仮に自分が龍馬で、目の前にいるのがおりょうさんそのものだと仮定してしまうと――
どうも、おりょうも同じことを考えてしまったらしい。瞬く間に顔が真っ赤に染まっていって、両手で口を抑えて、
「あ！　いや……そのっ、こ、これはっ」
「ああいやいやわかってるわかってる！　ソウルネームソウルネーム！　そういうことだよね？　ね？」
「う、うん」
「僕は気にしてないから、気にしてないから！」
「わ、わかったぜよ」
とりあえずは、青井もおりょうも深呼吸する。
たったそれだけを行ったが、不思議と気分が一新されていくのを実感した。
「おりょうさん」
「うん？」
「――ありがとう。僕はいつか、坂本龍馬になるよ。剣道履修者という誇りに誓って」
「うむ」
とても、清々しい気持ちでいっぱいだった。
だから、言おう。本心から口にしたいことを、今だからこそ。
「おりょうさんも、おりょうさんになれるように頑張って。戦車道のことは詳しくないけれど……おりょうさんならできるっ」
「梅太郎」

手を、そっと差し出す。
「君と会えて、本当に良かった」
「え、あ――」
おりょうが、目と口を開けたままで硬直してしまった。
けれど、言い過ぎたとは決して思わない。
だって、この気持ちは間違いなく本物だから。おりょうさんと出会わなければ、ビッグな男になんてなれなかっただろうから。
――おりょうが「けほん」と小さく咳をこぼして、しばらくはスーパーの床めがけ視線を逸らしたまま。そうしてゆっくりと顔を上げていって、おりょうの青い瞳が自分を見据えて、いつものようににこりと笑って、
「私も、君と出会えてよかったぜよ！」
手と手をとりあい、大げさに揺らしてみせる。
おりょうの手はまるで小さい。だから、壊してしまわないようにゆっくりと握りしめる。今のおりょうはどこまでも笑顔で、それは自分に向けてくれていて、少しずつ胸の内が熱くなっていくのを実感する。
――これってまるで。
シェイクハンドが終わる。わだかまりが終わる。
「――よかったな」
後ろからの声に、変な声が出た。
振り返ってみると、実に嬉しそうな顔をしている赤木が、いた。
「――あ」
「――あ」
青井とおりょうの口からは、そんな声しか出てこない。
「ああ、俺のことは気にしないでいいから。な？」
「あ、いや、その――ごめんっ赤木君！　変なことに巻き込んでしまって！」
「すまなかったぜよ！」
「いいっていいって。お前、成長したっぽいしな」
思う、本当につくづく思う。

この人には敵わない。だからこそ、こんな男になってみたい。
「おりょうさんも、なんというのかな……いいことがあって、良かったね」
「あ――ああ、よかったよかった、よかったぜよ！」
すっかりスーパーに長居してしまったが、赤木が「すまねー少し遅れる」と友人に電話してくれたお陰で、とりあえずの心配事は解消された。
そうして一通りの買い物を済ませて、スーパーから出てみれば、外はすっかり暗くなってしまっていた。星が少なからずうっすらと見える。
おりょうが、手を振りながらで別れようとして――青井と赤木は、おりょうを歴女のシェアハウスまで送り届ける。当然の行いだった。
そうして数分後、おりょうをシェアハウスまでエスコートし終えては、「ありがとうぜよー」と礼を言われて任務完了。すき焼きのテンションもあってか、赤木とはその場でハイタッチした。
あとは、街頭に照らされた帰路を歩むだけだ。その間にも、赤木は仲間についてのよもやま話を、どこか寂しそうな笑みで語ってくれる。
楽しかったんだな、そう思う。
これからは、自分も思い出を作っていこう。改めてそう想う。
――なんとなく、街頭に染まったアスファルトを見つめる。
これからどう動くかは分からないけれど、自分の歴史はまだ続いてくれるらしい。
その後は、竹下と芝村から歓迎を受け、すき焼きを共にし、、楽しい思い出や恥ずかしい隠し事を暴露したりされあったり、惚気話を聞いたりして、一生分楽しんだ。
――恋話を聞いて、おりょうの顔が思い浮かんだことだけは、絶対に誰にも言えない。
――
――やれるだけのことはやった。悔いはねえ
大洗戦闘機道の次の相手は、強豪中の強豪、黒森峰戦闘航空大隊

だった。
戦力はもちろん、士気も練度も最強クラスであり、相手が強ければ強いほど燃え上がるタイプらしい。そんな相手とぶつかってしまった大洗航空隊は、黒森峰めがけ必死に食らいついて、何がなんでも有利なポジションを得ようとし、撃墜したりされたりして、惜しくも全滅した。
観客席で見守っていた青井は溜息をつき、左衛門佐は「くそう」と悔しがる。エルヴィンは、「黒森峰相手にあれだけ戦えたんだ。来年に期待しよう」と不敵に笑い続けていた。
間もなくして、大洗剣道の三回戦目が始まった。相手は強豪プラウダで、とにかく体格の良い選手が多いのが特徴だ。
確かにリーチの差はあるだろうが、青井だってこの日の為に剣を振りかざしてきたのだ。あとは戦術と腕に期待するのみだった。
――結果は、青井「は」勝った。しかし、勝敗の差で大洗剣道の負けが決まってしまった。これも総当たり戦が下す現実の一つだ。
けれど、やれることはやった。悔いなんてものはない。
一区切りがついた後で友人達と合流したが、その時のおりょうは、口元だけを曲げて「また一歩、坂本龍馬に近づいたぜよ」と言ってくれた。最高の賞賛だった。
そして、大洗戦車道にとっての三回戦目が開始された。何の縁か、相手はまたしてもプラウダ高校だ。
戦車に対する知識は皆無だが、相手の戦力は明らかに充実している。観客席で事を見守っていた赤木は「勝てるかな」と呟き、青井は「わからない」としか言えない。
心の何処かでは、「ここまでよく頑張った」と思っていた。始めたばかりの戦車道で、まさか三回戦目にまで勝ち進めたのだ。これは明らかな大金星であり、これぞ「来年は期待できる」現状だと思っていた。
――しかし、そんな悠長な願望は、「負ければ廃艦」という事実によってあっさりと踏み潰された。
ほんとう、唐突だったと思う。けれど間違いなく、特設モニター越しから、それを聞いてしまったのだ。

溜息。
なるほど。ウチ(大洗学園)の生徒会がなぜ、今年の大会に対してあれだけ声を張り上げていたのかがよく分かった。一回戦目を突破するたびに号外が配られて、優勝したわけでもないのに「頑張れ大洗剣道！」「負けるな大洗戦闘機道！」と書かれた垂れ幕が屋上からぶら下げられていて、備品が新品同様に交換されていって、ずいぶんと大盤振る舞いだなあと思っていたものだ。
溜息
生徒会は、必死だったんだ。ここを守りたいが為に。
改めて、特設モニターに目を向ける。大洗戦車道は、大洗戦車隊は、カバさんチームは、おりょうさんは、
決して、諦めなかった。

本格的に暑くなり始めて、セミの音色が心地よくなってきた頃。
晴れて自由の身となった赤木と青井は、本屋めがけゾンビのように足を動かしていた。最高気温を前に死にそうなのである。
こんな日は、寮の中でエアコンライフに浸るのが定石なのだが、
「ったくよー、何で俺らがこんなクソ暑い中を歩かなきゃいけねーんだ？」
「しょうがないよ、軍資金を貯める為だし」
「……まーなぁ」
全てのきっかけは、一つのメールから始まった。
土曜の朝が訪れ、「今日はどうしようかな」と思考しながら窓を開け、「今日は寮に籠ろう」と青井が決意したその時、机の上に放置中だった携帯が突如として震えだした。
メールかな。
そうして携帯に火を付け、まずはメールの差出人が目に飛び込んでくる。
おりょうだった。
獣のような速度で画面をスライドしてみれば、
『おはよう。実は今から、本屋のバイトに勤しむことになったぜよ。

大洗戦車道は金がないから、こうして地道に溜めなければいけない。たいへん。
よかったら、売上に貢献して欲しいぜよ』
読み終えたとほぼ同時に、インターホンが鳴った。はいはいと親機の受話器を手にとってみれば、
――なー、本屋に行かね？　エルヴィンがさー
「――ま、しょうがねえよな。あいつら頑張ってるしな」
「うん」
「ちょっとは売上に貢献しねえと、友達の名が泣くってもんよ」
「その通り」
「……でも、やってらんねー暑さですわ」
「だよね……」
気温は確か、３５度くらい。むさ苦しい防具には慣れているものの、この暑さには弱音の一つや二つも吐きたくなるものだ。
溜息が出る、赤木もつられて息をこぼす。
そうして赤木が、遠い目で青空を見つめながら、
「風防全開で飛びてえ」
「わかる」
「でも、大会が終わるまでは飛行機はお預けー」
「ねー。出来る限り、戦車道に資金が回っているらしいから」
赤木は、どこか達観したように微笑して、
「ま、しゃーねえか」
「仕方ないよね」
みんな、大洗学園艦の明日を守るために今日も戦っている。
□
本屋へ入店して、まず目に入ったのは、本のホコリをはたきで散らしている左衛門佐の姿だった。
引き戸の音を耳にしたのか、左衛門佐が「お」と視線を向けてきて、無表情から笑顔に変わっていく。
「よっ、よく来てくれた」
「ちーっす。マジで働いてるみたいだな」

「あたぼうよ。我々からすれば、本屋はまさにうってつけの場所さ」
「みたいだな」
見回す。
エルヴィンはレジを担当していて、その場から「何か買えー」とやる気なく言う。カエサルは新発売の本を積み重ねていくが、その動作には全くもって淀みがない。装填手をしているらしいが、それで足腰が鍛えられたのかもしれない。
そしておりょうは、歴史コーナーで本の並べ替えを手がけていた。
「これがわかりやすいかな」、「手にとってもらうには」――みんな、頑張っているらしい。
よし。
何か買う為に、歴史コーナーへ歩み寄っていく。軽く「やあ」と挨拶してみたが、おりょうは本棚と睨み合ったままだ。そうとう、仕事に集中しているようだ。
邪魔するわけにはいかないか。
隣に居た赤木も察したらしく、「何にすっかね」と本棚を目で漁っていく。歴史好きによる、歴史好きの為のお楽しみがいま始まろうと、
「――あ！　梅太郎に赤木君！」
おりょうの大声が炸裂し、静寂が木っ端微塵に打ち砕かれる。あまりに不意だったものだから、青井から情けない声が漏れる。
「あ、ご、ごめんぜよ」
すぐ近くに居た左衛門佐が、「しーっ」と指を立てる。読書家だからこそ、おりょうは心底恥じるようにしょげてしまった。
「ま、まあまあ。それより、何かおすすめの本はあるかな、おりょうさん」
「歴史が苦手な俺に、どうかお恵みを」
「お――ふふふ、わかったぜよ」
本に関する質問とくれば、歴史好きの右に出る者はほとんどいない。
おりょうの口数は多く、指摘する人差し指に迷いなどなく、初心者を囲い込むように本を勧める。赤木はおりょうの接客ぶりに「すげ

え」と言い、青井も「さすが」と言うほかない。
おりょうは実に嬉しそうな顔で、厳選された五冊を引っこ抜いては
「さあ、どれにするぜよ?」と売り込んできた。
「じゃあ俺は……漫画でわかる幕末時代で!」
「わかったぜよ」
受け取り、赤木が「うし」と微笑む。
おりょうは「まいどあり」と調子良く言い、次に青井の方を見つめてきた。
思う。
おりょうは、学園艦という世界の存亡を託されているはずなのに、まるで何でもないように話しかけてくれている。いつものように、屈託なく笑ってくれている。
――その笑顔をきっかけに、フラッシュバックが生じた。
プラウダ戦車隊に包囲された時、何がなんでも士気を高めようとしたカバさんチームの姿を。その時の、おりょうの献身を。逃げず退かず、最後には散った三号突撃砲の勇姿を。それに見惚れていた自分を。
――だから、
「梅太郎はどれがいいぜよ? まあ、梅太郎は上級者だから、ゆっくり選ぶと、」
「四冊、全部」
「え」
「えと、四冊」
おりょうが沈黙する、赤木が「へ」とあっけにとられている。何事かと左衛門佐も寄ってきて、カエサルの手も完全に止まっていた。
「ま、待つぜよ」
「う、うん」
「四冊買うとして、全部で一万ほどかかってしまうぜよ」
値段を聞いて、驚きはしなかった。むしろ「だろうね」とさえ思う。
歴史書とは、例外なく内容が濃厚で、それでいてページ数も多い。読み応えに関しては間違いなく保証されているものの、その分だけ値

段が高いのもお約束だ。
だから本来は、一冊か二冊の本を厳選して、すぐさまレジへ駆け込んでは五千円をはたいてお釣りを貰ってさっさと撤退してしまう。長居しすぎると、誘惑に負けてしまいそうになるから。
けれども、今日は「四冊ください」と言った。それはデカい口ではない、本心からの言葉だ。
店員であるおりょうは、青井が学生であることを考慮して「いやいや」と首を振るう。けれど青井は、
「構わない。一万もあれば、少しは足しになるかなって」
「い、いやいや、無理にとは言わないぜよ」
「いいんだよ。だって、友達の力になれるんだし」
「一冊で十分ぜよ」
「おりょうさんっ」
おりょうの異議が、止まった。
「僕は、おりょうさんの戦車道を応援したい」
「う、梅太郎」
「……カバさんチームのみんなが、おりょうさんが、とても格好良かった」
「え」
嘘は言わない。
「絶望的な試合状況の中でも、おりょうさん達は諦めなかった。エルヴィンさんは西住さんと作戦を立案し合って、カエサルさんは演説して、左衛門佐さんは旗で戦意を高め、おりょうさんは皆の手を握りしめた。……最高だった」
嘘なんて言っていない。
間違いなく、最高だった。怯える皆に、笑顔でシェイクハンドを施すおりょうは、まちがいなく乙女だった。
ぼくは、そんな彼女に見惚れてしまっていたんだ。
「――そんなドラマを見せてくれたんだから、一万くらいどうってことないよ」
「で、でも」

「それにっ」
本当のことしか、言わない。
「僕は坂本龍馬になる男だ。おりょうさんを支えるのは、当然ぜよ」
本心しか、言えない。
僕はいつの間にか、好きになっていたんだ。野上武子のことが。
おりょうが、泣いてしまいそうな顔で僕を見つめている。何度もまばたきをして、ゆっくりとうつむいていく。それから数秒、あるいは数分が経過した後に、おりょうは両肩で息をした。
命を吹き返したかのように、おりょうの首が上がっていく。
その顔にはもう、戸惑いの色なんてものはない。皆に握手をしたあの時のように、迷いなく笑っていた。
「ばか……くさいぜよっ」
「ご、ごめんっ」
「周りに、聞かれてしまったぜ、」
いなかった。
「……お会計、お会計は!?」
「あーすまんすまん、五円落としててな」
エルヴィンが、カウンターの物陰からひょっこりと現れる。カエサルと左衛門佐は店の奥から、赤木はトイレから何事もなく帰ってきた。
溜息。
意図に気づけないほど、青井は馬鹿ではいられない。みんな、空気を察して姿を消してくれたのだ。さすがは元忍道履修者だと思う。
――めちゃくちゃ恥ずかしかった。後悔はしていないけれども。
「う、梅太郎、はやく払うぜよっ」
「う、うん」
おりょうから四冊の本を受け取り、早歩きでレジに向かっていく。エルヴィンが穏やかに「一万円になります」と呟いて、財布を開けて、４０００円しか入っていなかったので、大急ぎでコンビニへダッシュした。みんなコケた。
――

決勝戦まで、あと数日。
ここ最近のおりょうは、ぼうっとしてばかりだった。授業中はもちろんのこと、休み時間から昼食に至るまで、ずっと。
例外があるとすれば、放課後だ。なぜならば、梅太郎（青井）や赤木とともに帰路へつくから。この二人と――正直になれ――梅太郎と一緒になると、必要以上に話しかけてしまって、別れ際になるとひどく寂しくなる。割と本気で、シェアハウスに泊まればいいのにと思ってしまう。
ため息をつく。
自分は歴女だ。だから、過去における惚れた腫れたはいくつも見届けてきたつもりだ。
だから、自分がいま抱いている、決して嫌ではないもやもやの正体なんてすぐに察せてしまう。
これは――
「おりょう？」
呼び声とともに、現実世界へ引き戻される。右手には箸、左手には白米が盛られたお椀、別の皿には左衛門佐お手製のおはぎが乗っかっている。
「どうした、手が止まって……ぼーっとして」
「あ、いや、その」
テーブルの真正面に腰かけていたエルヴィンが、自分の分のおはぎを頬張りつつ、
「最近、そんな調子だな。どうした、熱か？」
「熱……そうかもしれないぜよ」
「何、大丈夫か？　決勝戦までには治しておかないと」
おりょうが、首を左右に振るう。
「ああ、病気というわけではないぜよ。ただその、熱っぽいというのか、何というのか」
「へえ」
カエサルが、無表情を貫いたままで、
「梅太郎のことを考えていたのか？」

顔なんて、真っ赤になってしまったと思う。
「な、何をッ？」
「心当たりがありすぎなんだよ。ここ最近はずっと眠そうな顔をしているのに、梅太郎と会うとコロコロ笑って、からから話すじゃないか」
「そ、それは……まあ、その」
「否定はしないんだな」
違う。正確に言えば、したくなかった。
嘘をついてもいいはずなのに、ついげん担ぎをしてしまう。
「なるほどな」
隣で夕飯を口にしていた左衛門佐が、できたてほやほやの白米を口にしつつ、
「本屋での出来事か、きっかけか」
うつむいた。
観念した。
「そうじゃなくても、お前ら二人からは、思春期オーラが漏れていたし」
そうだったのかと、沈黙するほかない。
左衛門佐はどんな顔をしているのだろう、カエサルはどんな表情で自分を見ているのだろう。それを確認できるほどの余力は、いまのおりょうには無い。
「前から、お前ら二人はお似合いだと思ってたよ。同じ幕末好きだし」
「……そう？」
「うむ」
あっさり言われてしまった。「前々からそう思われていた」という事実に、おりょうは声すらも搾り取られる。
――なんで、こんなことになったんだろう。
梅太郎のことは、気も話も合う歴史仲間だと思っていた。こんな関係が、いつまでも続くといいなと考えていた。そうして時々、梅太郎のことを男として見てしまう瞬間もあった。
――気づけば自分は、梅太郎と離れたくなんかない。別の誰かに奪われたくない。

そう、願うようになっていた。
「おりょう」
「……ん」
エルヴィンが、自分の名前を口にする。
「お前は、どうしたいんだ」
「どうしたい、て？」
「気持ちを抑えるのか、解放するのか」
「エルヴィン」
まるで止めに入るような、カエサルの声。
それを聞かれてしまったら、私は、わたしなんて、
「言いたい、ぜよ」
「何をだ」
「本心を、言いたいぜよ」
「……それは、間違いないんだな」
「……うん」
「――そうか」
それ以上、エルヴィンは何も口にはしなかった。
我々は、血も心も通い合った歴女だ。だから、これだけのやりとりで信じてくれたのだと思う。我慢出来そうにもない気持ちを、察してくれたのだと思う。
「……みんな」
「うん」
左衛門佐が、静かに応える。
「今度の休日は、みんなで遊びに行く予定だった、けれども」
「ああ」
特に咎めもせず、カエサルが次を促す。
両肩で、息をする。うつむいてばかりだった顔を、そっと、ゆっくりと上げていって、
「梅太郎と、遊びに行こうと思う。それで、本心を伝えるぜよ」
言えた。
左衛門佐が、目も口元も緩ませて頷いてくれる。カエサルは少しだ

け沈黙して、「そうか」と言ってくれて、エルヴィンは無表情の沈黙を保ったまま。
扇風機の音が、体の奥底まで聞こえてくる。外から、名も知らぬ虫たちの音色が耳を揺らす。夜になって少しは冷え込んでいるはずなのに、体はいつまでも熱かった。
「もう一度だけ、聞かせてくれ」
「うん」
エルヴィンが、真顔のまま、
「ほんとうに、梅太郎のことが好きなんだな？」
一切の嘘を許さない、エルヴィンの視線。
けれど、自分は怯まない。
「愛しいぜよ」
出せる答えなんて、これしかないから。
エルヴィンは、音もなく小さく頷く。その行為にどんな意味が込められているのか、この瞬間に何を考えているのか、それは知るよしもない。
ただ一つ、わかることは、
「――わかった」
エルヴィンは、まるで泣いてしまいそうな顔で、私に対して笑ってくれていた。
カエサルは、小さく黙って頷いた。
エルヴィンが、「すまん、変な質問をして」と頭を下げた。
もちろん私は、「悪いことなんかしてないぜよ」。
夕飯を食べ終え、すこしだけテレビを見て、梅太郎が勧めてくれた音楽を聞き、いつの間にかおやすみの時間がやってきて、
私は梅太郎に対し、お誘いのメールを打ち込んでいた。「送信」ボタンを押すのに、数分ほどかけてしまったけれど。
さて寝るかと布団に潜って、そのわずか数分後に携帯が震える。とうぜん私は布団をふっとばし、机の上の眼鏡をふん捕まえ、充電中だった携帯を床から大急ぎで回収して、暗がりの中で淡く光る携帯の画面を目にし、

私は、興奮と上機嫌に飲まれたまま、布団の中で横になった。ぜんぜん寝付けなかった。

――――

嘘みたいだなと、思う。

元はといえばひとりぼっちだったはずなのに、それが今となっては昔の話だ。現在の自分には、頼もしい男が支えてくれていて、かけがえの無い仲間も出来て――大切な人と、巡り合うことが出来た。

ほんとう、よくここまで歩めたと思う。

たぶん、グレなかったからだと思う。

剣道に導いてくれた坂本龍馬には、感謝するしかない。坂本龍馬のような剣士になりたくて、ハートを鍛えたくて、自分は剣道を始めたのだ。

せめて道を踏み外さないように生きてきたからこそ、赤木は自分に対して声をかけてくれたのだと思う。見当違いの考察だとしても、自分はそう信じている。

穏やかに、溜息をこぼす。

時計を見る。

現在は八時半。大洗公園前で、青井はおりょうのことを待ち続けている。

口元がつい緩んでしまうのは、おりょうと「ふたりきり」で今日一日を過ごすからだ。いわゆるデートというやつだ。

もちろん、デートなんてものはやったことがない。一生、体験しないものだと思い込んでいた。

だからこそ、嘘みたいだなと思う。

時計を見る。

八時三十二分。集合時間である九時まで、あと二十分近くもある。

とてつもなく永い。まるで、年単位の我慢を強いられている気がする。

動く時計の針を見て、「もうちょっと早く動いてくれ」と強く思う。

車も人の気も無いものだから、針の音が鮮明に聞こえてくる。

けれど、退屈なんてちっとも思わない。

あと数十分ほど経てば、世界ががらっと変わってしまうのだ。それも、自分が望んだ形で。
だから、両足なんて右往左往に動き回っていたし、頭の中では「僕とおりょうの幸せな日々」が二時間前からずっと放送中だ。完全に浮かれていた。
――でも、まあ、
今日一日は、何としてでもおりょうを笑わせたいと思っている。いまの彼女に必要なのは、義務でも使命でもなく、遊びだ。
この決意だけは、何としてでも果たさなければならない。
だって自分は、坂本龍馬を目指す男なのだから。
「おお、梅太郎！　はやい、はやいぜよ！」
聞き逃すはずがない。
両足は止まり、顔はぐきりと動いて、本能のまま「やあ」と笑ってみせて、
おりょうの私服姿に、青井の自意識なんてものは硬直してしまっていた。
「あ、あはは……雑誌を読んで、自分なりに決めてきたぜよ。ど、どう？」
ちょこちょこと近づいてきて、気弱そうに上目遣い。そして水色のトップスに純白のフレアスカート、黒いサンダルに小刀の銀色首飾りが、青井の視界めがけ一斉に飛び込んでくる。
もうだめだった。これ以上のダンマリは無用だった。
だから、
「お、おりょうさんっ」
「あ、はい！」
「……か、かわいいよ、凄くかわいいっ。絶対かわいいっ」
「お、おお」
「え、えと……最高にかわいいよ！」
「そ、それ以上言わないでほしいぜよ、しんでしまうぅ」
おりょうが、縮こまるようにうつむいてしまった。
青井が「ああごめんなさいごめんなさい」とテンパり、おりょうが

「いやいや謝らなくてもいいぜよ」と両手をあたふた動かす。そうして「あー」とか「うう」とか「そのー」としか言えなくなって、しばらくはセミの合唱のみが響き渡る。
「――お、おりょうさん」
そして、先手をとったのは青井だった。
不安混じりの顔をしていたおりょうが、縋るように青井のことを見つめはじめる。
「今日は、誘ってくれてありがとう。ほんとうに嬉しいよ、ほんとうに」
「あ……いや、その。突然……で、で、でーとに誘って、申し訳ないぜよ……」
「いやいや、いいんだよ。僕もしたかったし」
「えっ」
素で本音を漏らして、まずは青井が「ぼん」と赤面した。続いておりょうが、またしても首を下げてしまった。
まばたきを数回、沈黙を数秒ほど。青井は、「っし」と気合を再注入し、
「おりょうさん」
「あっ」
「……今日は、たくさん遊ぼう。せっかくの休日だからね」
気の利いた言葉など、思いつくことが出来なかった。
けれど、おりょうは「うん」と笑ってくれた。
□
デートといっても、特にこれといったプランは存在しない。目についた店に入っては品物を物色し、あれやこれやと感想を言い合う。ほかにもスイーツ店に寄っていっては、店員から「カップル料金になります」と言われて青井とおりょうは大赤面。けれど否定することなく、まごまごとスイーツを味わったのは良い思い出だ。
食べ終えた後も、デートは続く。
どうしようかなと学園艦を歩き回っていると、なんと偶然にも映画館が目に止まった。目で「どうする？」と聞いて、おりょうもまた無

言で頷いて、大ヒット放映中らしい「恋と戦車」を見てみることにする。
久々に映画を見る高揚感と、おりょうと二人きりという緊張感のお陰で、体の調子は最高に良い。
――そして、映画が始まった。
放映されて数十分後、主人公とヒロインを引き裂く困難がやってくる。青井は「ぐぐぐ」と歯を食いしばり、隣からは「おのれえ」という反応が静かに届く。
更に数十分後、主人公はヒロインを抱きしめ、決して離れないと誓い合う。これには沈黙の興奮を示すほかなく、ちらりと隣を覗ってみれば、おりょうと目が合った。
逃げた。
逃げはしたが、己が視界はおりょうめがけゆっくり、ゆっくりと傾いていく。そうしてまた、おりょうと視線が合って――互いに、くすりと笑ってしまった。
『どんな困難があっても、どんな理不尽が襲いかかってきても、僕は君を守る』
青井はそっと、おりょうの手を軽く握りしめた。
びくりと、おりょうの体が震える。けれども、おりょうの驚きはそれでおしまい。
おりょうが手のひらを返して、青井の手を握り返してくれた。
『君の世界を、誰にも奪わせはしない』
おりょうの手はとても小さくて、温かくて、女の子だった。
大洗学園艦に、もう後はない。ここで大洗戦車道が負けてしまえば、おりょうと出会えたこの世界は消えてなくなってしまう。
――けれど、おりょうは女の子だ
だからせめて、こうしておりょうのことを支えよう。負けないで欲しいけれど、負けたら彼女を抱きしめよう。勝ったら、
『僕は、君のことが――』
思い切って、抱きしめよう。
――映画が終わるまで、ずっとずっと、青井とおりょうの手は一緒

だった。
□
恋愛映画を見終えて、意識はすっかりおりょう一色だった。
おりょうとは横並びで映画館から出たのだが、かれこれ数十回ほど、視線と視線とが重なり合っている。決して悪い空気ではないものの、かなり心臓に負担がかかっていた。
けれど、このもどかしさもまた、デートの醍醐味なのかもしれない。
「次はどこへ行こうか」
「うーん……じゃあ、最後は本屋へ行ってみるぜよ」
「賛成」
心の底から、くすりと笑ってしまう。
青井とおりょうは、歴史のことが好きだ。だからこそ、帰るべき場所は本屋と相場で決まっているのだ。
空はもう黄色い。あと数時間もすれば、星が見え始めるだろう。
それまではせめて、おりょうを楽しませよう。ふつうの女の子として、ありったけ笑わせよう。
結ばれなくてもいい、これは僕の本心だ。
――そうして、沈黙したままで歩道を進んでいく。先程までは幕末の話、大河ドラマについて、流行りの音楽も語り合っていたはずなのに。
これも、恋愛映画の影響なのだろうか。流石は、大ヒット放映中だけはある。
何事もなく歩いていって、車が通りがかって、三人組の女子グループとすれ違って、指にぬくもりが生じて、
「あっ」
ろくな声なんて、出てこなかったと思う。
自分の隣で歩いていたおりょうが、青井の人差し指を、そして中指を、そっと握ったのだ。うつむいたままで。
そしてそっと、横目で青井のことを伺う。
何かに恐れているかのような、そんな顔をされてしまったら――青井は、坂本龍馬を目指している男は、おりょうの手をぎゅっと握り返

す。
映画館と同じような現実が、また返ってきた。
ただあの時と違って、青井とおりょうは素で手と手を取り合っている。映画という魔力を用いることなく、ただの男女として触れ合っていた。
「……おりょうさん」
「うん」
「好きだよ」
「うん、私も」
「ぜんぶ、好きだよ」
「私も、梅太郎の全てが好きぜよ」
「ありがとう。この世界が消えても、僕は君を追い続けるよ」
「うん……でも、負けるつもりはないぜよ。だってここは、梅太郎と出会えた世界だから」
「そうか、そうだよね」
「うん」
――本屋へ寄っても、本を探している最中でも、シェアハウスへ送り届ける時も、僕とおりょうはずっとずっと寄り添っていた。ずっと。
満天の星空を背にしながら、僕はひとり、大洗公園のベンチに腰掛けていた。
寮に帰ってしまったら、この日の残り香が消えてしまいそうな気がしたから。言葉にしたくないこの余韻に、ずっとずっと浸っていたかったから。
少しだけ涼しい空気に抱かれながら、何もない地面を見つめながらで、心の底から思う。
歴史は、そんな人を見捨てないはずだ。目には見えないそれに、願いを込める。
――
すっかり見慣れた定食屋へ入店して、店員からは「お、また来てくれたのかい？」「ええ、まあ」。

それぞれが席について、カエサルは思い切っていくら丼を注文する。同時に殺到し始める視線。
そりゃそうかと、苦笑してしまう。何せ千円近くするのだ、そんな顔をされるのもしごく当然といえよう。
「まあ、いいじゃないか」
カエサルは、あくまで腕を組みながら、
「決戦が近いんだ。こういう時くらい、うまい飯を食べておかないとな」
からっからと笑う、言ってやる。
――それを聞いた左衛門佐は、エルヴィンは、赤木は、ぽかんと口を開けて、
「店員さん、いくら丼お願いします」
「お願いします！」
「私も！」
「あいよー！」
そういうことになった。
「さて」
いくら丼がやってくるまでの間、左衛門佐が両腕を組み始める。そうして人差し指を上下に動かし始めるが、どこか忙しない。
赤木も、その隣に座るエルヴィンも、注文してからは沈黙を保ち続けたままだ。
まあ、そりゃそうかとカエサルは思う。
ルームメイトの一人が、朝一からデートに走っていってしまったのだ。しかも、皆がよく知っている友人がデート相手ときた。
こんなの、めちゃくちゃ心配してしまうに決まっている。左衛門佐はすっかり両目をつむってしまっているし、赤木は遠い目をして頬杖をついたきり。エルヴィンは、小さく溜息をついていた。
「……おいおい、お前ら」
一同が、力なくカエサルの方を見る。
「あいつらなら、上手くやるさ。散々見てきただろう？　二人の歴史は」

「まあなー」
左衛門佐が、ぼうっとした目つきで天井を眺めている。気になって気になって仕方がないのだろう、幸せになって欲しいと願っているのだろう。
――私は、真正面に座る二人のことを見る。
「確かに、あの二人は親密になっているからな。たぶん、上手くいくと思う」
「俺もそう思う」
エルヴィンが、無感情な横目で赤木を見つめ、
「――いいのか？」
「――ああ」
赤木が、仕切り直すように背筋を伸ばす。
「あの二人はベストマッチしてるよ。そんな二人を否定する奴がいたら、ぜひとも見てみたいね」
ああ――
そうか、認めてしまうのか。追い越された事実を、受け入れられてしまえるのか。
赤木の顔をじっくりと、察せられないように注視する。
赤木は微笑んでいた。まるで、良い夢から醒めたあとのように。
「……そう、だな。私も、そんな奴が居たら見てみたいな」
「だろ？　今頃はきっと、楽しくやってるって」
「うむ。私もそう思う」
左衛門佐が頷く、赤木もへらへら笑う。
エルヴィンは、そっと静かに、口元だけを曲げていた。
そうだな、察しの良いお前のことだ。赤木の恋心なんて、とっくの昔から気づいていただろう。
それを笑って見届けようとしたお前は、ほんとうに強い。恋なんてしたことはないけれど、私には出来そうにもない。
赤木も赤木だ。分かりやすいぐらいおりょうに接していたはずなのに、こうも簡単に友人へ全てを託せるなんて。私にはとても真似できそうにもない。

――なあ、エルヴィン
「お待たせしました、いくら丼四人分です」
「やった！　いただきます！」
「これはうまそうだな……食うべ食うべ」
「うむ。うわー、赤い……？　どうしたカエサル、どうした？」
「……ん、悪い。じゃあ、いただこうか」
私はな、これでも歴女のまとめ役まがいのことをやってきたんだ。こう見えて、人の顔はよく見ているんだぞ。
だから、私は知っている。
お前は中学の頃から、赤木のことばかり見てきたことを。赤木がいるから、秘密のノートをタダ同然で書いたことも、私はよく知っている。
だからこそ、私はエルヴィンに対して「フォロー」を入れたこともあった。エルヴィンに、そして赤木には、文句なしの幸せを得て欲しかったから。
――けれど赤木は、おりょうを選んだ。
だから私は、野暮な行為を自粛することにしたんだ。赤木の意思を尊重したいから、友達だから。
第三者である私ですら苦しかったのに、お前は変わらず赤木と接したよな。おりょうと赤木の間に気まずさが生じた時は、自然とフォローを挟んでくれたよな。
私は、知っていたんだぞ。
「うまいなー」
「ああ、うまい。赤木、一口くれ」
「やだよ」
なあエルヴィン。この「結果」について、お前は「良い」と思っているのか。それとも、悲しんでいるのかい。
私には、わからないよ。
「……カエサル？」
エルヴィンから、声がかかる。
「どうした？」

「いや。何か深刻そうな顔をしていたから」
「あ、ああ。いや、せっかくのいくら丼だし、じっくり観察していただけさ」
「おー、気持ちは分かるぞ。いくらも綺麗だしな」
私は、何事もなかったかのように頷けただろうか。
――今の私に出来ることは、みんなと一緒にいくら丼を食べ合うことだけ。それだけで十分なのだと思う。
あとはお前次第だよ、エルヴィン。
夜になって、ようやくおりょうが帰ってきた。顔を赤く染めて、満天の笑みを浮かばせながら。

――――

あと少しで、高校戦車道全国大会決勝戦が始まる。
青井と赤木、そして芝村と竹下は、花木と笹部は、連絡船を通じて本土にまで行き着き、そのまま会場入りしては観客席に腰をつけた。
特設モニターが、よく見える。
あとは、最初から最後まで試合を見届けるだけだ。それだけで十分だと、青井は断じて思う。
手を腰の上に置いて、抑えきれない心臓の鼓動をそのままに、今は暗転中の特設モニターをじっと見る。
竹下が「どうなるかな」と呟き、芝村が「信じるさ」とだけ。赤木は、何も答えなかった。
すこし時間が経過して、いよいよ客も多くなってきた。大洗学園の生徒はもちろんのこと、他校からやってきたらしい若者、純粋に試合を見届けるつもりでいる年配者、家族連れ、ブラックコーヒーを片手にした青年。会場が、静かに盛り上がっていく。
特設モニターが点火する。「テスト中」というテロップとともに、今は何もない試合会場を映し出す。
深呼吸。
あと少ししたら、後には退けない戦が始まるのだろう。見ているだけの自分すら、体が冷えてくるのを感じる。
当事者であるおりょう達は、どんな気持ちを抱えているのだろう。

怖いのか、高揚しているのか、震えているのか、笑えているのか、想像がつかない。
握りこぶしを作る。目を逸らさないよう、体に力を込める。いつ試合が始まっても良いように、特設モニターからは目を離、
その時、ポケットに入れていた携帯が震えた。
モニターから目を逸らし、焦った手付きで携帯を引っこ抜く。
画面には、「通話：おりょう」の文字。
すぐさま受信ボタンを押す。両手で携帯を構え、耳元に当てる。
「もしもしっ？」
『あ、梅太郎。いまは大丈夫？』
「もちろん。君はいいの？」
『今は平気ぜよ。あと数分もしたら、試合が始まるけれど』
「そっか……」
『ん？　何か声がたくさん聞こえてくるぜよ。いま、どこに？』
「ああ、会場」
見回す。
席はほとんど埋まってしまっていて、右からも左からも雑談がよく聞こえてくる。大洗戦車隊に関しての噂話とか、黒森峰が勝つだろうという予想とか。
そして、赤木と目が合う。
「誰だ？」
「おりょうさん」
「ああ――そっか。話してやりな、青井」
「うん」
デートから帰った後、自分は赤木にメールを入れたのだ。『告白をした、受け入れてくれた』と。
その数秒後に電話がかかってきて、それはもう盛大に祝われた。いやーお似合いだと思ってたんだよーと言われてしまった。
とても恥ずかしかったけれど、友人から、憧れの男からそう称賛されて、僕はすっかり浮かれてしまった。居ても立ってもいられずに、部屋の中をぐるぐる回ったのは記憶に新しい。

そして、赤木は特設モニター「のみ」を見つめ始める。気を遣ってくれているのだろう。
「ああ、ごめんね。赤木君や、その友達も来てるんだ」
『おお、心強いぜよ』
「うん。……その、僕は君を見守ることしかできないけれど、おりょうさんなら未来を切り開けるって信じてる」
『どうして？』
そう、聞かれたら、
「先を見据えた男、坂本龍馬の妻、だから」
『……クサいぜよ』
電話越しに、くすりと笑われる。
『梅太郎』
「うん？」
『ありがとう、愛してるぜよ』
「僕も、愛してる」
その時、電話の向こう側から「そろそろ挨拶が始まるぞー！」という大声が聞こえてきた。
泣いても笑っても、あと少しで全てが始まろうとしている。けれど、おりょうが負けるなんて絵空事はもう見えやしない。
『いってきます、梅太郎！』
「いってらっしゃい！」
電話が切れる。
「……やるじゃん」
モニターを見たままで、赤木が口元を釣り上げる。青井は、「そうかな」と苦笑い。
竹下は「言うねえ」と笑い、芝村は無言で親指を立て、花木と笹部はきゃあきゃあ言っていた。
そうして、選手宣誓が行われる。それを目にしながら、青井は思う。
歴史は、今こそ動き出したはずだと。
そして数時間後、カバさんチームの三突は何がなんでもしぶとく粘り強く生き抜いて、黒森峰の戦車三両を道連れに華々しく散っていっ

た。
それが黒森峰の焦りを誘ったらしく、ここぞばかりに西住みほの戦車が前進――大将機を、討ち取った。
――――
あの激闘から数週間後、いまの大洗学園艦は最高にとてつもなく浮かれきっていた。
右を見れば仮装中の大洗生徒が、左を見ればアイスを片手に持つ他校生が、上を見ればぱんつぁーふぁうすと状の風船が所狭しと暴れまわっている。侘び寂びもへったくれもなかったが、自分も含め、無粋なことなんて誰も言わない。
大洗学園艦学園祭～ダブル廃艦阻止おめでとう！　サイコー！～
つまりは、そういうことだった。
廃艦騒動における当事者の一人である左衛門佐は、後輩同級生先輩にいちゃんねえちゃんじいちゃんばあちゃん他校生が入り乱れる世界を見て、もう笑いなんて止まらない。一生このままでもいいのに、とさえ思う。
ここまでありつくのに、色々と大変だった。
けれど、今となっては良い思い出だ。
「いやー、最高記録じゃないか？　この人数」
「うむ。凄い混んでいるぜよ」
「なー、すっげえよなー」
カエサルが「うむ」と頷く、青井が客引きの勢いに負けてクレープを買っている。おりょうが「うめたろー」と呼びながら、同じくしてクレープを注文する。エルヴィンは「食べすぎるなよー」と歯を見せて笑っている。
赤木はといえば、ハイのままに食べ過ぎたお陰で、トイレへ駆け込み中だ。
「いいものだな、こういうの」
「ああ。学園は守れたし、梅太郎とおりょうはお似合いだし、文句なし！　天下統一！」
そしてそのまま、カエサルとハイタッチ。

ほんとう、全てを守れてよかったと思う。この大洗学園艦という世界がなければ、自分はずっとずっとひとりぼっちだっただろうから。
だから、この場がとても愛おしい。
「にしても」
「うん？」
「あれを見なされ。おりょうと梅太郎ったら、店主から『カップルですかー？』って言われて、舞い上がってらっしゃる」
「ああ。何度も見たぞ、あんな光景」
「私もだ。あー、恋っていいですわねー」
「……ああ、そうだな」
その時だった。カエサルが、溜息混じりの苦笑いを、そっとこぼしたのは。
文化祭には、とても馴染まない表情だった。それ故に、左衛門佐の目と心が奪われる。
「――カエサル？」
「あ、ああ、すまない、気にしないでくれ」
「ああ」
意図は掴めなかった。
それ以上は探らないで欲しいとカエサルも言っているし、切り上げることにする。
「――ところで」
「うん」
「黒森峰との戦い以来、デートしましたっけ？　あの二人」
「いや、してないな。大抵は私達と共に行動しているから」
左衛門佐が、「しめた」とばかりにため息をつく。
「……カエサルさーん」
「はい」
「それって、よくないですよね。相思相愛なのに」
「かもな」
「私としては、もっともっと二人だけの時間を築くべきであると思うッ！　せっかく結ばれたのに！」

「言えてる」
「幸せになるべきだよな！」
「うむ」
左衛門佐が「だから」と歯を見せて笑い、
「――二人きりにしようと思う、今から」
カエサルが、はっはっはと無感情に高笑いし、
「乗った」
すぐさま携帯を引っこ抜き、悪巧みのメールをエルヴィン、赤木めがけ送信する。おりょうと青井に対しては嘘偽りのメールを送り届けて、これにてお膳立ては完了した。
――自然消滅だとか、そういうのは嫌だからな。はやく幸せになってこい。
左衛門佐とカエサルは、その場から全速力で離脱する。それだけのことなのに、何だかすごく楽しい。
□
送信者：左衛門佐
『突然だが、用事を思い出した。私達は一旦帰るが、気にすること無く二人きりで学園祭を楽しんでこい』
こんなメールが、青井の携帯めがけ突如受信された。どうやらおりょうにも同じメールが届いたらしく、呆れたように溜息をついていた。
周囲を見渡すが、先程まで居たはずの歴女メンバーはもうどこにもいない。あっという間過ぎて、「えー」と声が出てしまった。
――どうやら、気を遣ってくれたらしい。
おりょうとのデートなんて、あの日以来から一度も行っていない。何だかんだで、いつものメンバーと行動を共にする毎日を送り続けていた。
「はあ、まったく。あやつらは」
「は、はは……」
確かにデートはした、手も繋げた、告白だってした。だから、これで良いと思っていた。

本音を言えば、もっとデートがしたいとは思っていた。ただ、生来の気弱さのせいで「おりょうと通話」というボタンを押せなかったのだけれど。

溜息が出る。こうしてお膳立てされなければ、自分は何も出来ないというのか。

「それで、どうする？」

「そう、だね」

そうしてデートを重ねないまま、二度目の廃艦騒動が始まってしまった。この時の自分ときたら、「もっとおりょうと遊んでおけばよかった」と後悔しまくったものだ。

けれども、大洗学園艦は今もこうして生き続けている。おりょうと出会えた世界は、今日も海の上で輝いている。

「もしもの三度目」が起こったら、自分はまた「やればよかった」後悔するのか。おりょうのことが好きなくせに、ノリと勢いで誘えもしないのか。いい加減、生来のウンタラカンタラに逃げるのはやめろ。

見上げる。廃艦阻止という看板が目に届く。

ここを守ってくれたのは、大洗戦車隊のみんな、他でもないおりょうだ。それを成すまでに、おりょうはたくさん傷ついただろう、恐怖と戦っていたはずだろう。

そんなおりょうの心を癒やすことこそ、恋人の本領だろう。そう思え、思い込め。

握りこぶしを作る。

僕は、僕は、あの人のようになる。今、この瞬間から。

「おりょうさん」

「ん？」

「一緒に、学園祭を見て回ろう」

手を、差し出す。

「あ、」

「あと、来週の土曜に、予定はある？」

おりょうが、小さく口を開けながらで首を横に振るう。

「もし、君がよければ……僕と一緒に、デートしてください。君が楽し

めるように、プランも組み立てます」
永遠のような沈黙が、訪れた気がした。
おりょうの表情が、無音になる。言葉というものが、消えてなくなっていく。聞こえるものは、学園祭だけ。
すがるような瞳で見つめられて、自分は目を逸らしたりはしない。ここで逃げてしまえば、ずっと変われないと絶対に思うから。
そうして、永遠が終わりを告げた。
おりょうが、たまらず含み笑いをこぼす。うん、うんと、そっとうなずいてくれて、
「――ふつつかものですが、よろしくお願いします」
僕は、うまく笑えたと思う。
おりょうが、そっと手を受け取ってくれた。
「よしッ！　何がなんでも、必ずデートするぜよ！」
「うん。来週だけじゃない、再来週もしよう！」
「どんと来いぜよ！」
声に出してまで、二人で笑ってみせる。通りがかったツインテールの少女が「仲いいな！」と言ってくれたが、まったくもってその通りだ。
見たところ、彼氏連れであるらしい。どうか、幸せに生きて欲しかった。
「じゃ、歩けるまで歩こう」
「うむ。目指せ、全店舗制覇！」
「やろうやろう！」
「うむ！」
その時、繋がれた手に熱が籠もり、
「ずっと一緒ぜよ、龍馬！」
――どんな顔をしてしまっているのか、自分でもわからない
「うん」
「うん」
「……これからも、未来へ共に歩もう。おりょう」
「ああ！」

けれど、ようやくなれたんだ。その名を、否定する気なんてまるでなかったから。
嬉しさとか、喜びとか、みっともなさとか、そういった感情を剥き出しにしたままで、青い空を見る。
いつも仲間に入れてくれてありがとう、カエサルさん。一緒に笑ってくれてありがとう、左衛門佐さん。いつも見守ってくれてありがとう、エルヴィンさん。
――仲間と、おりょうと巡り合わせてくれて、本当にありがとう、赤木君。君は一生の恩人だ。
――僕を選んでくれて、本当に嬉しいよ、おりょうさん。今度は、僕が君を守る。
「……綺麗な空ぜよ」
「おりょうが守ってくれた、空だからね」
頬が、暖かくなった。
みんなが幸せになれる歴史は、ここにあった。それは、みんなが自らの手で勝ち取ったものにほかならない。

松本里子

『梅太郎とおりょうを二人きりにさせたい。協力求む』

トイレの中で、もちろん『いいぜ』と返信した。そうして用を済ませたあと、赤木はなんとなく、『しばらくは一人で歩きたい』。そんなメールを、送った。

歴女チームが、それぞれの返答を返してくる。誰もが快諾をする中、

『わかった。用があったら、いつでも呼んでくれ』

エルヴィンは、そう答えていた。

□

空はまだまだ明るく、人だかりは減ることを知らない。むしろ、人も声も大きくなっている気がする。

店主が「大洗一番のアイスです！」と自慢し、客引きが食べて食べてと誘ってくる。用を足したばかりなので、後で食うと口にして逃げ出す。

道端で弾き語りをしている女子生徒がいて、数人の客が音楽に耳を傾けている。うまいな、と思う。

犬の仮装を身にまとった女子が、子供に対して風船を差し出す。子供は大喜びし、母が「よかったわねえ」と笑う。実に微笑ましい。

ライブ会場から、派手なメタルが問答無用に反響する。観客はサンダース、サンダースと大喜びで連呼して、三本の指を突っ立てていた。後で寄ろうかなと、呟く。

射的をしている、背の高い女性がいる。じっと構えているかと思えば、ものの一発で景品を落としてみせた。彼氏らしい男が、やっぱりすごいなと後ろで喜ぶ。自分も、すげえなと思考する。

歩けど歩けど、笑い合う人々は消えない。皆が皆、幸せそうにやりたいことをやっている。

それでいい。ここは友人が、エルヴィンが、好きな人が守ってくれた世界だ。

なんとなく、しみじみと笑いかけて、

人混みの先に、青井とおりょうがいた。手と手を、繋ぎ合っていた。
ろくに考えもせずに、赤木は近場の出店に駆け寄った。店主から「うどん、食べますか？」と声をかけられた。無機質に「うん」と答えた。無感情に財布を取り出した。
見つからないようにと、強く念じた。察せられないように、ちらりと二人を眺めて――いい顔をしていた――やり過ごした。
――よかったな。
大きく息が漏れた。それは溜息だったのか、安堵によるものなのか、或いは両方だったのかもしれなかった。
間もなくして、「お待たせしました」とうどんを手渡された。お椀を通じて、手がじんわりと温かくなっていった。
味は、しなかった。
うどんを食べ終えた、食器と箸をゴミ回収箱に投げた。そうした後で、なんとなく周囲を見渡した。
青井とおりょうは、もういない。
遠いところへ、行ってしまった。
幸せそうな姿だったからこそ、そう思った。屈託のないふたつの笑顔を目にしたからこそ――終わった。そう、認められた。
空はまだまだ明るかった。人だかりはまだ減らなかった。人も声も大きくなっていった。
笹部の出店を通り過ぎた。宙に風船が舞っていた。『間もなく、大洗学園艦レースが開催されます』の放送が耳に入った。早く観に行こうぜと、男女の仲良しグループが駆けていった。
――しばらく、一人になろう。笑えない奴に、祭りは合わない。
□
送信：赤木
『おりょうさんの件について、話がある。いつでも良いから、大洗公園まで来て欲しい』
送信：エルヴィン
『わかった、すぐに行く』
誰もいない、大洗公園のベンチに腰かける。遠くから小さく音楽が

届いてくるが、大して気にはならない。むしろ、どこか心地よい。
エルヴィンが来るまでの間、赤木はこれまでのことを思い始める。
おりょうと出会って、もう一年半ほどになる。
当時は、その顔を見た瞬間に電撃じみた衝撃を覚えた。最初は何なのかと考えて、すぐに「あ、恋だ」と自覚できた。
運命の出会いを果たしたあとで、赤木はエルヴィンとともに歴史を勉強した。けれどエルヴィンは、「誰かのための趣味なんて、長続きしない」と忠告して――その通りだった。幕末における知識が、頭の中に入ってこなかったのだ。
原因はわかる。常に頭の中で飛び回っている、戦闘機だ。
戦闘機のことは、昔から好きだった。テレビで一目見た時から「乗りてえ」と思うようになって、いつしか世界一のパイロットになりたいという夢を抱き始めたのだ。
そのために、赤木は自発的に訓練を重ねた。航空戦術についても、好き好んで勉強した。戦闘機道に紐付けられているのなら、何だってやった。
だから、大洗航空隊のレギュラーになれたのだと思う。好きという熱意があったからこそ、ここまで成功出来たのだろう。
対して歴史はどうだ。おりょうと話を合わせるためだけに「勉強」して、「頑張って」大河ドラマも視聴し続けた。絶え間なく、空へ逃避したいという欲求を我慢し続けてきた。
何が我慢だ。
そんなものは趣味ではない、嫌々行う宿題と何が違う。エルヴィンが、カエサルが、左衛門佐が、おりょうが、青井が、あれだけ歴史に詳しいのは「好き好んでいるから」こそだ。
聞くだけならいい。短期間なら少々の暗記は利くし、疑問だっておのずと思い浮かぶ。
だが、自分のモノにするとなると話は別だ。それなりの姿勢と、絶えない熱意と、溢れ出んばかりの知的欲求がなければ、決して趣味人にはなれはしない。それは戦闘機道も同じことだ。
だから赤木は、幕末時代から避けられた。おりょうと二人きりにな

れば、ぎくしゃくするばかりだった。
――そして高校二年に進級し、遂に芝村と竹下とは離れ離れになってしまった。
寂しいなあと思いながら、それはそれとして新しい友人を作っていき――青井の姿が、ふと目に入った。
いつも一人でいる青井を見て、なんて寂しそうな顔をしているんだと思った。次に、よく読書をするその姿勢に、デジャブが走った。
あいつに似ている――青井に気づかれないように、自分は青井が読んでいる本の表紙を盗み見た。タイトルは、「坂本竜馬伝」。
思わず、声をかけていた。
だって青井は、自分の友人たちと絶対に気が合いそうだから。特に、おりょうとは良き話し相手になってくれそうだったから。

結果は、大当たりだった。
おりょうの羽織を目にして、青井は大盛り上がり。おりょうもまた、同士を見つけたとばかりに歓喜していた。あの幸せそうな顔は、一生忘れられないだろう。
その日を境に、青井とおりょうは段々と分かり合っていく。
当然だ。青井とおりょうには、幕末と坂本龍馬という共通の趣味があるのだから。互いに性格が穏やかなのもあって、常日頃から笑い合うことも多い。
それを見届けることしかできなかった自分は、いつしかこう思うようになったんだ。
おりょうさんは、やっぱり優しいし可愛い。
青井のことが、とても羨ましい。
二人の関係は留まることを知らず、いつしかデートをするようになった。
おりょうとデート。それは、自分からすれば空よりも高い域に存在するものだ。
それを青井は、半年の付き合いで掴み取ることができたんだ。
――嘘だと思われるかもしれないが、自分は、青井に対して嫉妬や

憎悪は抱かなかった。むしろ、おりょうを幸せにしてくれとさえ思っていた。
だって自分には、それが不可能だから。だって青井は、良い友人だから――おりょうを支えるに相応しい男だと、ずっと前から羨んでいたから。
思うと、結末なんて最初から決まっていたのだと思う。
自分は、おりょうの顔に見惚れた。けれど、おりょうが持つ本質そのものと触れ合うことはできなかった。
青井は、まずはおりょうの「服」を見た。そうしておりょうから感激され、握手を交わして、今後も坂本龍馬と幕末を入り口に通じ合っていった。
自分の目に見えるところで、二人はよく話し、笑い、恥じらっていた。もしかしたら、他では言えない話を告げたこともあるかもしれない。
そうしたプラスが積み重なっていけば、おのずと恋仲にまで進展していくのは当然の流れだ。
納得するしか、ないじゃないか。
先に好きになったからといって、それで結ばれるとは限らない。
後に好きになったからといって、それが遅すぎるとも限らない。
けして捨てられない本質（幕末）のお陰で、愛し合うことがある。
けして捨てられない本質（戦闘機道）のせいで、結ばれないこともある。
こんな自分とおりょうが結ばれるなんて、嘘にもほどがある。自分だってそう思う。
青井とおりょうが結ばれるならば、それは受け入れられるし、「やっぱり」と思う。
音楽が聞こえてくる。
地面を、力なく見る。
坂本龍馬である青井と、おりょうを名乗る野上武子が、愛し合うということは、
――それはどうしようもなく正しい、世界の流れだった。
涙は流さない。そんなことをしたら、青井とおりょうの愛に失礼だ

から。
自分は友人だから、笑って祝おう。この初恋は、いつまでも胸にしまっておこう。
強がりでもなんでもなく、心からそう思って、
「――よ」
声がした。
うつむいていた自分の首が、重く重く持ち上がっていく。
「元気か？」
エルヴィンが、冷静な笑みを浮かばせながらで、手で挨拶をする。
――いつものそれを見て、自然と安堵の息が漏れた。
「……ま、元気といえば元気かな」
「そうか」
そうして、エルヴィンが隣に座り込む。
「で、話っていうのは？」
「ああ――おりょうさんへの片思いは、ここで終わりだ」
「そうか」
予想していたのかもしれない。エルヴィンは、特に驚くこともしなかった。
「おりょうさんは、俺なんかよりも青井が相応しい。あいつなら、おりょうさんを幸せにできる」
「そうだな、私もそう思う」
「……でもまあ、」
思い切り、ベンチに背を預ける。視界に広がるは、夕暮れ模様の夏空。
「正直、ちょっと心が痛いけどね」
「仕方がないさ。……失恋、したんだしな」
「まあな。これ以上の恋なんて出来るのかなって、割と本気で思ってるよ」
「……そんな悲しいこと、言うなよ」
「そうかな」
「そうさ」

それもそうかと、両目をつぶる。
何も見えなくなる。だからこそ、気分が落ち着いていく。
「エルヴィン。お前には、長らく迷惑をかけたな」
「迷惑だなんて、そんな風に考えたことはない」
「そうか、ありがとう。……やっぱり歴史は、聞いているだけの方が良いみたいだ」
「ああ、お前はそれでいい」
「そうだな」
やはりというか、エルヴィンとは口がよく回る。昔からの付き合いというのもあるし、共に空を見続けた仲間でもあるからだ。
エルヴィンがいなければ、今頃は恋に手出しも出来なかったと思う。
「――なあ、赤木」
「うん？」
「お疲れ様。よく、頑張った」
「……ありがとう」
エルヴィンの一言で、体の中に残っていた後悔が抜けていくのを感じる。
すべて、終わらせてくれたのだ。
「なあ」
「うん？」
「何か、悩み事なんかはないか？　俺でよければ、力になる」
だからこそ、今度はエルヴィンの力になるべきだと判断した。
ここまで長らく付き合ってくれたのだ。恩義に応えるのは、友人として当然のことだった。
「――悩み、か」
「……何か、あるのか？」
よっこらせと、姿勢を正す。
そのまま視線をエルヴィンに戻してみれば、エルヴィンはいつもの笑みを浮かばせながら、地面をじっと見つめていた。
「そうだな。悩みというか、なんというか」

「言ってくれ、余計な世話かもしれないけど」
「いや。……今のお前はいっぱいいっぱいだろう？　次の機会にした方が、」
「大丈夫だ」
「――そうか」
　エルヴィンは、うんうんと小さく首を振って、
「そっか」
　ゆっくりと、ゆっくりと、目と目を合わせてゆく。
　軍帽を被り直して、「うん」と頷いて、
「悩み、というのかな。隠し事みたいなものなんだが」
「ああ」
　音楽が止まる。すこし音を立てながら、夏の風が通り過ぎていく。
　簡単には口に出せない話だからなのか、エルヴィンは沈黙したままで、まばたきとともに目線が逸れる。
　けれど、赤木は待った。エルヴィンが言葉にしてくれるその時まで、赤木はエルヴィンの目を見続けた。
　そして、エルヴィンが両目をつぶって、「ふうっ」と息を小さく吐く。
　エルヴィンの両目がそっと開かれて、変わらない笑みを――違う、
「実はな」
「ああ」
「今、とても気になっている男がいるんだ」
　エルヴィンの頬が、少しだけ赤くなっていた。
「――え、それって、もしかして恋バナ？」
「ああ」
「マジ、マジで？」
「マジ」
「マジか……そ、それで、その男ってのは？」
「ああ。そいつはな、」
　エルヴィンは、何の躊躇いもなく、
「凄いがんばり屋さんで、いつでも話を聞いてくれて、少し抜けてるんだけれど恋に一筋で」

「うん」
「戦闘機に乗ったら、凄く格好良くなってしまう奴で」
ちょっと、待って。
どうしてエルヴィンは、思いあたるフシばかりを口にするんだ。
これが、自惚れた勘違いでなければ――
「……ひとりぼっちだった私と、友達になってくれたひと」
ジャズが、はるか遠くから流れてきた。
俺は、どんな顔をしてしまっているのだろう。
喉から声が出てこない、まばたきが止まらない。高校時代、中学時代、小学時代まで、フラッシュバックが続く。
「好きだよ」
エルヴィンは、泣いてしまいそうな笑みを浮かばせている。
「ずっと前から、好きだったんだ」
思う。心の底から思う。
「――お前しか、見ていなかった」
どうしてエルヴィンの、松本の気持ちに気づけなかったんだろう。
こんなにも近くに居たのに――理性が言う。友達として長く付き合っていたからこそ、気づけなかったと。
首を振るう。
そんなのは言い訳だ。
「こんな時に言うのは卑怯だと思う。けれど、お前は一人じゃない、誰かに愛されているという事実を知ってもらいたかったんだ」
「エルヴィン、」
紡ぐべき言葉が思いつかない。呼び求めることしかできない。
けれどエルヴィンは、肩に手を乗せてくれた。
「お前はじゅうぶんに頑張った。だから今度は、思うがままに空を飛び続けてくれ。私は、その背中をずっと追い続けるから」
大きく、力なく息が漏れた。
しばらくはそのままだった。
永遠にも似た時間が、過ぎていったあと、
「ご、」

「ご？」
「ごめん」
　本能の奥底から、言うべき言葉を捻り出す。
「え？」
「ごめん。お前の気持ちに、気づけなくて、本当にごめん……ッ」
「ああ――いい、いいんだ。怖がって、好きって言えなかった私も悪い」
　必死に首を横に振るう。
「おりょうさんしか見ていなかった、俺が悪いんだ。エルヴィンは何も間違ってない」
　頭を下げる、両目を強くつぶる。
「本当に、本当にごめんなさい！」
　怖かった、許して欲しかった。冷静な頭のどこかでは、嫌われても仕方がないという結論に陥っていた。
「いいんだ」
　けれどエルヴィンは、あっさりと許してくれた。
「それだけ一筋だったってことだろう。恋においてはそれが正しい、恋は盲目ともいうしな」
「――エルヴィン」
　親の顔色を伺う子供のように、首をそっと上げる。
　エルヴィンがどんな表情をしているのか、予想ができない。
　――どんくさくて、のろまなこんな自分を、エルヴィンはずっとずっと待ってくれていた。いつもの表情で。
「……なあ」
「ん？」
「本当のことを、言ってもいいんだぞ？」
「言ったさ」
「でも俺は、」
　エルヴィンは、首を左右に振るう。なんでもないように。
「鈍感な自分が許せないんだな？」
　やっぱりエルヴィンは、聡い女の子だと思う。

どうして、心の内を見抜かれるんだろう。自分が分かりやすいだけなのだろうか。
「いいんだよ」
肩を、優しく叩いて、
「初恋だからな、気持ちに余裕なんてできるはずもない。ましてや私とは、友達だから」
手を、乗せたままでいてくれる。
「おりょうの為に、苦手な歴史を頑張って……おりょうの幸せのために、梅太郎に全てを託せたお前に、間違いなんてない」
数少ない理性を振り絞って、赤木は頷く。
「私はな、この一年半を通してな」
エルヴィンが、屈託のない笑顔を浮かばせながら、
「――お前のことが、もっと好きになった」
俺は、声を上げて泣いた。
そんなおれのことを、エルヴィンは抱きしめてくれた。

気づけば、空は嘘みたいに赤かった。
いつの間にか、夕暮れが訪れていたらしい。それでも人の気は感じられず、学校側からは相変わらず賑やかな音楽が奏でられている。
たぶん、文化祭はこれからも続くだろう。きっと、夜まで終わらないはずだ。
今も、隣りに座っているエルヴィンを見つめる。
いつも通りの、考えが読めない笑みを浮かばせてくれて――「さて」、そっと立ち上がる。
「赤木」
「ああ」
「私は、その、恋については素人だが」
「うん」
そうして、エルヴィンが赤木の前に立ち、
「――お前に相応しい女になれるよう、私なりに頑張ってみる」
そっと、手を差し伸ばしてくれた。

「……俺は、何をすればいいのかな？」
「いつも通り、空を飛んでいてくれ」
エルヴィンとの接し方は、これからも変わらないだろう。エルヴィンに対する意識は、がらりと変わってしまったけれど。
愛し方はともかく、愛されかたなんてわからない。けれどエルヴィンが相手なら、きっと、楽しくやっていけると思う。
「さ、赤木。一緒に、学園祭を見て回ろう」
「わかったよ、エルヴィン」
ベンチに座ったまま、その手を確かに握りしめる。
そんな赤木のことを、エルヴィンはそっと引き寄せてくれた。
「なあ、赤木」
「うん？」
「その……昔みたいに、本名呼びでもいいんだからな？」
エルヴィンが軍帽を下げて、目元を隠してしまった。
「わかった、わかったよ。……ただ、あいつらの前だと、違和感っつーのかなー……」
「あ、それは分かる。我らはソウルネームで呼び合う仲だしな……」
少しだけ考えて、すぐに閃きが生じた。
二人だけの大洗公園を見回して、小さく、うんと頷いて、
「じゃあさ」
「ああ」
「二人きりの間は、松本って呼ぶよ。それでいいかな？」
提案を聞いて、エルヴィンが含み笑いを漏らす。
軍帽を被り直して、「ああ」と微笑んで、いつまでもいつまでも自分のことを見つめたまま、
「――それだ」

――

左衛門佐と二人で歩いて、だいぶ時間が経つ。
おりょうと青井は、デートに旅立ってしまった。一方のエルヴィンは、「用事を思い出した」と告げて、全速力でどこかへ行ってしまった。
赤木に、会いに行ったのだろう。

そういった事情があって、左衛門佐と二人きりになったわけだが――うまいうまいと焼きそばを食べたり、ライブに混ざっては一緒にシャウトしたり、左衛門佐が射的で無双したり、店主から殿堂入りを食らったりして、これが意外にも楽しかった。

二人きりということで、話す相手も集中できる。そういった意味では、こういうのも悪くないとカエサルは思う。

その時、携帯が震えた。

なんだろうと、カエサルが携帯を手にする。どうやら左衛門佐にも届いたらしく、なんだなんだと画面を見て、

『用事は済ませた、今どこにいる』

左衛門佐と顔を合わせて、無言で頷きあい、カエサルは『ライブ会場前、ゆっくりでいいぞ』と打ち込んだ。

そうして、射的店からライブ会場前へ移動する。

既に空は夕暮れに染まっているというのに、誰もライブ会場から離れようとはしない。むしろ、午後の魔力を受けて更に盛り上がっている気がする。

そりゃそうか、と思う。

何せダブル廃艦阻止記念と、他校参加上等で出来ているライブなのだ。大洗バンドは浮かれに浮かれて参加しまくっているし、他校からも「大洗連合」の熱を抱いたままで参戦し放題、おまけに生徒会からのお墨付きだ。

ステージ上でギターソロをかますバンドメンバーを見て、正直なところ「やってみたいなあ」と少しだけ思っていたりする。音楽に関する知識は皆無だから、思うだけだけれども。

左衛門佐が、「いいものだ」と両腕を組んでいる。どこか戦場めいて見えるライブ会場とは、相性が良いのだろう。

――そして、カエサルは無言で空を見る。

今ごろ、エルヴィンは何をしているのだろう。赤木とは、どんな話をしているのだろう。

想像はできないが、今は待つことしかできない。

けれど心の何処かでは、「何だかんだで上手くいくだろう」いう確信

めいたものは抱いていた。
何せあの二人は、昔からの付き合いがあって、言いたいことを言い合える仲なのだから。
「おーい」
声がした。
ライブに夢中になっていた左衛門佐の肩を軽く叩き、エルヴィンと――赤木が、学園前の通り道から歩んできて、
「――あ」
エルヴィンは、いつもの微笑をしながら、手をひらひら振るっている。
赤木は、エルヴィンの軍帽を被っていた。とてもいい顔で。
ほらな、うまくいった。
その後は、ライブで騒いだり、飲み食いしたり、おりょうと青井と合流したりして、隅から隅まで学園祭を歩き回った。
ふたりで、何の話をしていたのかは聞かない。
きっと、赤木といい話をしていただろうから。

――

――今週の土曜、暇か？　一緒に遊ばないか？　ふ、二人で
――いいぜ
歴史に関してはどんと来いだが、デートでの決め方はど素人だ。
だから私は、初めて買ったファッション雑誌を片手に、これがいいのかあれがいいのかと苦戦した。規律正しいミリタリーファッションならともかく、自由が利く私服は、正直難しい。
赤木のことだから、どんな服を着ても受け入れてくれるだろう。
しかし私は、「決めたい」と強く思っていた。
私だって、恋する乙女だから。
そうして長いこと時間をかけて、私は秋のコーディネイトを完成させる。茶色系でまとめてみたが、鏡を見て「これが馴染むな」と呟けた。
――そうして、土曜日がやってきた。
目を覚まし、目覚まし時計を見てみれば朝の六時。あまりにも早す

ぎだし、「遠足前かよ」と漏らしながら二度寝――できなかった。
仕方がないのでそのまま起床し、念入りに歯を磨く。徹底的に洗顔し終えては、可能な限り髪のセットを行った。
そして、今日の戦闘服に着替える。
何度も鏡でチェックしたし、カエサルからおりょう、左衛門佐からも「いいじゃん」と評価された。だから、滑っているはずはないと思う。
でも、不安は止まらない。
デートなんて初めてだから、仕方がないと思う。
なんとなく居間のテレビを点けてみれば、戦車道関連のニュースが目に入った。なんでも、世界進出に向けて日本戦車道が力を入れ始めたとか。
そうか、それは良かった。戦車道履修者だから、それはそう思う。
けれど今は、一人の女の子として道を歩かせてくれ。
なんとなく、胸を抑えてみる。
体のうちから飛び出そうなくらい、心臓が跳ね上がっているのが指から伝わってくる。
それを聴けて、安心した。
やっぱり私は、あの人のことが好きなんだな。
午前九時。
カエサルとおりょうと共に朝飯を食べ、服装の最終チェックに付き合ってもらった。結果は「いいぞ」。
そうなれば、後は集合場所である大洗公園へ出向くだけだ。本来なら午前十時に落ち合う予定なのだが、体がぜんぜん落ち着いてくれないし、外の空気も吸いたかった。そして何より、「早く会いたい」という気持ちがどうしても抑えきれなかったのだ。早く行ったところで、意味なんてないのに。
だから私は、玄関に行っては靴を履く。おりょうからは「気をつけて」と言われ、カエサルは「行って来い」とサムズアップ。そんな二人に対し、私は敬礼をした。
じゃあ、行くか。

夢の中にいる左衛門佐を背に、私は引き戸を開けた。
水色模様の晴れ空の下で、私は無言のままで歩く。休日の住宅地は嘘みたいに静かで、人ひとりも会わない。
寂しいな、と思う。
なんだかいいな、と思う。
季節は秋に差し掛かり、服を通じて少しだけ肌寒い。虫の音色はとうに間に消えてしまっていて、改めて夏の終わりを実感する。
四季の中では、夏が一番好きだ。暑いし、長期休みもあるし、遊び時だから。けたたましい虫の音色も、夏にはぴったりの現象だと思う。
けれど、秋もなんとなく良いな、と思う。
こんなにも静かな空気の中で、ふたりきりでデートができるから。
苦笑する。私もなんだかんだで、乙女らしい。
もう少しで大洗公園に着く。改めて時間を確認してみれば、九時十分くらい。
あと四十分、どうしようかな——背筋を伸ばし、そのまま大洗公園へ足を踏み入れ、
ベンチに、赤木が座っていた。
目と目が合い、互いに「あ」が漏れた。
そうして、二人で恥ずかしげに笑ってしまう。
「よ、早いな」
「お前こそ」
「どうしたんだ？　いったい。はやる気持ちが抑えきれずに、そのまま集合地点へハシゴしたとか？」
「あー、お前もそのクチか？」
「まあな」
へらへら笑い合う。
「ああ、そうだ。こういう時はあれを言うべきだな」
「あれ？」
私はきっと、いつも通りの顔が出来ていると思う。
「早く来たんだな、お前。気を遣わせたか？」

「ああ――いや、いま来たとこ」
ハイタッチ。
「そうそう、これ一度やってみたかったんだよな」
「俺も俺も。これをまさかなあ、お前に言うなんてなあ」
「分からないものだな、歴史というものは」
「そうだな」
そして赤木が、ゆっくりと立ち上がる。
「エルヴィン……いや、松本」
「ん？」
そうして赤木が、私の足から顔までを伺う。
――やめて欲しい、とは思う。どうなんだろう、と不安になる。
視線なんてすっかり逸らしてしまっているし、顔だってきっと赤いはずだ。いつも通りじゃない姿を見られるだけで、こうも恥ずかしくなるなんて。
やっぱり私は、赤木のことが、
「お前」
「あ、ああ」
「似合ってる、すごく」
「そ、そうか？」
「ああ、凄く似合ってる。……嬉しいわ、とても」
「――そっか！」
「んわっ」
やっぱり私は、赤木のことを好きになれて良かった。
無理やり腕を組み、強がりの笑いを浮かべてみせる。不意打ちを食らった赤木は、みっともない顔になってしまっていたが、
「……じゃ、じゃあ、行こうか」
「ああ」
「松本、」
「うん」
「……さ、里子」
今度は、私が不意打ちを受けた。

なんて、ずるい男なんだ。
いまの私の顔なんて、みっともなくなってしまっているはず。
「――攻めてきたな」
「いいじゃねえか別に、俺らそういう仲だろ」
「ふふ」
けれど、これでいいと思った。
「じゃあ、まずは……映画館にでも行くか。何やってたっけ？」
「なんだっけ……お、戦争映画があるな」
「じゃ、それを見にいってみるか」
「そーすっか」
私と赤木は、こんな感じだから。たぶんずっと。
腕はそのままに、私達は映画館へ歩んでいく。

――――

たまたまテレビで見た戦争映画が、とてつもなくカッコ良かった。そうして熱も冷めないうちに、戦争漫画が読みたいと親にねだったのである。
九歳になって、初めて趣味らしい趣味を抱えた瞬間であった。
漫画と指定したのは、まずは基礎から学ぼうとしたからだ。家に居る時はもちろん、学校の休み時間でも、寝る前においても、戦争漫画ばかり読んで――いつしか、もっと濃い本が欲しくなった。
そうして、資料という名の歴史書に手を出す。ページを開けば字がいっぱいで、思わず口元がへの字に曲がってしまう。
最初こそ「これ読めるかな」と怯んでいたものだが、目を通してみるとあっさり過去の世界へ引き寄せられ、飛び込んでいた。知的欲求とは、何物にも勝ると実感したものだ。
そうして私は、時間という時間を趣味に費やした。元々引っ込み思案だった私に友達なんていなかったから、いよいよもってミリタリーに没頭し尽くせた。
――ひとりぼっちでも、趣味に生きれれば大丈夫。本気で、そう考えながら。
そうして、季節は春から夏に変わる。

小学生にとっての夏とは、花火にプールに夏休みだ。教室はすっかり夏休みムードに染まっていて、旅行に行く、一緒に遊ぼうぜ、花火大会、海――それらの話題が、私の前を通り過ぎていく。

本を読んでいる私のことを、誰も相手にはしない。何度か「なんて本？」と聞かれたこともあったが、内容を見せれば「へえ……」と言ったきりバイバイ。友達なんて一人もいなかったが、まあいいやと思っていた。

そのまま家について、半袖姿の母が「おかえり」と迎えに来てくれた。私は無表情のままで、「ただいま」とだけ。

――そうして、母は「あついわねー」と屈託なく笑いながら、

ねえ里子。もう少しで夏休みだけれど、友達とどこかに行く予定とかはある？

当たり前のように聞かれた時、私はすぐには答えられなかった。

ない――そう答えようとした瞬間に、私の奥底からどうしようもない寂しさと、抗えない痛みと、どうしようもない後悔が音もなく湧いた。

結局、答えることなんてできなくて、

母は、笑って察してくれながら、

ねえ、行きたい場所とかはある？　戦車の博物館とか、見にいかない？

私は、母の血を継いでいる。だから私も、母の心の内を察してしまえた。

――そんな寂しそうに、笑わないで。

人と話そうとしなければ、人とは触れ合えない。人と話さなければ、口の動かし方を忘れてしまう。「私なんて」と思っていても、教室から聞こえてくる「放課後の予定」をつい羨んでしまう。

そんな悪循環に絡まれながら、私は小学六年まで生き抜いてきた。

ここまで来れたのも、趣味の世界があったから、親が優しかったからだと思う。

クラス替えが行われ、教師も変わったが、やれることは何一つ変わ

らない。勉強に読書、そして友人同士の雑談に耳を傾けるだけだ。
一生このままなんじゃないかなと、本気で思う。
変わりたいなと、心の底から想う。
どうやったら、友達ができるんだろう。昔は、仲良しの子もいたはずなんだけれどな。
――机の上に置かれた本を見て、私は首を左右に振るう。
この趣味をはじめて、私は集中力が増した。成績が上がるにつれて、親から本を買ってもらえるから、おのずと成績も伸びた。読書感想文にいたっては、独走状態だ。
だから、この趣味を始めたことに後悔なんてしていない。はじめて良かったと思っている。
そうして夏が訪れて、六度目の夏休みブームに差し掛かった頃。クラスで席替えが行われた。
その時に、赤木という男子と隣同士になった。常に友人に囲まれ、「戦闘機道に入りたくて」が口癖の、いたって健全な人気者だ。
――戦闘機道か。
ミリタリー好きとしては、決して聞き逃がせない単語だ。けれど私と赤木は他人同士、絡まれても困るだけだろう。
「隣同士か、よろしくな」
「ああ、よろしく」
だから、挨拶を交わしてそれきり。
そう割り切っていたはずなのに――私はやっぱり、隣から聞こえてくる賑やかさに憧れを抱いてしまう。
夏休みの予定を、当たり前のように組めているのがとても羨ましい。冗談交じりの悪口を言い合える仲に、どうしようもない憧れを覚える。海とか、航空ショーとか、家へ泊まり込みとか、絶えることのないプランを耳にして胸が痛くなる。
人が、とてつもなく恋しかったのだろう。だから私は、思わず隣の席を覗って、
「――あ」
「あ」

目が合った。
たぶん、時間が止まったかと思う。
そして私は、逃げるようにして本を読み始めた。
――溜息が出る。
やっぱり私は、ずっとこのままなのかもしれない。
□
夏休み明け初日という地獄の中で、私はすごいものを見た。
自由研究発表会が開催されて、誰しもが普遍的なテーマを発表していく中で、
「――俺は、戦闘機道を絶対に履修します」
赤木は、黒板を覆うレポート用紙を背にしながら、最初から最後まで戦闘機について語ってみせた。
クラスメートがやんややんやと称賛して、教師が「素晴らしくまとまっています。宿題は少し多目に見てあげます」と評価する中――私は無言のまま、いつの間にか前のめりになっていた。
戦闘機というミリタリーの象徴を、長々と熱く語られてしまったのだ。とうぜん一語一句たりとも聞き逃さなかったし、一方的に「ライバル視」したりもした。こっちも、似たようなテーマで自由研究をまとめてきたからだ。
生まれてはじめて、闘争本能に火が点いた気がした。
間もなく赤木が撤収し、隣の席につく。心の中で「すごかったぞ」と言い、
「どうだった？」
不意打ちだった。
隣に座っているから、そう聞くのは自然の成り行きかもしれない。趣味だって把握しているだろうから、「専門家から見てどう？」という疑問もあったのかもしれない。
――でも、どうして、そんなにも嬉しそうな顔をするの
呼吸を整える。出来ているかもわからないポーカーフェイスのまま、私は、
「良かったと思う、素晴らしかった」

そしてまた、赤木がわかりやすく喜んだ。
それだけのことなのに、自分は、赤木という男が頭から離れられなくなる。
「次、松本さん、お願いします」
教師の声に、びくりと体が震える。
次は、自分だったか。
――ちらりと、上機嫌そうな赤木のことを伺う。
あんなにも素晴らしいテーマを見せてくれて、本当にありがとう。
けれど、私の方もすごいんだぞ。
だから、聞いてくれ。
堂々と席から立って、ランドセルから丸めた紙を「引っこ抜く」。誰もが「何あれ」と注目する中、私はよどみ無く黒板まで歩いていって、無感情な手つきで紙を広げていき、紙の端を手持ちのマグネットで固定した。
クラスメートの前に立ち、すうっと息を吸って、
「ドイツの戦史について、研究してきました」
あくまで顔には出さないように、それでも興奮を隠しきれないままで、私はごく淡々と自由研究を発表していく。
まずはドイツへ旅行しに行ったエピソードから語り始め、次にドイツの町並みについての感想を、そして戦車博物館へ出向いた時の感動を口にして、現地でドイツの戦史について研究したことも述べた。
皆に聞いてもらえるように、なるだけ専門用語は避けたつもりだったが――それが功を成したらしく、いくつかの質問が飛んできたことは非常に嬉しかった。教師からドイツの町並みについて問われた時は、「勝った」とすら思った。
――そして何よりも、赤木が私のことを注目してくれているのが、なぜだか一番喜ばしかった。
だから最後まで、いい気分で語り終えられたのだと思う。
「――戦史は学ぶと、とても面白いです。以上、聞いてくださりありがとうございました」
そう締めてみせて――何事もなかったかのように自由研究のレ

ポートを丸め、何事もなかったかのように赤木の隣の席へ凱旋した。
容赦の無い拍手を受けながら、
「……すげえな」
「えっ」
理屈抜きの、あまりにもストレートな称賛を至近距離から受けて、私は言葉を見失った。
驚いているような、喜んでいるような、何ともいえない真顔を向けられて、私はどうしようもなくなってしまっていた。こんな私に対して、赤木はじっと私のことを見つめている。
恥ずかしかった。けれど、とてつもなく心が躍った。だって、だって、自分の趣味を受け入れてくれたから。
呼吸。
そんな赤木の気持ちを、「すげえ」という一言を、決して無碍にはしたくなかった。
――だから、
「……そ、そうか？　まあ、その……えと、ありがとう」
言えた。
――この瞬間から、赤木のことがとても気になり始めた。
だって赤木は、絶対にいい男の子だから。
□
自由研究発表会が終わり、休憩時間がやってくる。
待ってましたとばかりに数人のクラスメートが直立し、自然と仲良しグループが構成されていく。私は相変わらず読書だ、今回のタイトルは「初心者にもわかるドイツ語」。
間もなくして、隣の席も賑やかになっていく。赤木の友人である竹下と、芝村がふらりと寄ってきたのだ。
「赤木どした、そんなシケた顔して」
「いや何でも。にしてもどうだったよ、俺の渾身の一発は」
「いやー、お前ってホント戦闘機道好きだよな。そりゃ俺も戦闘機道目指そうかなって思ってるけど、ありゃ凄いわ」
「だろ？」

「でもさ、ちゃんと宿題はしろよ。お前、去年もそうだったじゃないか」
「いやーごめんなーすまねえなー、来年は絶対に終わらせるから」
「俺に泣きついてくるなよ」
「えー芝村ぁー」
正しすぎる友人同士の会話っぷりに、溜息が漏れる。
芝村が的確な指摘を下し、竹下がおちょくり、赤木がやめろやめろと笑う。隣でそんな風に青春をやられてしまっては、無表情のフリをするしかないじゃないか。
本に集中しようとしても、外界からの声は決して拒めない。全力で現実逃避を行おうとしても、寂しさという感情からは逃れられない。
溜息が漏れる。
赤木とは一瞬だけ分かりあえた気がしたからこそ、余計に孤独感が大きい。
かといって、男三人の会話に女が混ざるのもどうかと思う。いきなり混ざろうとしても困惑するだけだろうから、ここは大人しくしておいた方が、
「さっきの、松本さんの自由研究、すごかったな」
聞き逃さない。体が、思わずびくりと動いてしまった。
「なー、あれは凄かったよな。お前の自由研究も良かったけど、松本に全部かっさらわれたな」
「それは思う」
思わず、赤木の方を見てしまう。
そうか、竹下も赤木もそういうふうに評価してくれるのか。趣味を否定されないというだけで、笑ってしまいそうになる。
「すげえなまつも……っと、読書中か。邪魔しちゃ悪いな」
「ああ」
「あっ」
怯んだ声が、口から出た。
――べつに、いいのに。
私の中から、勇気が湧いてこない。何て返せばいいのか、思いつく

ことができない。こういう時に何といえばいいのか、私にはわからなかった。
「しかしドイツかー。まあ確かに、あっこも戦闘機道の本場みてーな場所だよな」
「ああ。そこと連携している黒森峰は、時々ドイツと練習試合を行って、互いを高めあっているみたいだしな」
心の底から、話に混ざりたいと思う。
戦闘機道事情はそれほど詳しくはないが、興味自体はある。どんな戦闘機を使っているのか、チームによってはガラリと戦術が変わってしまうのか、どんな奴が戦闘機道を履修するのか――考えただけで、知りたくなってきた。
その後も、黒森峰戦闘航空大隊に関しての考察や感想が述べられていく。曰く、戦力が尋常じゃない。曰く、レポートが詳細である――なるほど、非常に生真面目そうな隊だ。だから、強豪としてぶいぶい言わせているのか。
――思う。
赤木はきっと、戦闘機道を履修するのだろう。その時がきたら、ぜひとも黒戦をやっつけて欲しい。これはクラスメートの、ささやかな励ましだ。
静かに、両肩で息をする。そして、竹下が苦笑いをこぼして、
「ドイツの学園艦のオフィシャルサイト見たけど、何て書いてあるかわっかんねーわ」
エルヴィンの目が、意識的にまばたきした。
「あっこのサイトが見られれば、強くなるヒントがあるかもしれないんだけどなあ」
「練習試合についてのレポートはあるだろうよ」
「ドイツって真面目なイメージがあるもんな」
ドイツの学園艦なのだから、言語も文面もドイツ語で仕上がっているはずだ。だから、普通の小学生ならばドイツ語の解析なんて不可能にも程があるだろう。
普通の、小学生なら。

「……なあ」
「あっ？」
さきほどの雑談よりも、はっきりと聞こえてくる赤木の声。
まさか、と思った。
あえて「初心者にもわかるドイツ語」を隠さないまま、ゆっくり、ゆっくりと、赤木へ視線を向けていって、赤木は私のことをしっかり見つめていて、
どきりとした。
他人から、こんなふうに見られたのなんて、何年ぶりだったか――
「あー、悪い。実は、用があって……いいか？」
いいに決まってる。
「な、何だ？」
「これ。このサイト、ドイツの学園艦のオフィシャルサイトなんだけれど……読める？」
赤木から、携帯をこっそりと見せられる。
私は二度、三度ほどまばたきをして、そうして手持ちの本とサイトを見比べてみて、気持ちを整えるために「そう、だな」と呟いて、
「……貸してもらって、いいか？」
「もちろん」
読めるかなと心配したが、思った以上に文面が読めてしまい、理解も出来てしまった。元はと言えば翻訳されていない専門書を解読する為に、日夜ドイツ語を勉強していたのだが――やはり、知的欲求に勝るものはないらしい。
まずは学校のモットーを読み、赤木が「マジかよ」と歓喜する。一発で上機嫌になった私は、校長先生の名前を呟いてみせては「うおおすげええ」と喜ばれてしまった。
熱が冷めないうちに、私はドイツ戦闘機道オフィシャルページへ潜り込む。戦闘機の画像と、履修者が全員集合している画像が目に入り、得意げに「これだな」の一言。
赤木と竹下が、止まらない笑みを露わにする。寡黙な芝村も、「さすがだ」と言ってくれた。

まさか、こんなところで趣味が活かされるなんて。
歴史の流れって、ほんとうにわからないな。
そうしてレポートを読み終え、三人からは礼を言われた。気づけばチャイムが鳴っていたが、これほど短く感じられる休み時間は久々だと思う。
たぶん、自分は笑えたままなのだろう。そしてそのまま、隣で座っている赤木のことを見つめ、
近かった。
携帯を覗き見る都合上、こんなふうになっていたらしい。
「……！　あ、ち、近っ」
「うわっとと悪い悪い」
でも、なぜだか、私の上機嫌は、決して冷めることはなかった。
□
「松本さん」
今日も一人で、給食を口にしよう。そう思っていたのに、
「な、なに？」
まるでいつもの調子で、赤木から声をかけられた。
その表情は、ずいぶんと明るい。私は、あっけにとられたまま。
「一緒に食わね？」
「――え」
「駄目かな？」
自然と、頭を左右に振るっていた。
振るえて、いた。
「い、いや、そういうわけじゃないが」
「よし決定。いやなに、さっきは大奮闘してくれたからさ、お礼にプリンでもあげようかなって思って」
恐らくは、解読作業のことを口にしているのだろう。
確かにあれは、赤木からすれば非常に大きな出来事、だとは思う。
けれど、「あれぐらい」で自分を誘ってくれるものだろうか。私とは、それほど話したことも無いというのに。こんなにも、無表情が多い人間なのに。

だから私は、「いいのか？」と躊躇する。そして赤木は、からっと笑って、
「当然だろ？　なあ？」
向こう側の席に座っている竹下と芝村に対し、軽いノリで声をかける。竹下も芝村も、その通りだとばかりに頷いた。
それに対して、私はそっとうつむいてしまう。一人のみならず、三人からも受け入れられてしまったという事実に、一種の恥ずかしさと高揚感を抱えてしまったからだ。
どんな顔を、してしまっているんだろう。それすらも分からない。
だから私は、ぐっと表情を取り繕って、そっと顔を上げ、じっと赤木の目を見た。
「じゃあ、よろしく」
「もちろん。これからもよろしくな」
「――え」
ごく普通に、赤木は手を差し出す。私の目と口が、力なく開いてしまった。
対して赤木は、自信満々そうに自分のポケットを小突いて、
「一緒に盛り上がれたじゃん。だから、これからもよろしくな」
たぶん、忘れられないと思う。この時に見せてくれた、赤木の嬉しそうな笑顔のことを。
――そうか。
顔がうつむいていく、胸がじんわりと痛くなる。余韻めいた感情が、体の中で膨らんでいく。
たぶん、嬉しくて嬉しくて仕方がないから、こんなふうになってしまっているのだと思う。
「そっか」
それを理解できた時、こんな言葉が漏れた。
もう、無意味に恐れたりはしない。相手はあの赤木なのだ、私のレポートに対して「すげえ」と言ってくれた、ほかでもない赤木なのだ。
だから、疑う必要もない。だからこそ、怯える理由なんて無い。それを自覚できたから、私は、

「そっか」
はっきりと、こう言えたんだ。
「わかった。じゃあ、一緒に昼を共にしよう」
「そうこなくっちゃ」
こうして、手と手が一つになった。
赤木と竹下、芝村と昼食をとるために、私は机を運搬しようとして
――赤木が手伝ってくれたり、お礼のプリンを献上されたり、ドイツ語レポート解読班に就任したりして、いつも以上に色々なことがあった。久々に、昼食中に笑いきったと思う。
竹下も芝村も赤木も、こんな私の話し相手になってくれる。いつの間にか友達扱いされていることが、どうしようもないくらい嬉しかった。
――思う、心の底から想う。
「赤木」
「ん？」
「――ありがとう」
私の隣に、いてくれて。
□
きりつ、れい、さようなら―
放課後が訪れれば、教室というものはただのフリースペースと化す。松山と花島というクラスメートは、いつも通りに一緒に帰っていったし、梅沢は桜木に対して「今日はお前んちに寄っていいか？」と即席の約束を取り付けている。蒲池と草加は、夏休み中の思い出に花を咲かせていた。
――それらを耳にしながら、私は淡々とランドセルを背負う。
今までは、無表情に「それら」を欲しがったままで、一人で帰宅していた。
けれど今は、気分が良いままで帰れそうだ。何せ私には、友達ができたのだから。
ランドセルを背負い直し、「さて」の一声で、廊下に出て、
「松本」

呼び止められて、思わず体が震える。
誰――ほっとする。廊下で佇んでいた赤木が、手で挨拶をした。
「これから帰り？」
「あ、ああ」
「じゃあ、一緒に帰らね？」
「え？」
赤木が、力なく両手を曲げて、
「芝村と竹下とは、家が逆でさー」
「ああ、なるほど」
「だから、お前と帰ろうかなって思って」
私は小学生だ。けれど、「男女でふたりきり」というモノはよく理解しているつもりだ。
赤木は、軽いノリで私に笑いかけている。私は「えーと」とか「うーんと」とか、言い訳じみた唸り声を上げながらも、
「……わ、私はその、面白い話ができるかどうか」
「え、できるじゃん」
私の意識が、きょとんとなる。
「自由研究は凄く面白かったし、フツーに竹下や芝村とも話してたじゃん。だからへーキへーキ」
「で、でも」
「それに、」
赤木は何でもないように、頭を軽く掻いてみせて、そして、
「わからないことがあったら、お前はちゃんと教えてくれるじゃん。だから、お前が面白くないなんてことはないっ」
私は趣味に没頭したまま、今日という日まで生き抜いてきた。そのことを悔やんではいないし、むしろ誇りにさえ思っている。
だから、だからこそ、ここまで肯定されることが、もうどうしようもないくらいたまらなかった。
「……そっか、そうだな、うん」
「そう、そうさ、じゃ、一緒に帰ろうぜ」
「ああ」

心の中でしか言えないけれど、堂々と思う。
この人と会えて、本当に良かった。

――そして中学時代という思春期に入って、私はまちがいなく赤木のことが好きになっていた。

――――

あと一時間足らずで、高校戦車道全国大会決勝戦が始まる。
何度ものチェックは済ませたはずなのに、やはりどうしても胸の鼓動が収まらない。両足も、小刻みに震えている。
高揚しているのか、ビビってしまっているのか――たぶん、どちらも混ざった結果だろう。何せ決勝戦前だ。
周囲を見渡してみるが、やっぱり誰も彼もが浮き足立ってしまっている――訂正する。丸山紗希は、戦車の上に座りながらで両足を揺らしていた。
戦車に乗ってしまえば、おのずと慣れはするだろう。けれど、こんな気分を引きずっていられるほど肝っ玉は太くない。
軍帽を被り直す、コートを整え直す。
見上げてみれば、空は他人事のように青い。決勝戦にはおあつらえの天候だ。
大きくため息。
とりあえず、戦車の中にでも閉じこもっていようかな。そう思い、三突めがけ足を動かし、
「あ、もしもし？　龍馬？　じ、実はその……緊張してしまったぜよ！」
――ガンマンのような手さばきで、ポケットから携帯を引っこ抜く。慣れた手付きで「通話：赤木」をタップし、携帯を一回転させてそのまま耳元に当てた。
『はい、もしもし。どした里子』
「あー、実は緊張してどうしようもないんだ」
『え、マジで？　大丈夫？　あと少しで決勝戦だろ？』
「ああ。だから、何か励ましてくれ」

「は、励ませってお前……」
「お前ならいいこと言えるだろ？　頼むよ、赤木『隊長』～」
『ンなこと言われても……が、頑張れ！　お前ならできる！』
「もう一声」
『ええ……どうすればいいんだ？』
　再び、空に目を向ける。どうしたものかねと、頭をふんわりと回して、
「――うん、うん。うむ！　帰ったら、デートするぜよ！　うん！」
　おりょうのその声は、それはもう盛大に響き渡った。
　恋愛大好きの武部沙織が、「へ～？」と近寄ってくる。大野あやが、デートっていいですよねーと接近する。カエサルと左衛門佐が、ほうほうそれでとにじり寄ってくる。
　包囲されたおりょうが、わーきゃーと声を上げている。
　一連のそれを見て、私の中の電球が光った。
「赤木」
『ん？』
「勝ったら、何かしてくれないか？　人間、褒美があるとやる気が出るだろ？」
『え!?　んー、ん～……』
　電話越しから、赤木が怨霊のように唸りまくる。それがとてもおかしくて、愛おしくて、私の口元なんて緩んでしまうのだ。
『そ、そう、だな』
「ああ」
『勝っても負けても、デートしようぜ』
「ああ、わかった」
　十分だ。
　私は、一旦の別れを切り出そうとして、
『あと、』
「ん？」
『――優勝したら、き、キスしてやる！』
　――ああ、まったく、こいつは本当にいい男だ。

「約束だぞ？」
『おうよ！』
「約束だからな？」
『わかったって！　ほら、はよ優勝してこい！』
「心得た」
　通話終了のボタンに、親指を近づけて、
「赤木」
『うん？』
「――大好きだよ！　はっはっは！」
　切る。
　さて、褒美は取り付けた。あとは、勝つだけだ。
　三突に振り向いて、コートを羽のように翻す。草を踏みしめながらで、私は軍帽を被り直し、いつものように音もなく笑うのだ。
　――大洗航空隊を優勝に導いた、この大空を仰ぎながらで、強く強く思う。
　歴史という大いなる舞台は、世界という巨大な会場は、意思があれば好きなように演出することだってできる。
　そうだろう？

誕生日企画
エンディング

カエサルの家にあるコタツでぬくぬくとしながら、左衛門佐とカエサルは冬休みの宿題をのろのろと終わらせていって、やがてカエサルが「終わったぁ」とぬるぬる宣言した。
そしてほぼ同時に、二人して天板の上に顔を這わせる。
いまは高校最後の冬休みで、１２月２４日で、クリスマスで、
「で？」
「で？」
とくに予定はないのだった。
つまるところ、虚無だった。
宿題を終わらせようとも、何も変わりはしなかった。
だから、常に威風堂々と生きようとしているカエサルだって「あー」と鳴くし、左衛門佐だって「へぇあー」とやる気なく漏らす。
テレビすら点けないまま、数分が経ったと思う。ロクに顔も動かさないまま、左衛門佐はザルに入ったみかん一個をやる気なく回収し、力なく皮を剥いていって、無気力にみかんの一切れを口にしていく。すっぱかった。
「なあ」
カエサルから声をかけられ、左衛門佐が「あ？」と返事。
「あいつら、今頃何やってるんだろうな」
「デートだろ」
カエサルが、適当に言う。
左衛門佐も、特に否定しない。
「二人で宿題を片付けて、ついでに家デートをして過ごしているんだろう。というか、そうやって貰わないと困る」
おりょうは最初、「一緒に宿題をしよう」と提案した。けれども気が利くカエサルは、「二人きりでやった方が捗るんじゃあないのか」と主張してみせた。

最初こそ口ごもったおりょうだったが、意図を察してかすぐに頷いてくれた。青井こと龍馬も、赤面混じりの沈黙で了承していたし。
――エルヴィンと赤木に関しては、カエサルからの「ほら仲良くやっとれ」で全て片付いた事を、あえて書いておく。
そうしたいきさつがあって、左衛門佐とカエサルはクリスマスの晩を二人で過ごしているのだった。
家デートを堪能しているであろう、おりょうと龍馬、エルヴィンと赤木のことを想像してみせて、左衛門佐は、
「……幸せに過ごしてくれてると、いいな」
カエサルは、うんうんと小さく頷いて、
「……だな」
しみじみと、そう肯定した。
その顔は、どこか心の底から嬉しそうに見える。
「ま、あいつらはこれからも上手くやっていくだろうさ。先に凱旋でもしてやってくれ」
「ああ。天下くらいはとって欲しいものだ」
カエサルが、目で「みかんくれ」と促す。左衛門佐は仕方なく、みかんの一切れをくれてやる。
「それにしても」
「ん」
「もう少しで卒業だが、どうするんだこれから」
現実的な話題を前にして、左衛門佐がやる気なく「へぇー」とため息。
「そう……だなあ……まだ、これといった夢はないんだよなぁ」
「プロ戦車道を歩むというのは？」
顔を天板に乗せたままで、左衛門佐は苦笑する。
「むりむり。やってみてわかったが、プロ級は無謀じゃないかなって思う」
「あーわかる、わかるぞ。本物の戦は、ほんと大変だよな」
「な、大変だな」
二年から戦車道を歩んでみたが、心休まる時期なんてものはひとた

びも無かったと思う。
連携が当たり前、一撃必殺上等、極めつけには廃艦の危機に、河嶋桃の留年、そして三年に入ってからも激戦に次ぐ激戦が繰り広げられたものだ。
一生分の戦車道を経験したと思う。これで戦車道が完結したとしても、正直悔いはない。
ほんとう、大変だった。
「卒業したら、戦車道は後輩たちに託すよ」
「そうか。これで、戦車道はおしまいか」
「そうだな」
カエサルが、「ふう」と息をつく。
「……実戦は、だけどな」
「お？」
天板の上に顔を乗せていたカエサルが、気恥ずかしそうににへらと笑って、
「……戦車道関連の、な」
「おお」
「……小説家になろうかなって、思ってる」
左衛門佐が「ほほー」と微笑む。
「全国大会を経て、それから無限軌道杯を優勝して、私は思ったよ。戦車道って、なんだかんだで面白いなって」
「ああ、だな」
「だから、戦車道とお別れするのが少し惜しくなってな。……だからその、小説で、戦車道の続きをしようと思って」
「うむ」
左衛門佐がうんうんと頷いて、
「歴女らしいな」
歯を見せて、これまで以上に笑ってみせた。
それで十分だったのだろう。カエサルも喜色満面の笑みを見せてくれた。
「そう……だな。私も何か、戦車道にまつわる何かをしてみようかな」

「ライバルにでもなるか？」
「一度小説を書こうとしたんだが、書きたいシーンまでが長くて長くて……へばった」
「そうかぁー」
　それ以上、カエサルは何も言わなかった。
「……あいつらはどうするんだろうな。おりょうは、とりあえずは聖地巡りがしたいんだっけ？」
「ああ。……エルヴィンは、歴史学者を目指すようで」
「向上心があるからな、あいつは。きっとなれるんじゃないか」
「ああ、私もそう思う」
　静かすぎて、時計の音がはっきりと聞こえてくる。
「――赤木は？」
「戦闘機道で食っていくってさ」
「やっぱり」
　左衛門佐が、だろうなーと笑う。
「で、竜馬（青井）は警察官になろうとしているんだっけ」
「そうそう」
　左衛門佐の言葉に対し、カエサルは「んむ」と応える。
　左衛門佐は、みかんの一切れを指で切り取りつつ、
「あいつは真面目だし、運動もできるから、きっとなれるだろうな」
「ああ、なれるだろうな」
　異論はない。
　青井は龍馬と名乗れるほど、堂々と成長してみせた。おりょうさんの男に、なってみせた。
　当初は頼りない面も見え隠れしていたが、今となっては背が伸びたように思える。背筋がピンとしたのだろう。
　だから左衛門佐もカエサルも、おりょうと龍馬のことを喜んで祝福できるのだ。エルヴィンと赤木に関しては、何を今更だ。
　話に一区切りがついて、両者の目と口が線になる。予定が無いからこそ、コタツの暖かさが身に染みる。
　――そのとき、男女の声が窓を通じて聞こえてきた。それはとても

とても、明るかった。
「なあ」
カエサルの質問に対し、左衛門佐は「ああ」と返事する。無表情で。
「――彼氏、欲しいか」
「ああ」
間髪入れず。
そうしてカエサルが、どこか遠くへ思いを馳せるかのように両眼をつむっていく。左衛門佐は、ただただそれを見届ける。
「あいつらさ」
「ああ」
「今頃、何してるんだろうな」
左衛門佐も、同じように目を閉じてみる。
そして真っ先に思ったことは、思ってしまったことはといえば、
「……キスとか？」
左衛門佐は、すこし顔を赤らめながら、そう言った。
それに対してカエサルは、ほんのちょっと間を置いて、
「……それだ」
――
「っくしょい！」
「ど、どうしたぜよ龍馬、風邪でも？」
隣に座っていたおりょうが、不安そうに青井を伺う。
対して龍馬こと青井が、「いやいや」と首を左右に振るってみせた。
「だいじょうぶだいじょうぶ」
鍋から、軍鶏を彩るもも肉を箸で摘んで、
「おりょう印の軍鶏があれば、疲れも寒気なんて吹っ飛ぶよ」
「あ、ありがとうぜよ」
青井とおりょうは、青井の家で鍋をつついていた。親の気配りにより、現在は二人きりである。
だから、家の中はいつもより静かだった。聞こえてくるは、鍋のお湯が沸き立つ音とおりょうの声だけ。テレビはあえて点けていない。
「ほんとう、おりょうは料理が凄く上手いよね。食べても食べても、お

腹が空くばかりだよ」
「そ、そんなことないぜよ」
「おりょうが居てくれたおかげで宿題もすぐ終わったし、おりょうには頭が上がらない」
「りょ、龍馬がいてくれたから、私も……」
おりょうの口元が、「～」と曲がる。
「しかも、戦車道も超一流。文武両道とはおりょうのためにある言葉だね」
「そ、そんなことっ」
「あるよ」
青井は、きっぱりと言って、
「今年の無限軌道杯で、おりょう達は大活躍したじゃない。決勝相手の聖グロリアーナ女学院の戦車も、四両ほど討ち取ったし」
「そ、そこまで覚えてっ？」
「当たり前だよ。だって友達が、おりょうが活躍したんだからね」
実になんでもないような口調で、青井はさらりと口にしてみせる。
おりょうはうつむいてしまって、「うう」と唸る。かわいい。
「僕も見習わないといけないな」
そこでおりょうが、がばっと顔を上げる。
「りょ、龍馬だって十分に頑張ってるぜよ。警察官になるために、日々鍛錬を組んでいるしっ」
「教師に勧められたからだよ。剣道が好きなら、警察官になってみないかって」
「それでも、その道を歩もうと決意できた龍馬はすごいぜよ」
「ありがとう。おりょうがそう言ってくれるのなら、僕は喜んで警察道を歩むよ」
ネギを食べる。ぴりっとした感覚が味覚を震わせ、染み込んだ汁が舌にじっくり染み込んでいく。
食欲がいよいよもって増していく。鍋から肉を、しいたけをつまみとっていく。
「それで」

「うん」
「おりょうは、将来の夢とかはあるのかい？」
「うーん、それは……」
おりょうが、鍋からえのきを引き上げる。白かったはずのえのきは、汁のおかげですっかり黄色い。
「まだわからないぜよ。戦車道を歩むもよし、普通に働くもよし。とにかく、真面目に生き抜きたいぜよ」
「そうだね、それがいいと思う。とりあえず、その、焦らないで」
「うん。とりあえずは……聖地巡りさえできればなんでもいいぜよ」
坂本龍馬好きとして、青井は心の底から頷いた。
「行ってみたいよね、聖地」
「行ってみたいぜよ、聖地」
青井は、自分なりの夢を見つけることができた。おりょうは、これから夢を探すつもりでいる。
けれどこの憧れだけは、坂本龍馬好きとして断固譲るつもりはない。いつかはおりょうと、赤木と、カエサルと、エルヴィンと、左衛門佐と一緒に、聖地で写真撮影食べ歩きお参りをするつもりでいる。
――肉を、何度も何度も噛みしめる。熱と弾力めいた食感が、空腹感をいつまでも引き立たせる。
「みんなと聖地巡りができたら、あとはもう思い残すことはないかな」
「うむ。私も、」
おりょうの言葉が、ふと途切れた。
なんだろう、と思う。
「……いや。ある、ぜよ。絶対に、やりたいことが」
え。
――おりょうが、ゆっくりうつむいていく。鍋に触ることもなく、青井のことを見もせずに。
不意な空気に、青井はただただ黙ることしかできない。下手な事を口走れるはずもない。何とかしたいという衝動を抑えたまま、数秒、また数秒が過ぎていって、
おりょうが、そっと、その首を上げた。

目が、合った。
「……龍馬と」
おりょうが、息を吸って、
「青井と、結ばれたい」
熱が籠もった鍋から、絶えず音が聞こえてくる。泡が弾け飛んでいるからだ。
この家には、自分とおりょう以外に人がいない。父と母が、余計な気を遣ってくれたせいで。
そして僕の目の前にいるおりょうは、間違いなく本心本音を口にしていた。顔を真っ赤にしてまで、決意を口にしてくれた。
おりょうの揺れ動く瞳が、僅かに伝わってくる吐息が、思わず目を逸らされたことが、どこまでも愛おしい。自分の、男の衝動が初めてかき乱される。
「おりょうっ」
おりょうは、勇気を出してくれた。
だからぼくも、おりょうに応える。
「あっ」
おりょうの両肩を、掴んでいた。
「だ、だめ」
それだけだった。おりょうは、何もしないでくれた。
顔を近づける。おりょうが震える。けれども両目をつむる。そっと髪を撫でる——笑ってくれた。
「……武子」
「……青井」
——
「っくしょい！」
「お、どうした？　悪い噂でも流されてるのか？」
「かもしれねー」
宿題を終え、松本里子（エルヴィン）を家まで送り届けている最中に、赤木はこれまた盛大なくしゃみを吐き出した。
夜八時だからか、ずいぶんと冬の夜空に反響したと思う。

「なんだなんだ、心当たりでもあるのか？　ん？」
「いやわかんねえけど……まあ、ライバルは多いしな。色々言われてるかもな」
　ライバルという言葉に対し、里子は「あー」と声を上げて、
「そういえばそうだったな。今やお前は、注目の戦闘機道プレーヤーだしなあ」
「お前のお陰でこうなったんだぞ」
「何のことやら」
　里子が、知らぬ存ぜぬとばかりに両手を曲げる。戦術ノートまで書いてきて、大洗航空隊を強くしてくれた癖にだ。
　何だか押されっぱなしというのも癪なので、自分からも何かつっついてやる。
「そういうお前こそ、どうなんだよ」
「ん？」
「無限軌道杯で優勝してからというもの、プロリーグへのスカウトがやってきたんだろ？　お前だけ楽にはさせねえよ」
「あーあれな。断っても断っても『ぜひ！』とかうるさいんだよなあ」
「当たり前だろ。強豪聖グロの重戦車を、さんざん撃墜してくれたんだから」
「西住さんの指示が良かったんだよ」
「こいつめ」
　赤木が、それはもう捻くれながら笑う。エルヴィンも、「へっ」と歯を見せて微笑んだ。
「私はあくまで、歴史学者への道を歩む。戦車道は、あれで最後だ」
「そうか。ま、お前らしいと思うよ」
「ああ。お前もな」
　見上げる。
　１２月２４日の夜空は、なんだかいつもより澄んで見える気がする。いつも空ばかり見てきた身だが、こんな感想を抱くのはずいぶんと久々だ。
「綺麗な空だな」

たぶん、隣に里子が居てくれているからだろう。心から、そう思う。
「……確かにな、本当に綺麗だな」
「おい、そこは『君のほうが綺麗だよ』って言うところじゃないのか」
「やだよハズいし」
「うわー悲しいなー、彼女としてかなしーなー」
「言ったら言ったらで、どうせからかうんだろお前は」
「よくわかったな」
「よくわかってるよ」
里子と付き合って、かれこれもう数年が経つ。反応のパターンなんてものは、嫌でもお見通しになってしまうものだ。
だから里子も、へらへら笑うばかりで責めはしない。この状況を楽しんでさえもいる。
「里子よう」
「ん」
「付き合って何年だっけ？　俺ら」
「一年ちょいじゃないか？　去年の文化祭から付き合い始めたし」
「そっかー、もう一年も経過するのか」
それまでに、ずいぶんと色々なことをやらかしてきたと思う。
デートはもちろん、一緒に寝泊まりだってしたし、キスだって交わしあった。時にはケンカしたりもしたが、大抵は気まずくなって、ほぼ同時のタイミングで謝り倒しあったものだ。
たぶん、これからもこんな風に関係が続いていくのだと思う。
「なあ、里子」
「うん？」
「これからもずっと、こんな感じで付き合っていけるよな？」
これからもこんな風に、関係が続いて欲しかった。
「ああ、私もそれを願ってる。……でも、通う大学は違うからなぁ」
「……そうだな。離れ離れになっちまうよな」
「仕方がないさ。私にもお前にも、夢があるんだから」
「そっか。……こんな風に、お前と一緒に歩けるのも、しばらくはお預けになっちまうのかな」

これからもこんな風に、関係が続けば良いのに。
――抱けた夢というものは、それはもうあまりにも大きすぎた。譲れるはずがなく、捨てられるものなどではない。ひたすらに追い続けたくなってしまう存在。
そんなこと、赤木も里子もわかっていた。
だから里子は、無言で肯定した。
□
里子の家まで、あと数分というところで、
「あ」
雪が、音もなく降ってきた。
赤木と里子が、その場で立ち止まる。なんとなく雪を手のひらで受け止めてみて、あっさりと溶けてしまうそれを目にして、何となく寂しく思う。
――なにやってるんだか。
高校最後の冬休みだというのに、大洗戦車道も大洗戦闘機道も優勝できたというのに、何をしみったれた気分に浸っているんだか。
せっかく夢を掴めそうなのだから、迷いなく里子を愛すると誓ったのだから、気の利いた言葉を一つでもかけてみろ。
「里子」
「ん？」
「……その、綺麗だな」
「ああ、綺麗なものだな。ホワイトクリスマスっていうのは」
「……お前のほうが、綺麗だよ」
里子が、ぷっと吹き出す。
「おいおい、いま言うかそれ」
「んだよ、いいじゃねえか別に」
「まあいいけどさぁ」
再び、前へ歩む。
「なあ、赤木」
「うん？」
「……大好きだよ」

「……俺も、俺も、里子が好きだ。里子がいなかったら、俺はもうだめになっていたと思う」
「そうか。感謝しろよ？」
「ありがとう」
それからは、ずっとずっと無言のままだった。
里子が、腕を組んできてくれたから。
――それから数分が経って、里子の家の前に到着する。
里子はそっと、赤木から離れていく。そうして、いつもの不敵そうな笑みを浮かばせるのだ。
「送ってくれてありがとう」
「彼女を一人で歩かせるわけにはいかないだろ？」
「このイケメンめ」
「前もそうしてただろ？」
「だな」
互いにけらっけら笑う。いつもの調子が戻ってきたようで、胸がすっとした気分になる。
「……じゃ、今日はこれで」
「ああ。なんというか、その、頑張れよ」
「うん。……竹下も芝村も、戦闘機道のプロになれるよう応援してる」
「サンキュ。じゃ、またな」
「また」
――胸がすっとした、はずだったのに。
家へ帰ろうとしているエルヴィンの後ろ姿を目の当たりにして、途方もない未練が襲いかかってくる。根拠のない不安が、頭上から降り掛かってきた。
もう会えない、そんなことはないのに。数年はデートすらも叶わない、夢を掴むためには仕方がないことなのに。何かやり残したことは、キスだってした。
考えた。エルヴィンの背中を見つめながら、なにか出来ることはないかと必死に思考して、
「里子！」

里子が、そっと振り向く。
「大好きだ！」
里子の目が、見開かれる。
「絶対に、絶対に！　結婚しようッ！」
できることを、ようやく見つけた。言うべきことを、実現できた。
俺はきっと、正しいことが出来たのだと思う。世界の流れに、乗ることが出来たのだと想う。
だから里子は、俺のところへ戻ってきて、もう離すまいと抱きしめてくれたんだ。
「わかった！　仕方がないやつだなあッ！　もうッ！」
ああ。そう、そういえば。
――里子の涙を見るのは、これが初めてだ。